

大正二年三月發行

校友會雜誌

第拾壹號

山口縣立萩中學校校友會

城 兒玉才三 加藤萬壽夫 松原淨二 三木定治
富田穰

○第四學年選拔文 平山茂 石川長介 小川義雄
山下真一 幸月富士昌 堀勘市

○第五學年選拔文 村田芳彦 竹内久治 樺武忠
増野雅治

My First Trip 4th year Y. Takeshige
The Battle of Kōan 4th year I. Shimose

General Nogi 5th year H. Shiraishi
Be Independent and Free... 5th year M. Kawasaki

Cianda 5th year J. Ueoka
General Nogi 5th year K. Katori

Our School Excursion 5th year M. Akagawa

講壇 百二頁

○拜禁闕詩畧解 特別會員 金子 乙介

○選書展覽會の書に就きて 特別會員 安藤 紀一

○松陰追慕會に於ける村上會長講話の要旨 H、F生筆記

..... H、F生筆記

○陸軍中佐國司伍七氏講話の要旨 柏村 稔三 筆記
枝村 英介

..... 柏村 稔三 筆記
枝村 英介

○久原房之助氏演說の要旨 H、F生筆記

..... H、F生筆記

附 錄

..... 百二十九頁

○山口縣立萩中學校沿革略 ○職員表 ○學級數及生徒

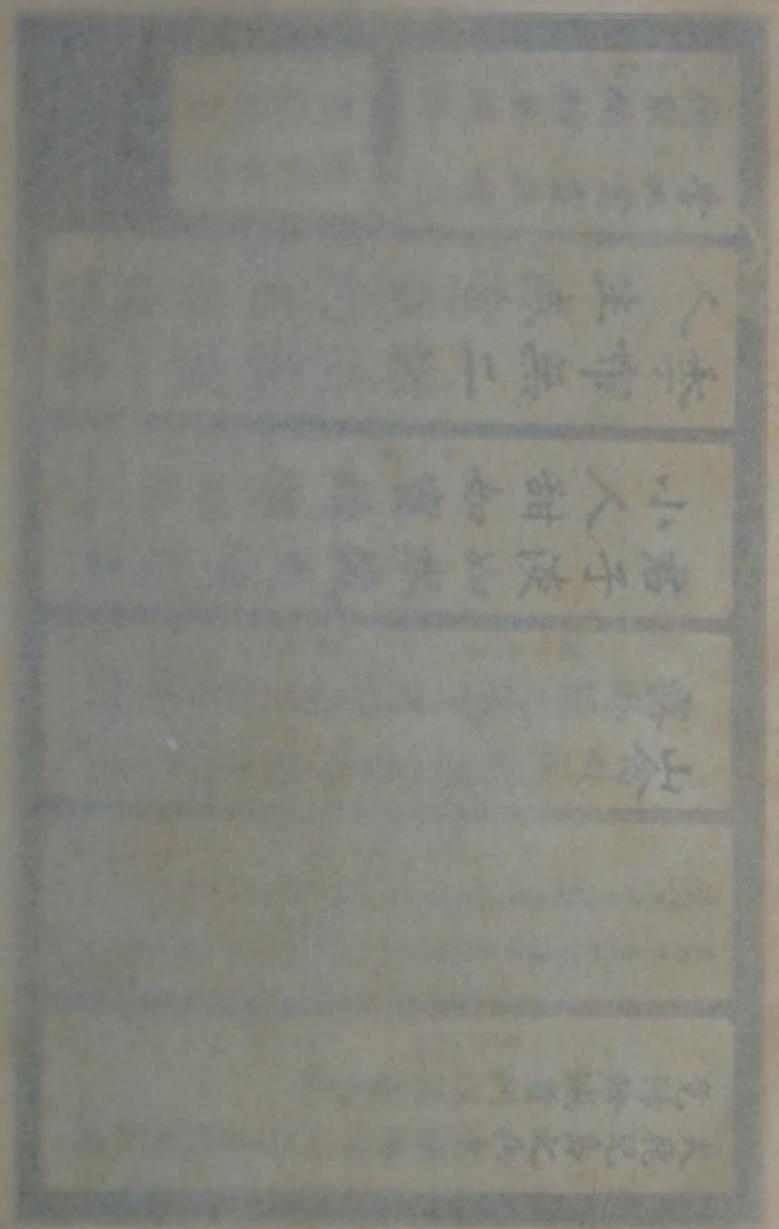
數表 ○武學貸費生表 ○卒業生一覽

~~~~~

男兒生ニ斯世ニ醉生夢死、一無可稱道者、不啻宰

負君父、將何以俯仰天地

吉 田 矩 方





(イ) 第二學年 松本正人  
 第四學年 飯田治郎  
 第五學年 三上孝之  
 第四學年 波邊佐



同 (其 二)

(ホ) 第五學年 野田保男  
 第三學年 片岡勝資  
 第一學年 水松三代

山縣中學校 校友會雜誌 第拾壹號

會 報 (自明治四十五年一月至大正元年十二月)

各部長の互選

四月八日午後、本會各部長の互選行はれ、左記諸氏當選せられたり。

- |     |       |     |        |
|-----|-------|-----|--------|
| 柔道部 | 中村 正治 | 劍道部 | 長東 有隣  |
| 野球部 | 丸本庄太郎 | 庭球部 | 田中 市郎  |
| 漕艇部 | 山本百合熊 | 辯論部 | 松本 喜一  |
| 書道部 | 安藤 紀一 | 書道部 | 田總百合之助 |
| 游泳部 | 相島 直一 | 雜誌部 | 藤井 百輔  |
| 賞品部 | 藤原 甚吉 | 同   | 粟屋 周祐  |

各部委員の互選

四月二十九日、各部委員の互選行はれ、左記諸君當選せらる。

(姓名上の数字は學年をしめす)

會 報

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 劍道部                     | 5 片山 平作 5 原田 景三 5 篠田 直武 |
| 柔道部                     | 5 松尾 潔 4 堀田 泰輔 4 後藤 琢一  |
| 3 加藤萬壽夫 2 行本 盈二 1 吉岡憲次郎 |                         |
| 5 口羽 忠介 5 香取 敬藏 5 堀 信一  |                         |
| 5 池田 猛 4 山田 健三 4 植田 源熊  |                         |
| 3 西林 鴻介 2 吉由 稔 1 大野 寛   |                         |
| 5 長岡 正人 5 井町 照久 5 原田 景三 |                         |
| 5 野田 保男 4 石津 渚 4 岡村 禎祐  |                         |
| 5 上利 祥介 5 赤川 勝 5 原田 勝二  |                         |
| 5 内山 芳忠 4 數藤 直衛 4 永松 元治 |                         |
| 3 益田 兼施 3 岩崎 芳彦 2 河野 道  |                         |
| 2 中野 常二 2 田中 忠介 1 津田 信一 |                         |
| 5 菅村 繁 5 村木 義一 5 堀 實    |                         |
| 5 郡司 又一 4 山下 眞一 4 松浦 時行 |                         |
| 3 三好 市郎 2 岡崎 虎熊 1 和田 義忠 |                         |
| 5 卜部 豊 5 河崎松之助 5 野村 四郎  |                         |
| 5 柳屋 良輔 5 馬場 健一 5 藤田 俊彦 |                         |
| 4 鈴木 勉 4 野上猛三郎 3 齋藤 八郎  |                         |

書道部

雜誌部

辯論部

松陰追慕會

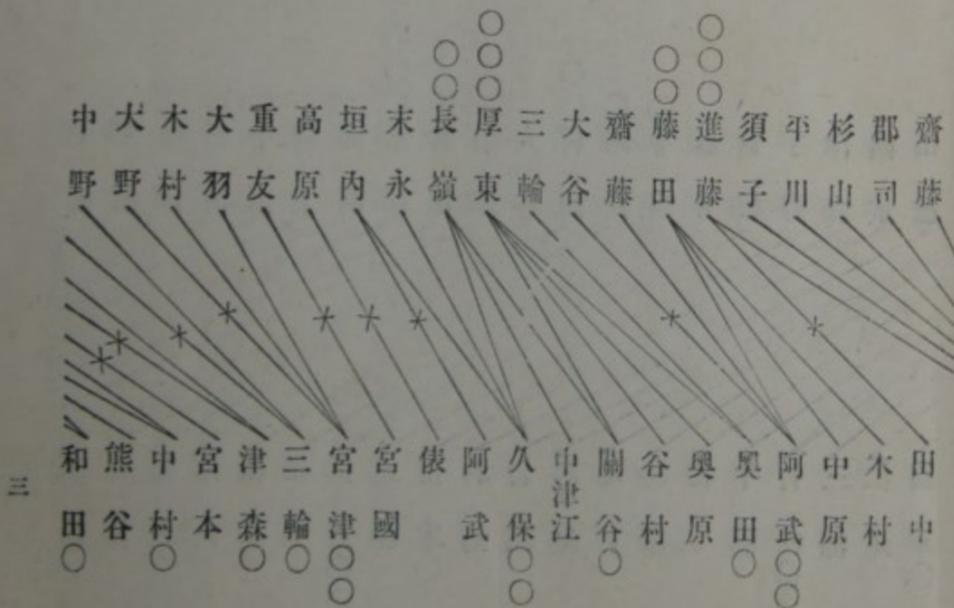
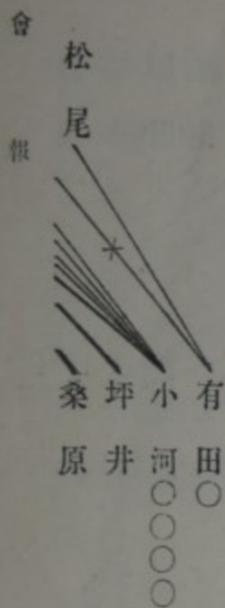
3 三上 勝象 2 磯部 千尋 2 藏田 正一  
 2 櫻井 義彦 1 中本 義助 1 椋木 正利  
 1 倉重 義雄

5 内山 芳忠 5 卜部 豊5 森重 幡雄  
 5 三上 孝之 5 池内 清5 白石 英男  
 4 松村 秀之 4 渡邊 佐3 阿部 頼音  
 3 田總 時俊 2 松村 正一 2 須子 英一  
 2 松本 正人 1 三輪 杉門 1 花村 吉萬

2 厚東銀六郎  
 5 柏村 稔三 5 口羽 忠介 5 枝村 英介  
 5 増野 雅治 5 鈴川 清5 大田 元助  
 4 光本 照夫 4 幸月富士昌 3 松原 淨二  
 2 柴田 省三 2 吉田 操 2 戸塚 端  
 2 松浦 梁作 1 兒玉 義清 1 中津江延彦

1 木村 幸一  
 5 枝村 英介 5 柏村 稔三 5 上岡讓熙 雅  
 5 増野 雅治 4 下瀬 一郎 4 藤井 武  
 3 片岡 勝資 3 馬庭 長一 2 清瀬 勘一

第一の理由たるに疑なきも、尚技の幼稚にして、其要領を得ざりし結果たらずんば有るべからず。益研究考慮すべきなり。當日の技にて、最多かりしは「押込」にして、之にて勝負を決したるもの、其半を過ぐ。大腰脊負投之に次ぎ、巴投足掃は稍少く、跳腰掃腰其稀に、絞技をなす者に至りては、二三を數ふるのみ。其他釣込足、横掛、大外刈、體落、膝車等は特に寥々たりき。西林、堀尾二君は、新進の勇士にして、平素の手練芽出度奏功せり。益々奮勵あらむ事を望む。中山君の技漸く有望となり、山田君、須藤君共に將來恐るべし。二君に望む所は、今少し敏活ならむ事に在り。大將池田君の技愈妙にして、電光の閃き、石花の散するが如し。白軍の勇將枝村君の雄を以てしても遂に如何ともする能はざりき。左に當日の番組勝負の様を紹介せん。

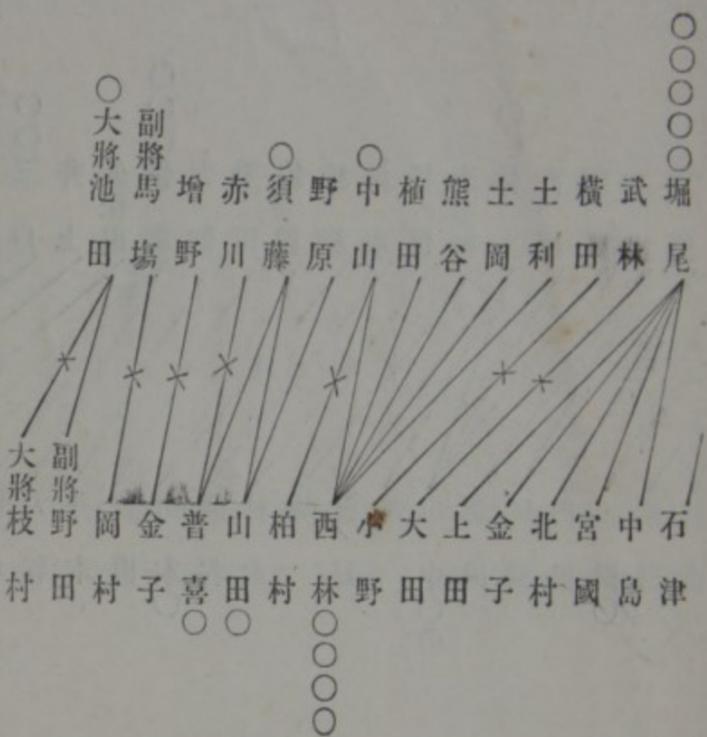


十一月二十一日、午後零時三十分より、例に依り、講堂に於て、松陰追慕會を行はれる。講堂正面には、安藤教諭の手に成れる松陰年譜の四大幅を掲げ、其前に、先生の肖像を安置せられたり。校長は、豫め印刷し置かれたる先生が、野山獄中より野村和作（靖）氏に與へられたる書翰の一節を配布し、一場の講話を試みられ終りて、松陰神社に參拜せり。講話の要領は、講演欄に收む。

柔道部記事

明治四十五年、六月二十三日（日曜）をトし、我柔道部は、春季大會を舉行す。校長諸先生を初め、其他來會するもの數百名あり。殊に演武者二百三十五名の多きに達したるは、未曾有の盛況となす。多幸なる我部の健兒よ、尙之に満足する事なく、益々奮勵せよ、努力せよ。不肖、茲に諸君の嘲笑を願はず、當試合に就きて、簡單なる批評を試ん。此試合を見て、何人も意外とするは、引分の多き事なるべし、當日百六十九本の勝負中、六十二本は引分となりたり。是何に起因するか。試合時間を著しく短縮せしは其





七月二十三日、縣立山口中學校に於て武道聯合競技會を開く。我校よりは、柔剣道選手各八名宛を選抜して之に出席せしむ、二十一日午前九時、各選手は三臺の馬車に分乗し、校友諸氏の歡呼に送られて校

### 柔道部

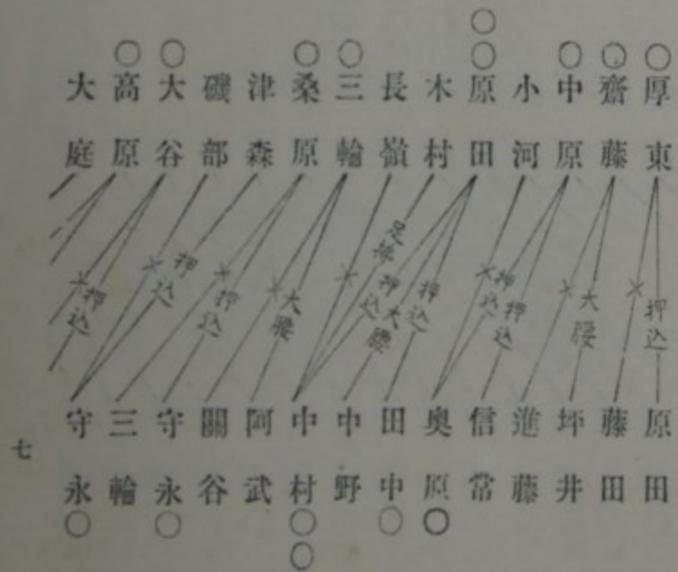
- (國學)松尾 正雄君 跳腰
- ×(國學)香川 一郎君 脊負投
- (鴻中)中村 岩吉君 押込投
- (師範)森野 元一君 押込投
- (師範)福住 禎一君 脊負投
- (山中)田村 修爾君 抽投
- (鴻中)小野 伴六君 片十字絞
- (師範)有田 環作君 跳十字絞

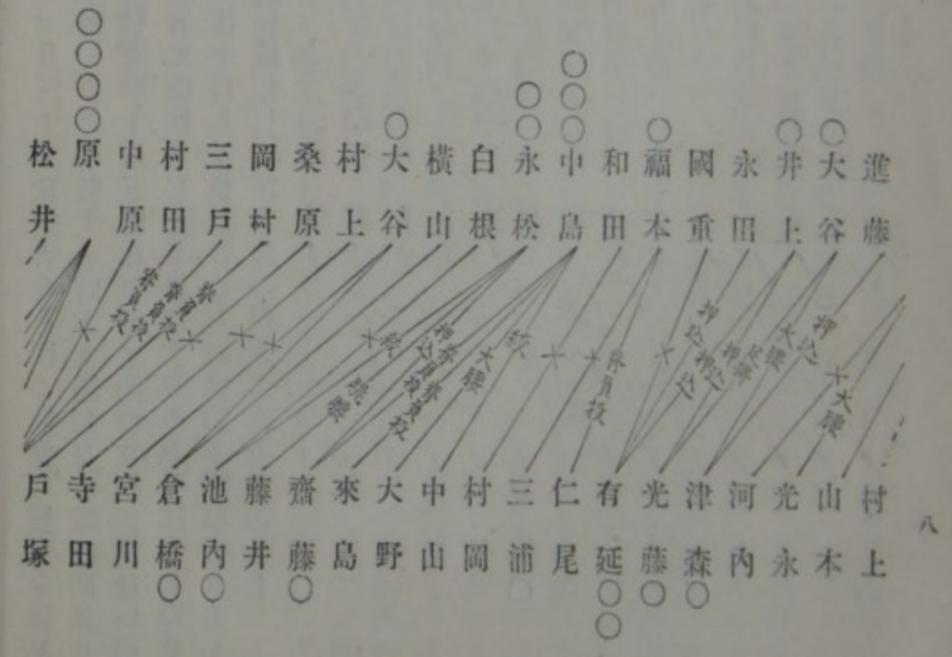
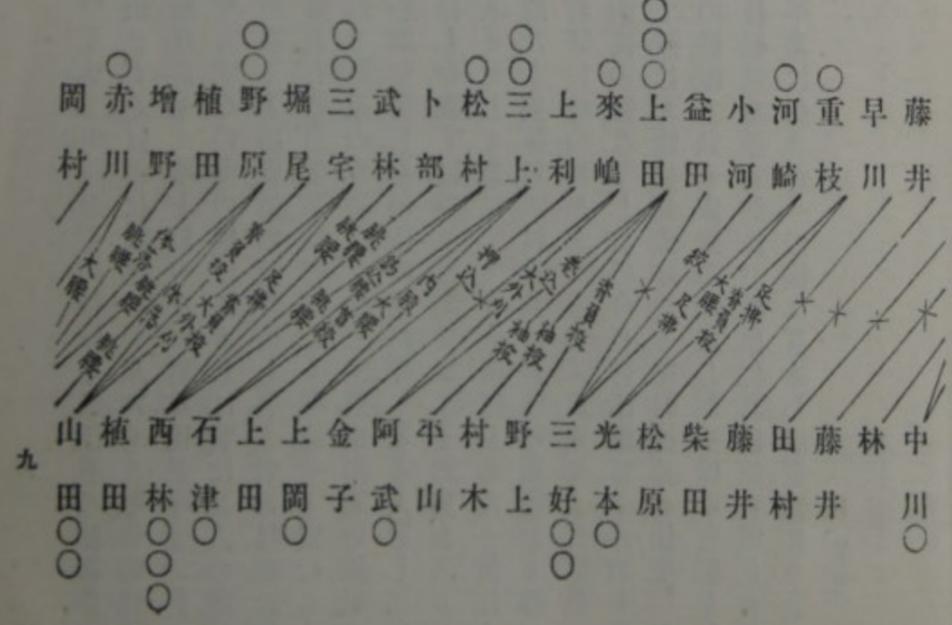
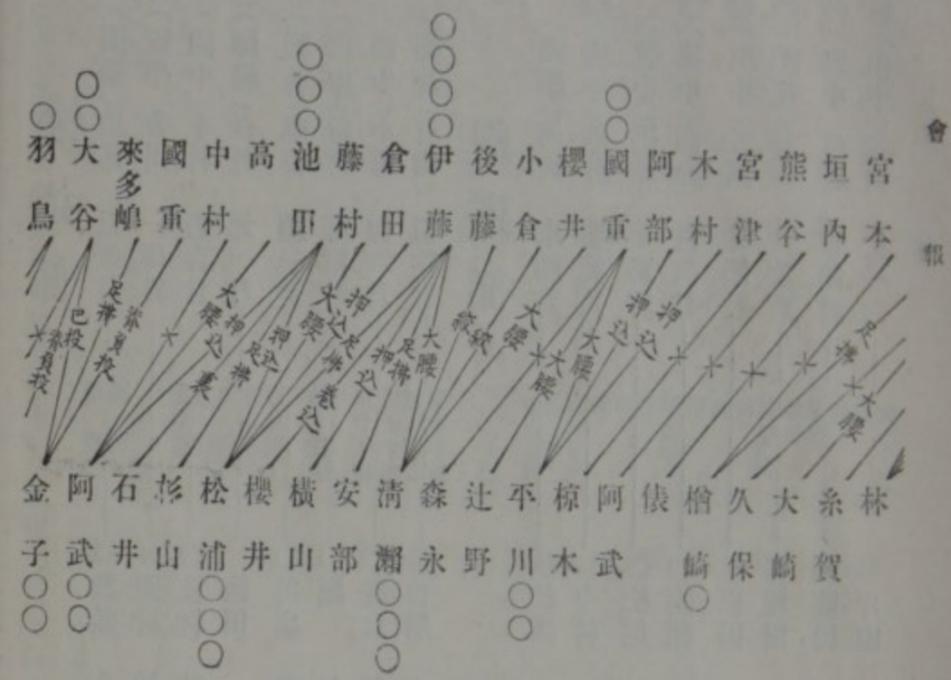
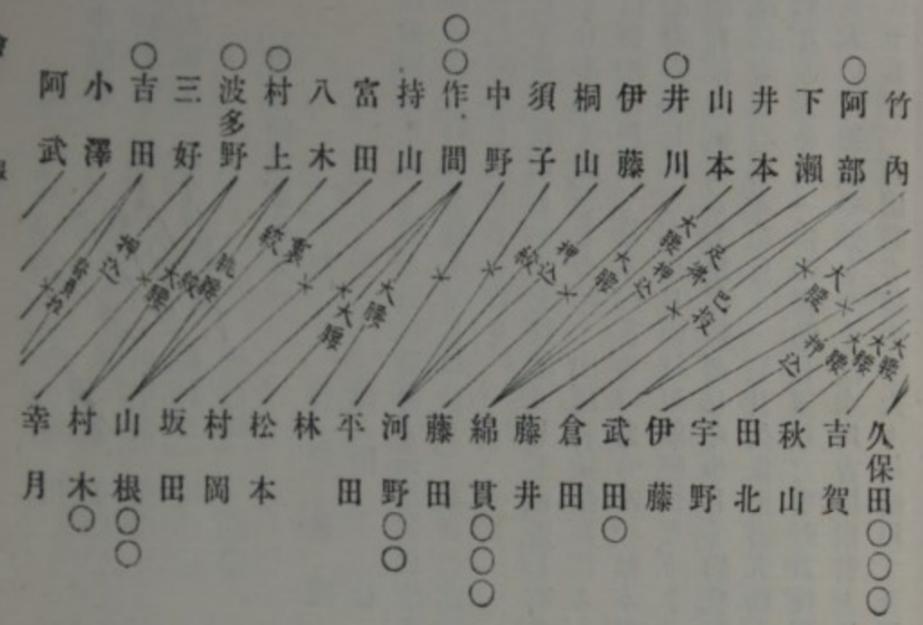
### 剣道部

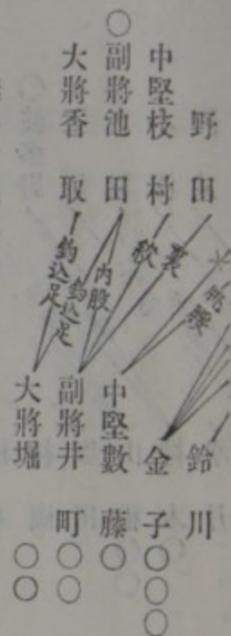
- (國學)河崎 幸祐君 面手
- (鴻中)國分 勝範君 面手
- (豐中)掛部 泰君 突
- (德中)高松 百次君 突
- (山中)竹原 二郎君 面手
- (師範)谷 攻君 面手
- (岩中)山縣 重郎君 面手
- (山中)若山 丈一君 面手

門を辭し、夕景山口町に到着し、上立小路中川旅館に投宿せり。茲に終日の疲勞を慰め、翌二十二日には選手相提携して、武徳會支部道場、中學校道場、高商道場等に手足の凝を醫し。翌日の試合の功名を夢みつゝ、一日を暮せり。明れば二十三日、勿々朝食を喫し、意氣揚々として、中學校道場にと打向ふ。縣知事、會長、事務官、學校長、職員等の來賓數十名列席せらる。居並ぶ百四十有餘名の各學校選手は、いづれも一人當千の勇士ならざるはなし。午前は柔道、午後は剣道と定めらる。入り變り立かはり、秘術を盡して相戦ふ様、獅虎相搏つに似たり。茲に吾校柔道部は、燦爛たる功名を博し、優勝無双の名を縣下に轟かし。永年の名譽を失墜せしめず。剣道部にては不幸にして、其結果良好ならざりしかども、精神技術に於て、前年に比し、進歩顯著なるは、何人も認むる所なり。會後、演武者一同は寄宿舎食堂にて、茶菓の饗應を受けたり。今左に試合の、再校に關するものゝみを挙げ、諸君當日の思出に供せんとす。(C、K生)

十一月三十日秋季大會を開く非常の盛會を極め演武者約二百名午前十一時より激烈なる試合開始せられ奮撃突戰午後五時に至りて閉會す演武者はいづれも元氣充溢觀者をして思はず快哉を叫ばしめぬ殊に従來往々にして批難されし禮容頗る整ひ吾人をして愉快に感ぜしめたり其番組並に勝負左の如し







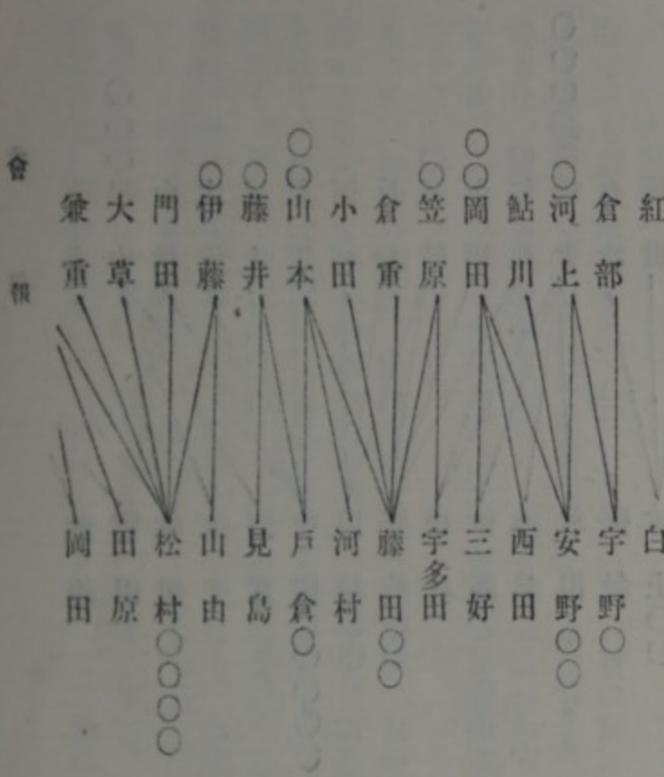
講道館柔道投之形

今回は前回に比して技と云ひ姿勢と云ひ其の進歩著しく頗る吾人の意を強くせしめたり。本日の成績につき一二妄評を試むるを許せ。

垣内君平素の腕前を示すを得ざりしもの蓋し時の運か悲しむ事なく練習をつめ。中島君技體共によし錬磨せば將來に於いて見るべきものあらん。福本君平素熱心の効空しからず今日の技至極輕快なりき。齋藤虎雄君技敏捷なるも足に隙多し今少しく研究勉勵せば遂に未來の覇者たらん。原君久保田君天晴今回の花形なりき今後一倍の奮勵を望む。中野君技體共に堅實大いに錬磨の効をつまば中川吉田兩君と比肩するに至らむ。吉田君有望の士たり切礎以て吾部の

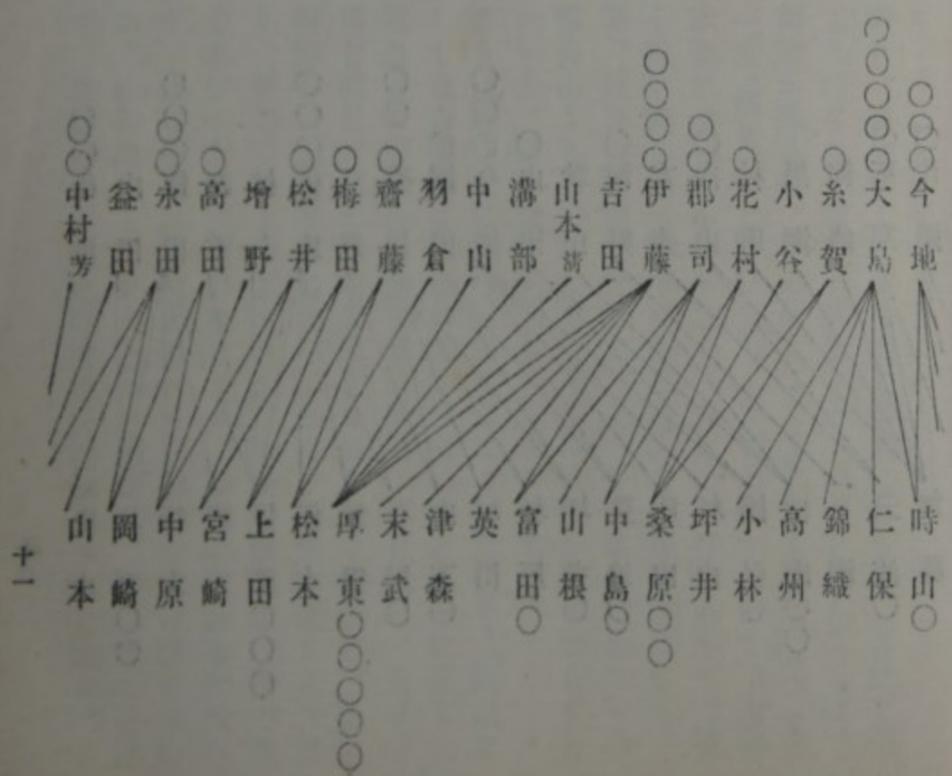
### 劍道部記事

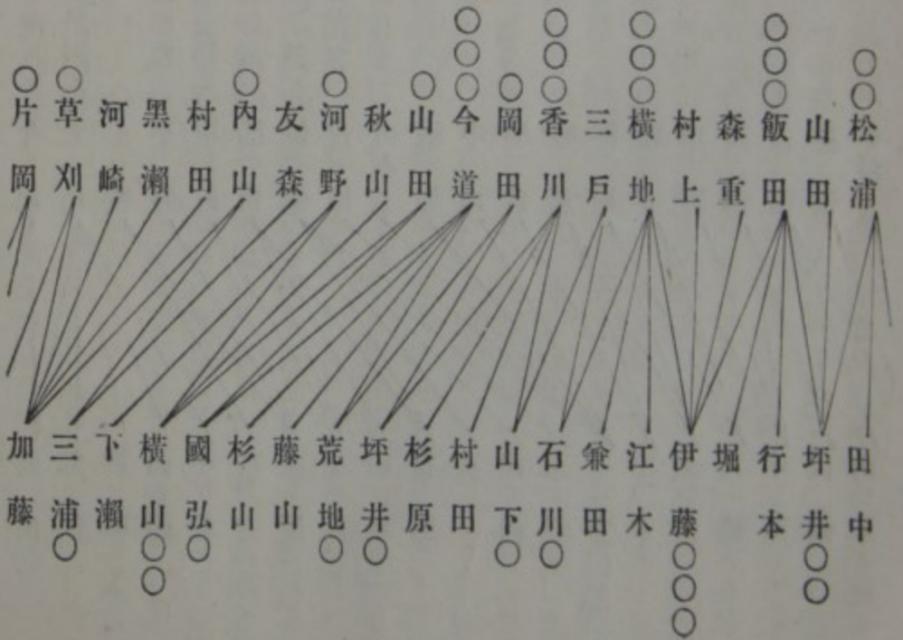
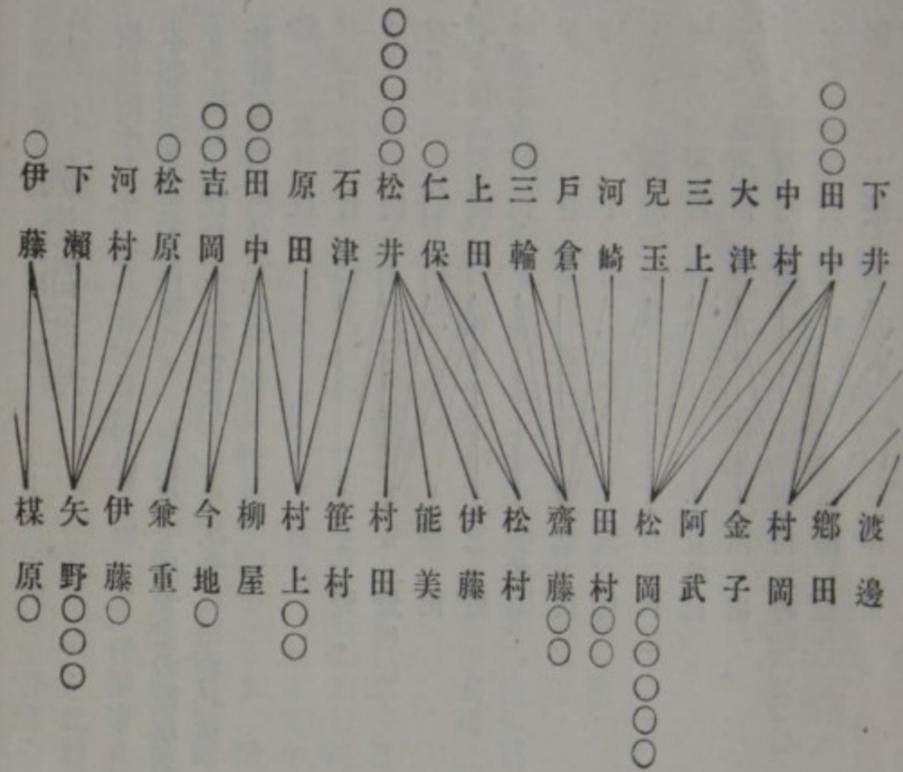
明治四十五年、五月廿七日、午後一時より、例により、本部春季大會を開催せり。校長以下諸先生の臨場あり、長束、西村兩教師審判の下に試合は開かれぬ。其番組並に勝負左の如し。



爲につくせ。中川君その技頗る敏活且つ體軀頗る健奮勵撓まざるに遂に我部の明星たらん唯足の踏み方に一層注意せん事を望む小河君益田君平素の熱心に似もやらずその勢の振はざりしは實に吾人の遺憾とする所なり上田君業の進歩著し吾人君の將來に屬目す西林君三好君近來技體著しく發達せり望むらくは鍛鍊以て斯道の爲につくせ三宅君山田君野原君平素の熱心効を奏しその技の晴れやかなる人をして快哉を叫ばしむ願くば益々奮勵せよ金子君驚き入りたる早業人々をして思はずアツと叫ばしめたり眞に本日白眉たり須藤君岡村君共に吾部の重鎮たり殊に斯道の君等に待つ甚だ大なり乞ふ自愛せよ井町君一時意氣消沈の體なりし君の今日の活躍當年の君を忍ばしめて誠に天晴に見受けたり堀君技益々佳境に進む今日の働振り只々感服の外なし尙一層の奮勵を乞ふ其他長嶺君桑原君進藤君桑原仁君松原君堀尾君枝村君等平素に引きかへて振はざりしは遺憾なりき

(K, K生)





右に付き聊か所感を述べむか。當日の演武者は實に八十有餘組にして、未曾有の盛況なりき。然れども、徒らに、演武者の數多きを以て盛況とは云ふべからず。尙、一層、我々の注意を要する者あるを覺ゆるなり。



此の日、初めの程は、禮義を粗畧にし、或は、刀の持ち方をあやまり、初終の禮を忘れ、試合中、道具とけて、數々、審判官に注意せらるゝ等の事ありて、觀衆も、多少、倦怠の色ありしが、終りに近づくと及び、次第に元氣加はり、禮儀も備り、自ら、觀衆をして嚴肅ならしめたり。然れども、試合中、或は、無用の言を弄し、或は、ことさらに、滑稽を演じ、觀衆の笑をまねき、又は、其技の妙を弄して、返つ

て、すきを生ぜしも見受けられたり。抑も、劍を學ぶは、其術を學ぶにあらず、其道を學ぶものなり。若し、武道より、禮儀を取り去らば、何物か残らむ。斯の如きは、只蕃人の角闘のみ。又、一度、劍を以て相向ふや、物具、とけたりとて、敵に休戦を申し込み得べきや。刀背にて打ち込みて、能く敵を斃し得べきや。此等の諸君は初學者にして、尙、試合の經驗に乏しく、従つて、試合に恐るゝの傾向ありしものにして、未だ深くとがむべからずといへど、而も默許すべきにあらざるなり。

終りに近づくと従ひ、元氣加はり、禮儀備り、觀衆をして自ら嚴肅ならしめしは、以て多とするに足る。然れども、試合の間、或は無用の言を發し、或は滑稽を演じ、以て觀衆の笑をまねきしは何故ぞ。敵と相對し、正肅なる禮儀のもとに、生死を決するに當り、無用の言を弄ぶべきか、滑稽を演じて、他の笑を求むべきか。技の妙を弄す、亦何の故あるを知らず、彼、區々たる技を弄して、劍士たらむ事を望むか。此の如くんば藝人と何ぞ選ばん。吾、ここを以て、演武者の多數を以て盛況と云ふべきを疑ふ。そ

れ劍は道を學ぶものにして、技は枝葉のみ。故に、一敗に失望するなかれ、一勝にほこるなかれ。心を静かにして道を修めんのみ。然れども、此の日各試合とも毫も卑劣の行爲なかりしは、以て他の百失を補ふにたる。(H、K生)

大正元年、十一月廿八日、午後一時より秋季大會を催せり。本年は未曾有の演武者を出し、時間の都合上、之を分ちて、青年組、幼年組とし長束教師、片山助手審判の下に試合は開かれぬ。

さしもの道場も満員となり、屋外に立ちて観る者さへあるが如き盛況を呈したり。終りに臨んで、校長の訓話あり、五時頃散會せり。當日の番組並に勝負後に附す

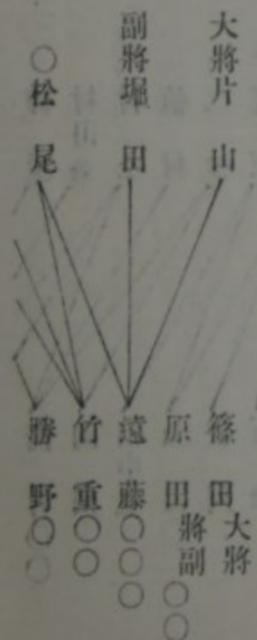
暫らく、右に對する妄評を許せ。坪井君、體軀小なるにもかゝらず、よく、敵四人を斃せり、その業見るべきものあり。益々、斯道の爲に盡されよ、桑原君、岡田君、の元氣や愛すべし。齋藤君、見島君、太刀筋共によし。今後奮勵せば、益々上達せん事疑なし。郡司君亦元氣に、よく、敵二人を破れり。今少し、態度に注意せらるべし。永田

べし。矢野君、堀君、元氣賞すべし。飯田君、幼年組より、今や、青年組に入り、而も能く五本を抜き、優退せしは、君が平素勵精の程も知られてゆかしかりき。伊藤君亦平素熱心の効現れ、よく大敵三人を斃せり。益々努力せられん事を望む。山下君元氣旺盛。河崎君の掛聲、稍々奇なるが如し。三浦君、新進氣鋭、體軀の小なるにもかゝらず、よく元氣に戦へり。今後は、少しく、籠手に注意せられたし。片岡君も亦小軀よく奮闘せり。其日常の熱心見るべきものあり。藤井君、さすがに本部の老練家、よく片岡君を斃せり。然れども試合中、動もすれば、無用の言を弄するの傾きあるは不可なり。下瀬君は、態度、動作、共に宜し。而して、果敢なき最後を遂げたるは、實に惜むべし。黒瀬君、日頃の熱心見れ、實に天晴なり。其太刀先の鷹揚にして鋭き事、本部未來の重鎮たるべきを知る。横山君は、黒瀬君と共に、著しき進歩をなし、よく黒瀬君を破れり。其太刀筋整然として綺麗なり。今後に於ける黒瀬君の好敵手なるべし。飯田君の體軀強健なる頼むに足る。加藤君の業、近時益々其進歩を見る。勝野君、よく加

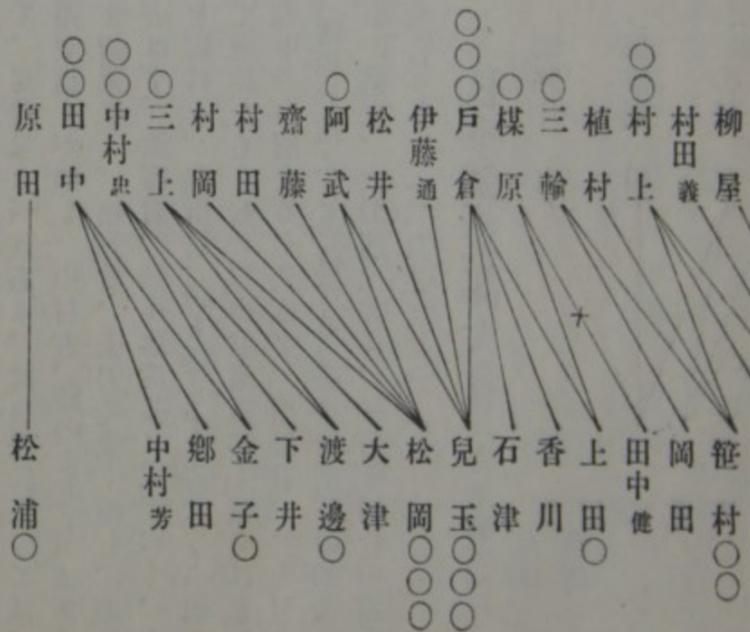
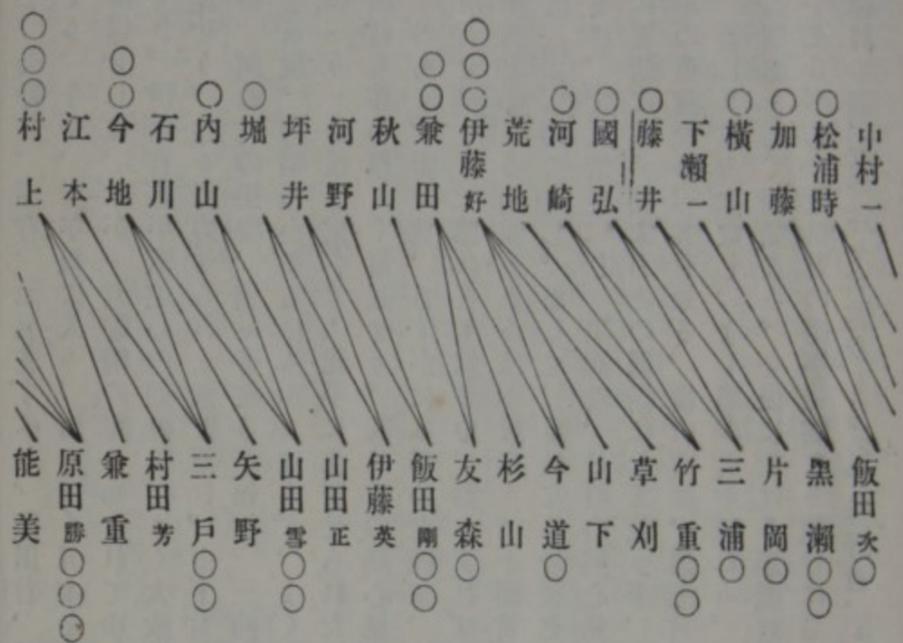
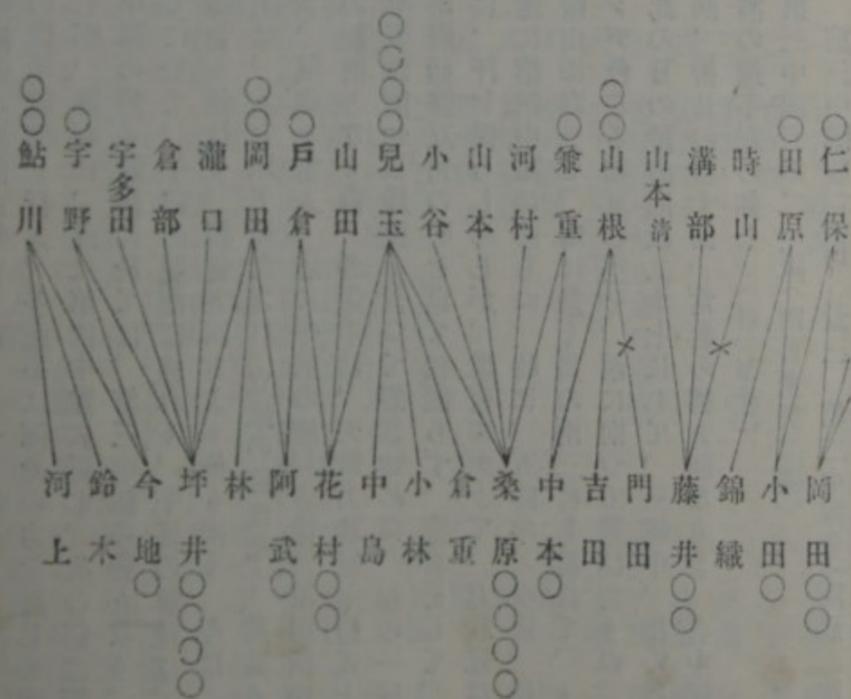
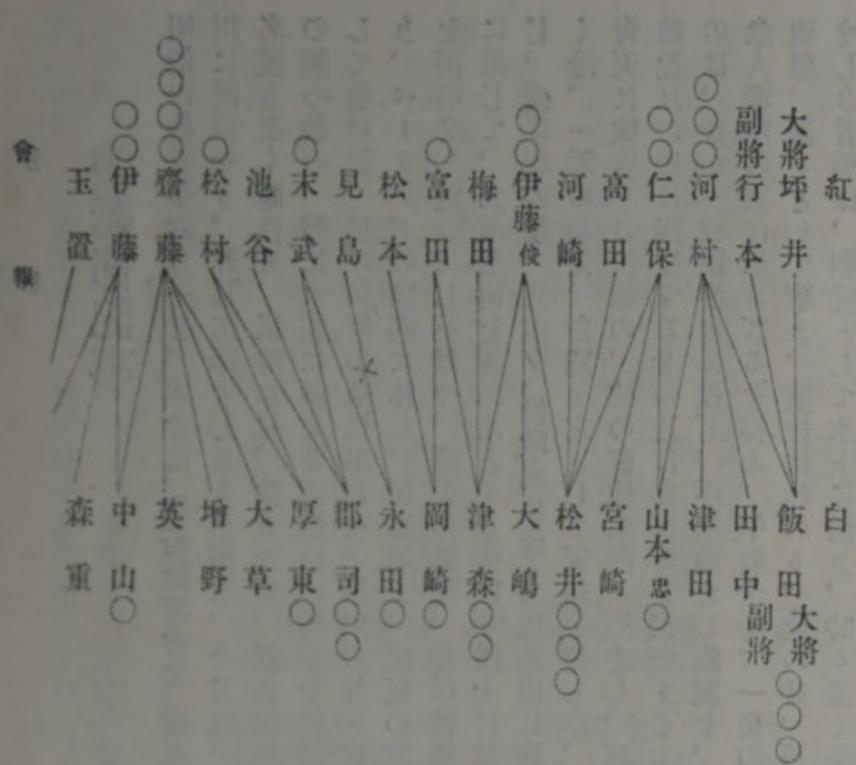
君の技著しく進歩せしを見る。即ち君が平素の熱心の結果ならん。富田君、元氣あり、體軀亦斯道に適せり。之をつとめよ。津森君、體軀の小なるにもかゝらず、元氣旺盛にして、よく、大敵を斃せり。唯惜しむらくは聲のかゝらざる事を。松井君、元氣ありて、其太刀先も鋭し、敢て附言す、以外の熱心に引き換へて、近頃、餘り入場を見ず、従前の如く、斯道の爲に勵まれん事を切望す。仁保君、態度、太刀筋共によし。然れども、籠手のみ打つは、其相手如何によつて、却て害なきにしもあらざるべし。河村君、太刀筋宜しく、よく敵を打てり。今後、少しく、態度に注意せよ。大津君、其業綺麗なり、唯其竹刀の餘り短かりし爲、引分となれり、兒玉君、其太刀の鋭きは賞すべけれども、餘り首をふるは面白からず。柳屋君、元氣あり、年寄りじみたる聲も面白かりしが、運拙く、敗をとりし惜しかりし。村上君の少年らしき聲、柳屋君に對して好コントラストなりき。其太刀先亦鋭くして、敵三人を破りしは壯なりき。三戸君、足疾あり、而も克く元氣に、克く大敵を破りたるは、君が平素の熱心の致す所なる

藤君を破りたるは天晴なり。松浦君大に元氣あり、日常努力の効見れたりと言ふべし。益々務めば、未來の大將疑ひなかるべし。竹重君、よく強敵松浦君を斃す、其業見るべきあり、其掛聲に至つては、實に肺腑を貫くが如し。中村君、體のこなし、法あり、其業亦綺麗なり。松尾君、太刀先鋭く輕し、亦妙たるを失はず。遠藤君、動作態度共に感ずべく、克く大敵を破れり。堀田君、相も變らず元氣にて、觀る者をして爽然たらしむ。片山君果敢なく破られしも、實に場中の白眉たるを失はず、原田君、其太刀先の鋭き、機會を捕ふるの敏なる、亦平素刻苦の効果か、篠田君、態度、太刀筋、共に、一言を挿むの餘地なし。妄言多罪。(K、H生)

秋季劍道部大會 (青年組)



秋季劔道部大會 (幼年組)



### 漕艇部記事

明治四拾五年六月一日、本會は、和船競漕會を、橋本川に開催せり。昨日迄降りしきりし雨も、今日は、名残りなく晴れて、風靜かに、波立たず。競ふ健兒の船の舳の、靜に水底に涵せる面影山の秀影を攪破して進む様、嗚呼何等の痛快事ぞや。呂宋の月に嘯き、ペーリングの寒潮に沐し、閉塞船上、正氣の歌を高唱せし逝きにし英雄や、垂天の鵬翼、將に扶搖に乗じて、九萬里南を極めんとする生ける傑士に感じ、或は花の晨、月の夕、漁歌水に湧き、樵謠山に響く邊、一葉の扁舟、白鷗を友として天然を樂しみ、青天に嘯嘯する快味の、彼の紅樓朱門に奔走し、底前盈尺の地に踞蹙する者の比に非ざるを讚美するものは、誰か、我競漕會に投じ、平素鍊えし鐵腕を、衆人環賭の前に示さざるを得ん。午前十時、一發の砲聲、轟々として響き、競技は始めり。此の時、勇ましき音楽は、劉曉として水上に湧き、時々轟く煙花の音は、雲なくして、雷鳴をなせり。時遷るに従ひ、競技益々たけなはなり。正午に垂とする頃、各

中隊選手競漕は始まりぬ。先づ、第一、第四兩中隊の選手競漕を行ふ。各選手は渾身の力を盡して争ひしが、勝利は、遂に第四中隊に歸し、次の第二第三中隊の選手競漕に於ては、第三中隊の勝となり、こゝに於て、午前の競漕は終れり、午後の競技は、一時より始めり。觀覽者四方より集り來り、今は、橋上は、人を以て満たされ、立錫の餘地なく、興益々湧き、氣益々奮ふ。遂に午前の勝利者第三第四兩中隊の競漕となりぬ。各選手は、天晴月桂冠を得んと、平素鍊磨せる鐵腕を奮つて漕ぎ始めぬ。初の一回は兩艇始終互角の勢を以て相譲らず、觀者をして、手に汗を握らしめしが、最後に至りて、月桂冠は、遂に第四中隊に落ちぬ。時に、五時半、夕陽、遠く兩山に暮きて、時に急ぐ鳥の兩三打ち群れて、オレンジ色なる初夏の空を、西に向つて飛び去りぬ。此の日の競漕回数二十七にして、三艇中、椿の勝八回、指月の勝十回、常磐の勝九回なりき。各中隊競漕の選手左の如し。(G、M生)

第三中隊對第二中隊(四百米突二週) 景三 第二中隊負(阿武 茂雄)

九分五十秒 池内 清 九分五十八 下部 豐

指月 植田 好郎 秒 飲田 次郎

第四中隊勝 郡司 又一 第一中隊負 横田 弘

九分四十秒 松浦 時行 十分三秒 村田 芳彦

指月 堀尾 嘉一 山下 眞一

第三中隊對第四中隊(四百米突二週) 早川 馨

指月 三好 一郎 常磐

第四中隊勝 郡司 又一 第三中隊負 原田 景三

九分三十五 松浦 時行 九分五十五 池内 清

指月 堀尾 嘉一 村木 好郎

三好 一郎 常磐 植田 源熊

山中 尚夫

### 辯論部記事

明治四十五年、七月四日木曜日、我部は、第貳拾壹回大會を、講堂に開く。登壇辯士及演題左の如し。

- 一、田舎と偉人 (一)宮津 精一
  - 二、青年論 (二)金子 武馬
  - 三、柔道 (三)清瀬 勘一
  - 四、倭魂洋才 (四)森重 幡雄
  - 五、嗚呼衰へたる哉我帝國 (五)竹重 保衛
  - 六、The Naughty boy. (四)下瀬 一郎
  - 七、海外發展 (四)杉山 顯正
  - 八、英語讀誦 (五)椿 武忠
  - 九、學生病 (四)藤井 武
  - 十、The way to be Happy. (三)武田 玄介
  - 十一、成敗の要は着眼にあり (五)三上 孝之
- 我部、亦素より、時に盛衰なき能はず。然れども、數年以來、漸次其盛を致し、發展の迹觀るべきものあり、余輩、窃に、雀躍を禁ずること能はざりしが、本會の、前土曜日開會の筈なりしにも係はらず、聴衆の少きにより、一時延引せしに至りては、遺憾ながら、辯論の價値必要の、未だ、一般に解せられざるを示すと云はざるを得ず。余輩の深く悲しむ所なり。先づ、例に依りて、松本部長の開會の辭あり。宮津、金子、清瀬の三君更るく登壇、各熱心に演了した

り。森重君、堂々として特有の快辯を奮ひ、幸徳を叱責し、武士道を説き、余輩を奮勵せしめたり。竹重君の説、吾解するを得ず。徒に、例を大空に求め、空虚を論じ、長時を費せるに至りては、余輩賛成するを得ず。然れども、其長時間に亘りて憐まざりしは、亦賞すべし。下瀬君、其英語の流暢なる、椿武田の二氏と共に、皆聞くべかりき。杉山氏の海外發展論、其説や可とすべきも、音聲、よく聴衆をして傾聽せしむる能はざりしは君の不幸なり。藤井君、今回の白眉たるべし。然れども、流暢も、余りに度を越えて、時に聞き取り難き感ありき。論旨整然として、先づ、社會の變遷より説き起し、空理空論を避け、終りに、卑近の例を引き、余輩を戒めたるは力ありき。三上君、成敗の因由する所を明にし、英雄の、大局に着眼せしを論じ、着眼の誤る可らざるを説く。君の態度の從容として迫らざりしは感服の至なり。次に、校長、飛入りとして、壇に登り、一場の感想を述べられ、終りて、松本部長の閉會の辭を以て散會せり。本日の優勝者、左の如し。

第貳等 藤井 武

第參等 森重 幡雄 三上 孝之 下瀬 一郎

椿 武忠

野球部記事

十月十九日、午後二時半、我輩ベース、フィールドに於て、立野、中村兩君審判の下に、第一中隊對第四中隊の野球試合を開催せり。應援軍の喊聲の裡に、兩軍、互に、秘術を盡して、奮闘力戦せしが、一中軍、運拙くも、遂に四中軍の爲に撃破せられたり。是に於て、兩軍、互に、萬歳を三唱して、試合の終結を告げぬ。時正に午後五時。

當日、兩軍のメンバー及び成績左の如し。(T I 生)

- (中一) 武田 八上 石坪 早下 行 19. 0. 2. 15. 1. (原)
- 林 中谷 利津 井川 瀬本
- P. C. IB. II.B. S.S. L.F. C.F. R.F.
- 打 死 四 三 得
- 數 球 球 振 點
- (中四) 原 岡 高 渡 益 堀 野 三 野 37. 0. 8. 6. 13. (武)
- 田 村 原 邊 田 尾 上 好 田

十月廿一日、放課後、石津君審判の下に、第二中隊對第三中隊の野球試合を舉行す。第三中隊極力奮戦せしかども、南風競はずして、遂に破れしど是非もなき。

當日、兩軍のメンバー及び成績左の如し。(T I 生)

- (中二) 數 井 西 遠 ト 村 山 三 松 (河)
- 藤 町 林 藤 部 上 田 宅 井 34. 0. 7. 8. 14.
- P. C. LB. II.B. S.S. L.F. C.F. R.F.
- 打 死 四 三 得
- 數 球 球 振 點
- (中三) 河 赤 松 木 阿 有 中 植 池 31. 0. 5. 10. 6. (數)
- 野 川 本 島 武 倉 島 田 内

大正元年十月廿二日、午後二時半より、立野、石津兩君審判の下に、第二中隊對第四中隊の野球試合を舉行す。兩軍、互に、陣容を整へ、健闘力めたれども、四中軍、武運や拙かりけん、十三對十二にて、二中軍の爲に、月桂冠を得られたり。今、左に、此の日の試合の梗概を報ぜん。

第一回、四中軍先攻せしが、得點無く、二中勢之に代り、遠藤君遊撃を突いて、一壘に入り、村上君凡死。山田君、三壘に、犠牲球を送りて、遠藤君生還す。

ト部君の三壘飛球効を奏せずして、ト部、山田兩君ダブル、プレイとなる。

第二回、四中の英士、枕を並べて斃れ、二中軍にては、僅に、井町君一點を得しのみ。

第三回、四中勢は、満身の勇を振ひ、堀尾君、三好君共にPゴロにて、一壘の人となる。渡邊君、凡死、快打手、高原君、山をも越せと、大飛球を送れば、前兩君ホームイン。觀衆砂塵を蹴立て、狂號す。二中軍の狼狽を見て取りし益田君、好球ござんなれと、中堅をオーバースタイルしたれば、數藤君氣をいらち、四球連續して、野田、野上兩君はゴボーゴボーの聲の中に進む。高原君、益田君共に、挟撃の關門を潜りて生還す。堀尾君の打ちしフライを投手逸したれば、岡村君ホームイン。三好君の凡死の爲め、野上、堀尾兩君、共に、壘上の人となる。是に於て、二中軍代る。二中勢は、四中軍の、一舉六點を得しに酬

いとんて、攻撃に、力を込めたれども、其の甲斐なく、井町君一點を得しのみ。

第四回、拍手の裡に、ボックスに現れたる渡邊君は、四球を利して、壘に進みしも、二壘の露と消ゆ。益田君死球に出て、野田君、三壘に、グラウンダーを送りて、一壘に據る。野上君三振、ツニアウトにして、ボックスに立ちし原田君は、二壘にフライせしも、遠藤君のミツスにて、益田、野田兩君生還。堀尾君の犠牲球にて、岡村君生還す。此の時に於ける四中軍の意氣當るべからず。三好君の凡死にて、二中軍代る。二中勢に奮戦苦闘したれど、僅に一點を得しのみ。

第五回、本回に於ては、活氣勃々たる、四中軍は振はざりしも、挾撃にて、敵のエラーに乘じ、二點を得。二中軍代るや、村上、山田兩君の凡死後に、ボックスに立ちたるト部君は、斯くてはならじと、満身の力を、バットに注ぎて、三壘をオバーシ、瞬間にして、三壘を奪ふ。數藤君の二壘オバーにて、ト部君生還、井町君の痛快打にて、數藤君裕然として生還す。津守君、四球を利して、一壘に進む。井町

し。共によく攻め、よく守りたれば、双方得點なく、遂に、最後の戦は開かれ、双方鎬を削りて力闘苦戦す。彌次連、上衣を脱ぎ、壤を打ち狂呼應援す。四中軍、遺憾にも、一點の得點なくして、二中軍之に代る。今度の一戦にて、兩軍の優劣定る事なれば、二中軍猛撃に出づ。三宅君、數藤君は、共にもろくも斃れたれば、二中側の應援軍は、手に汗を握りて、此様を見る。是に於て、濃厚篤實の士、村上君は、投手の投ぜし球を、大々的スリーベースヒットと變じて、觀者をして、一齊にアツと叫ばしむ。チキストバッターにて、目出度く、凱歌を擧げて生還し、山田君凡死す。是に於て、名譽の優勝旗は、二中隊健兒の頭上に懸りぬ。時正に六時二十分。試合終るや、野球部長丸本教諭野球試合の精神に付き、兩軍選手に諭す所あり。次に校長二中隊選手に、メダルを授與せらる。斯くて兩軍交互に萬歳を三唱して終結を告げたり。當日、兩軍のメンバー及び、成績左の如し。

(N、I、生)

君、投手のモーションを看破して、ホームに走り込む、流石は洋行戻り。コンモンバッター三宅君、凡死にて終る。

第六回、兩軍共に振はずして、共に得點なし。第七回、四中軍極力奮戦したれど、得る所無く、二中軍代る。二中勢は、今や時機こそよけれ、日頃の手練を見せんと、井町君をファストバッターとして、陣形を整へて打つて出づ。井町君、四球に出て、一壘に進み、忽にして三壘を奪ふ。西林君、痛快なる大フライを飛ばせれば、井町君、兩頬に、笑を湛へてホームイン。三宅君Pゴロを打てど、投手原田君は、西林君の生還せん事を怖れ、躊躇する内に、見す見す、彼をして一壘の人とならしむ。是に於て、彌次連は狂せんばかりに歡呼す。二中軍意氣衝天の概あり。原田君、氣は逸れども、連日の試合に、腕は疲れに疲れ、意の如くならず。二中軍、之を見て、機逸すべからずと、頻々に快打し、一舉にして、五點を得、遂に同點となる。

第八回、兩軍ありとあらゆる秘術を盡し、威風堂々と、陣容を整へて奮戦す。宛がら龍虎の争ふが如

(中二) 數井西遠ト村山津三 41. 2. 2. 4. (原)  
藤町林藤部上田森宅 (兄) 13.

P. C. I.B. II.B. S.S. L.F. C.F. R.F. 打死四三得  
原岡高渡益堀野三野 數球球振點  
(中四) 田村原邊田尾上好田 35. 1. 7. 8. 12. (數)

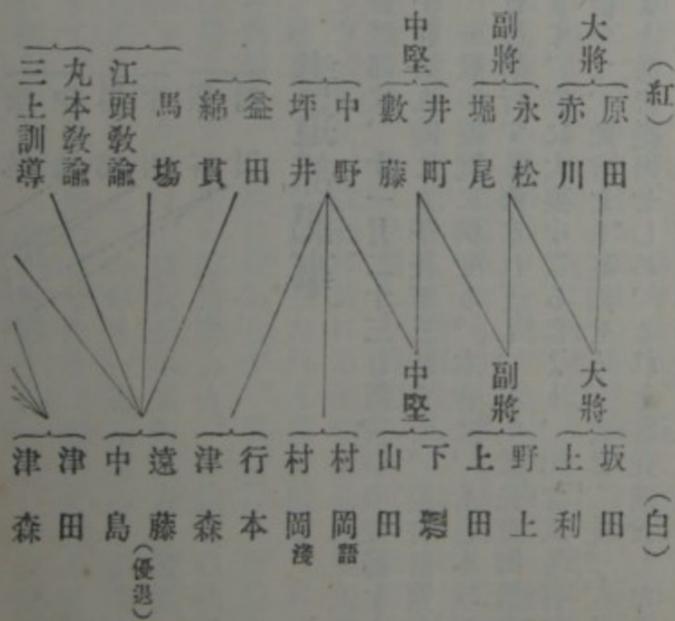
### 庭球部記事

大正元年十月十七日の、神嘗祭日をトし、後庭コートに於て秋季庭球大會を舉行す。田中部長、原田、赤川、上利の三君審判の任に當らる。宣戰の聲と共に、兩軍開戦せり。其内特に注目せられしものは、上利組、對井本組なりき。紅軍上利君は、三年級屈指の前衛にて、よく要領を得、加ふるに下井君の後衛、熱球其當を得、井本組よく防戦せしも、遂に破れ、上利組其勢に乘じ難なく二組を降し、白軍の田中教諭組にあたる。教諭は、職員側の驍將なれども、此日運拙くして、遂に敗れられしぞ口惜しき、次に

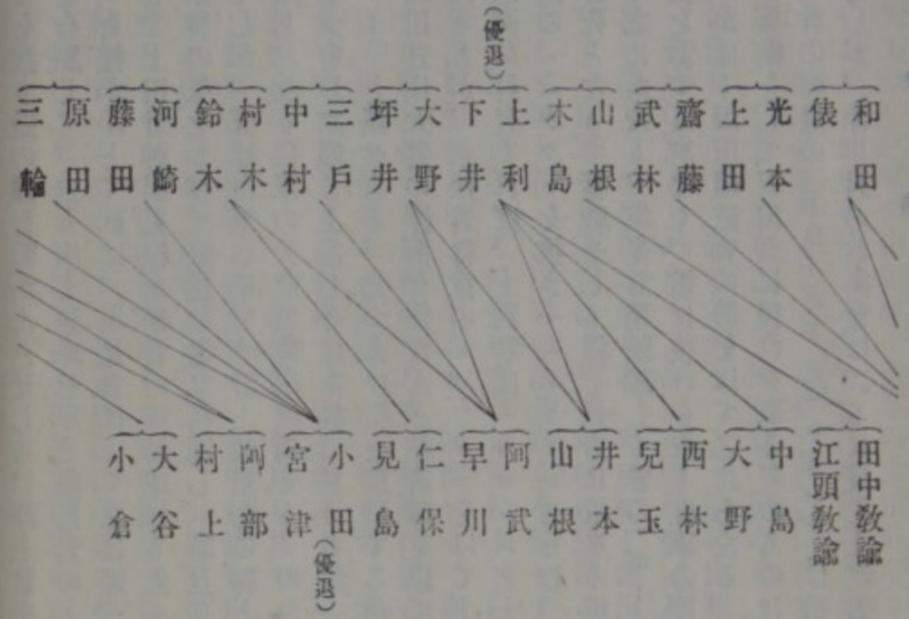
現れたるは、紅軍の山根組、白軍の津田組なりき、紅軍の山根君は春季優退の榮を得たる剛の者津田組を一擧に破らんと計りしも、津田君例の山口スタイルを以て、沾着、球を送り、津森君、體小なりと雖も、敏活にしてよく敵の急所をつき、遂に山根組をして、危地に陥らしめたり。紅軍の齋藤組、及び光本組あへなく、津田組に破られ、和田組、津田組と對陣せり、紅軍の和田君は、第一年級の猛將にして後衛として要を得、津田君の沾着球功を奏せず、流石の津田組も退陣するのやむなきに至れり。白軍の遠藤組津田組にはかりて出馬し、瞬間にして敵を破り、丸本教諭組紅軍に現はれたり。教諭は氣合ボールを以て敵を一撃のもとに降さんとせしが、遠藤君屈せず、逆モーションを以て、敵を挫けり。紅軍の江頭教諭組場に立つや、遠藤組上首尾を以て、之を破り、紅軍の益田組と相對せり。益田組敵を侮りて少しく油断せしを、遠藤組機逸すべからずとなして、虚をつく、益田組稍躊躇して陣形亂れ、遂に危地に陥りぬるぞ口惜しき。遠藤組遂に優退の榮を得たり。次に出馬せしは紅軍の中野組對白軍の行本組

なりき。中野君は第二年級の勇士たり、君の得意の後衛は、大いに發揮せられ、行本組之に堪ふる事能はずして去り、村岡組之に代る。村岡君は音に聞えし後衛にして、中野組と對戦するにあたりてや、大いに奮戦せしも、惜むらくは足部の負傷、君をして充分なる活動をなさしめず利あらずして退けり。中堅下瀬組悠然として場に現はれ中野組に對せり。中野組勝に乗じ、坪井君の前衛稍功を奏せしも、中堅にあたるべからず、力屈し、紅白中堅の對陣となれり。山田君の熱球を數藤君辛うじて受送れば、下瀬君前衛にて數藤君のバックを抜き、數藤君のロビングによつて井町君スマッシングを敵の虚に打込み、一進一退觀者をして手に汗を握らしめたり。白軍の副將野上組下瀬組にはかり數藤組と對陣す。數藤君強球を以て野上君の足下を挫けば、さすがは副將野上君、容易に之を打返し、井町君スマッシングを以て敵を壓すれば、上田君よく之に應じ君のボーラーと野上君のロビングは敵をして屈せしめ、愈々紅軍の副將永松組出陣せり。先づプレーの聲と共に野上君例の特意のサーブを出ししが永松君自若としてトゥイ

ストを送り敵の虚を衝かんとせしも、野上君早くも之を合點して、走り出て強球を以て堀尾君の「バック」を挫かんとすれば、堀尾君はよく之に堪へて打返し、上田君神出鬼没永松君の威赫球にも驚かず共に副將の榮を並びて縦横無盡に奮闘し一時互角の勢なりしが、天は白軍に幸せず野上組無念の聲と共に退陣し、愈々白軍の大將坂田組出馬せり。坂田組は春季大會以來頗る上達し今は本校に於ける第一「メンバー」と稱せらる。先づ永松組と對戦するにあたり坂田君は大將の體面を保たんと粘着球を以て敵にあたりしが、永松君得意の「バック」を以て上利君の前面に打付ければ、上利君は「スマッシング」を以て敵の「バック」を抜き「エラー」せしむ。永松君必死となりて奮戦せしも機を見るに敏なる坂田君よく之にあたり、堀尾君稍躊躇して君の「ボーラー」も功を奏する事なく、遂に後れを取り紅軍の原田組之にかはり坂田組破竹の勢を以て之にあたる。原田君は後衛として坂田君に後れを取る程のものにあらず。君の極意の「ドゥイスト」及「ロビング」は敵を惱まししが、赤川君の前衛奮はざるに反し上利君の前



衛其當を得紅軍稍狼狽して陣形亂し、原田君、上利君の「スマッシング」を受け損じ無限の恨を呑んで屈し月桂冠は白軍の頭に加はれり。此時五時半夕日西海に没せんとして其美しさ云はんかたなし。當日の勝負左の如し。(S A 生)

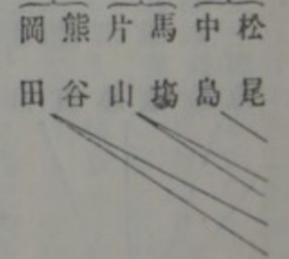


なりき。されど、本年の成績は、例年に比して、優秀なるもの多きを見たり。今回の受賞者は、一等七人、二等四十人、三等七十二人あり。本部の成績、年々進歩するは、斯道のため、大に慶賀すべきなり。

(河崎松之助)

書道部記事

我部は、十一月二十三日の新嘗祭日を期し、生徒の成績品を陳列して公衆の観覧を許したり。従來の例として、書畫兩道部は、毎年本校紀念日をトし、連合して展覽會を催すこととなり居たり。然るに、本年は先帝の御登遐に遇ひ奉り、一般謹慎の意を表して、大喪に居る可きに依り、祝賀的企圖は一切廢せられ、紀念式も行はれざる事となれり。然れども、折角苦心の結果を暗中に葬むらんも残念なればと、遂に此舉を見るに至れり。會場は、北部の五教室中の二室を以て之に當て、總ての裝飾は省かれたれども、規定は昨年と異なる所なし。午前九時より午後四時までを限りて、從覽を許したり。當日は、生憎雨天にして、來觀者頗る寥



書道部記事

我部書道部は、十一月二十三日新嘗祭の佳節をトして、午前第九時より午後第三時まで、選書展覽會を開き、一般の縦覧に供せり。本會は、もと本校開校紀念日に舉行する例なれども、本年は先帝御崩御の事ありて、方に大喪中なるにより、紀念式も行はれず、從つて、此會をも延期せり。書は、先づ、全校生徒より悉皆提出せしめ、これを審査選抜したるものなり。會場は、本校北部の教室三ヶ處を以てこれに當て、御大喪中のこととて、都ての裝飾は、これを省きぬ。是より先、此會開設の由を、本校門前に揭示し、新聞紙にも、亦これを豫報したれども、當日は、降雨のため、參觀者僅少なりしは、稍々遺憾

々たりしが、熱心なる諸賢の、風雨を冒して來場し、仔細に觀覽せられしは、深く感謝する所なり。今年は、一般に振はざりしが如し。我部は本年度卒業生秋本一郎、石田四月の諸君を始めとし、多くの熱心家を失ひたるは、實に惜むべし。されど四年級、二年級諸君の技倆は、昨年より、遂に上達せるを見る。殊に、渡邊佐君の作品の意匠慘澹たる、杉原君の細心綿密なるには、實に感服せり。二年級に於ても將來有望なる諸君多きを見たり。以後、一層努力して、我部の發達に盡瘁せられん事を切望してやまざるなり。又觀覽者をして愕然たらしめしは、三上君の進歩なり。特に目新しく感ぜしは、野田君の油繪なりき。實に、我部に於ける油繪出品の嚆矢なりとす。將來、益々、光彩を放たれん事を祈る。其他、新進の諸君は、枚舉に遑あらず。又、別に、田總先生の筆に係る南宋北宋の模造畫あり。觀覽者の注目を引きたり。寫生畫は、諸氏が平素の實力を發揮して遺憾なしといふべし。今年も一等入選の作品は寫真にとりて、本號口繪に載せたり。参照せらる可し。終りに臨み、聊か、余が所感を述べん。一度出品せ

られたる畫題を、再び出すは、餘り策の得たるものにあらず。其他、主畫以外に、餘分の裝飾を施すは、斟酌すべき問題なり。如何に目覺しき筆なりとも、無用の一塗に、折角の價値を無にするは、恰も、書の署名に於けるが如きか。(卜部豊)

會友訃音

第一學年生田村稔一君會友第七高等學校一部生松野十一君同大阪高等工業學校圖案科特待生藤井酷一君はいづれも病の爲に遂に死去せられ又會友堀俊雄君は慶應大學商科卒業の後某會社に入實業に従事し居られしが是亦病の爲に死去せられたり悲い哉  
十月二十三日午前十二時多年本校の爲に盡力せられたる校醫有福直三郎氏死去せらる各級より總代二名を選びて往弔せしむ二十五日午後六時葬儀執行に際し校友會より生花一對を贈り全員會葬せり

明治四十四年度萩中學校々友會費收支決算書

收入ノ部

|              |          |
|--------------|----------|
| 一金七百四拾五圓六拾五錢 | 生徒會費     |
| 一金百拾參圓壹錢     | 職員會費     |
| 一金六拾貳圓拾參錢    | 雜收       |
| 合計金九百貳拾圓七拾九錢 |          |
| 支出ノ部         |          |
| 一金四拾四圓貳拾九錢   | 基金蓄積費    |
| 一金五拾五圓       | 短艇新造同上   |
| 一金六拾九圓六拾七錢   | 劍道部費     |
| 一金五拾七圓七拾錢    | 柔道部費     |
| 一金五拾八圓七拾九錢五厘 | 庭球部費     |
| 一金四拾九圓五拾錢五厘  | 野球部費     |
| 一金七拾圓參錢五厘    | 短艇部費     |
| 一金六圓四拾貳錢五厘   | 遊泳部費     |
| 一金百貳圓九錢      | 雜誌部費     |
| 一金九圓貳拾四錢五厘   | 辯論部費     |
| 一金九圓五拾四錢五厘   | 圖書部費     |
| 一金五拾五圓九拾七錢五厘 | 運動會費     |
| 一金拾八圓拾五錢     | 同上役員慰勞會費 |
| 一金八拾九圓九拾九錢   | 褒賞部費     |

|              |         |
|--------------|---------|
| 一金八拾四圓八拾錢五厘  | 雜費      |
| 一金六拾六圓四拾貳錢   | 臨時費     |
| 一金七拾圓七拾錢     | 剩餘金基金編入 |
| 合計金九百貳拾圓七拾九錢 |         |

惠贈書目

本會は左記書籍雜誌の惠贈を辱くせり記して謝意を表す

|                  |           |
|------------------|-----------|
| 高友會雜誌 自二〇九號至二一三號 | 早川富正君寄贈   |
| 校友會雜誌 自二七號至三十一號  | 中津中學校     |
| 學友雜誌 自一七號至二一號    | 慶應義塾      |
| 戰友雜誌 自八號至十二號     | 帝國在郷軍人會本部 |
| 樂石叢報 第八輯         | 吃音矯正所     |
| 日東善報 第一號         | 日東善報社     |
| 知道月報 自三五號至四三號    | 水戸中學校     |
| 早稻田大學規則便覽        | 早稻田大學     |
| 地方青年 自第三年第二號至第六號 | 大田地方青年社   |
| 校友會誌 自四〇號至四三號    | 下關商業學校    |
| 同誌 自一四號          | 京都府立第二中學校 |
| 東洋時報 自一六三號至一八四號  | 東洋協會      |
| 石田城八號            | 五島中學校     |
| 時習 自八號           | 徳山女學校     |

預金利子

|                       |           |
|-----------------------|-----------|
| 一金八拾四圓八拾錢五厘           | 雜費        |
| 一金六拾六圓四拾貳錢            | 臨時費       |
| 一金七拾圓七拾錢              | 剩餘金基金編入   |
| 合計金九百貳拾圓七拾九錢          |           |
| 明治四十四年度萩中學校々友會基本金決算書  |           |
| 一金五百拾壹圓貳拾貳錢五厘         | 前年度繰越金    |
| 一金參百四拾壹圓八拾壹錢          | 本年度實收高    |
| 此内譯                   |           |
| 金貳百圓                  | 藤田平太郎氏寄附  |
| 金貳圓五拾五錢               | 高井望氏寄附    |
| 金四拾四圓貳拾九錢             | 校友會費ヨリ蓄積  |
| 金七拾圓七拾錢               | 校友會費決算剩餘金 |
| 金貳拾四圓貳拾七錢             | 預金利子      |
| 合計金八百五拾參圓參錢五厘         |           |
| 明治四十四年度萩中學校々友會短艇新造蓄積費 |           |
| 決算書                   |           |
| 一金八拾五圓九拾貳錢五厘          | 前年度繰越金    |
| 一金五拾七圓參錢              | 本年度實收高    |
| 此内譯                   |           |
| 金五拾五圓                 | 校友會費ヨリ蓄積  |

高一校友會雜誌 自三月號至六月號  
 學友會報 四七號  
 同窓會報 第四輯 一二號  
 進修六號  
 球陽二號  
 白鷺  
 防長學友雜誌 五拾號

早川富正君寄贈  
 山口高等商業學校  
 岩國中學校  
 大連商業學校  
 私立鴻城中學校  
 沖繩中學校  
 八代中學校  
 防長學友會

信書一束

旅順工科學堂來信

拜啓秋冷之候各位益々御盛榮之段大慶に奉存候次に私共無事消光罷在候間御放念被下度候借過般私共本校在學の同縣人申合せ三矢會なるものを組織仕候就ては豫て本校内部の情況等御通信申上げ卒業諸君の高等の學校に進まるゝ方々の御參考に供し度存居候處我校にても近々明年四月入學せしむべき第四回新入學生募集に着手仕候筈に付き今般急に思立ち御通信申上候次第に御座候本校創立の目的及其他萬般の規則に付きては毎年本校より配布仕居候印刷物により既に御承知の御事と奉存候へ共其のみにては到底内情の委曲は盡し難く是私共の御通信を必要と認め候所以に御座候五年級在學の諸君は御卒業後の方針に就ては既に御決定の方も可有之と存候へ共意ふに今や我國民が舉國一致して國力の充實を謀るべき時に當り己が才能及境遇の許す限り身を實業界殊に最も發展を要すべき工業界に投じ小にしては一身を立て大にしては國家の爲に大に盡す所無かるべからざるは私共の喋々を要せざる所に候さて私共已に海外に在るものは勿論諸君も亦今日の我國勢に鑑み海外發展の必要を認められ候事と奉存候徒らに郷國に戀々として人口過多の裡に己が職を求めんとするの困難を敢てするよりも寧ろ大奮發して需用多き海外に一步を踏み出し國力發展に於ける平和の戰士として勇しく働くの潔きに若かずとは私共の申す迄もなき事と存候而も尙重ねて之を言はんとする所以は餘の義にあらず私共は此光景を眼前に目撃して諸君よりもより痛切に感じ居るが故に御座候今や帝國の版圖は擴張

せらるる昨年迄租借期限を云々せし我關東州の如きも過般の革命以後は全く我掌中に落ち南滿は勿論内蒙亦我勢力圏に入らんとする有様に有之而して是等新殖民地の經營は年と共に着々進歩し從而工業界に於ても人材を要すること益々夥しく無限の寶庫は我が前に横りて正に諸君の來拓を待ちつゝあるものゝ如くに候當に滿蒙のみならず革命後未だ全く獨立經營の域に達せざる中華民國は今や斯界に於て諸先進國の開發を俟つにあらざれば到底自ら處理する事能はず列強は此機に乗じ續々進入して汝々勢力の扶植に腐心し其競争の激烈なる事は停止する所を知らざる有様に御座候是時に於て我等緊蹙一番大に奮勵致さずばいかて東洋平和の爲め隣邦の好を以て之を文明に導くとを得申すべき大なる犠牲と費用とを拂ひたる日露役も無意味の者と成り果て可申候今は私共青年が平和の戰士として大に活動すべき時にて有之申候我政府が此地に本校を設立仕候本旨も此に在ることゝ察せられ申候中には内地學校に學ぶも差支なかるべしなど思ふ者も可有之候へども將來苟も海外に活動せんとの考に有之候はゞ其風土人情風俗言語等に精通せては列強と競争場裡に角逐せんことは出來申間敷候殊に當地は朝に二〇三の高地を仰き暮に白玉山頂の表忠塔を望むなど觀る所踏む所皆是幾萬の同胞が血に値せしものにて一として私共の腦裡に教訓を與へざる者としては無之候本校は創立後三星霜を経諸般の設備本年中には完成可仕其完備せることは全國に其比を見ずと申候も強ちに溢美には有之間敷候加ふるに本校は學生を優遇し月謝を徴收せず諸器械其他日常用品を貸與仕候又圖書館の設あり各科の參考書を備へ申候經費の寡少なるは内地にても多く備匹を見ざる事と信じ申候修業年限は四箇年にて高工より一年長き丈其程度も從つて高く卒業後の資格は高工と帝大との中間に有之申候就職問題は今日にては毫も憂ふるに及び不申大陸の工業は私共の卒業を相待ち居申候右にて本校の内容大體御承知被下候事とは存じ候へども尙御

不審の點も有之候はゞ御遠慮なく御申越被下度さすれば直に御報知可申上候尙爲念申添候數學物理は最も必要なれども英語も亦重きを置かれ申候席次半以上ならば多分採用可仕候先は不顧不文諸君の御渡滿を促し候事如斯に御座候

大正元年九月十七日

旅順工科學堂内

山口縣三矢會

山口縣立萩中學校五年級諸君

東京商船學校來信

拜啓嚴寒の候貴校益々御隆盛奉賀候學事御多忙中に候へ共生等今回申合せ本校狀況の概畧申述べ將來海上に活動せむとの希望を有せらるゝ諸君の御參考に供し度一書を呈し候間御一讀被下候へば幸甚の至に候本校は御存知の如く我國唯一の官立商船學校にて將來高等海員たるべき者を養成し同時に海軍豫備將校たらしむるを目的と致し居候校長は現役海軍少將(石橋甫氏)にして教官は主として本校出身に御座候他に學生の訓育を專任とせらるゝ學生監三名(何れも海軍將校)有之申候目下千噸以上の汽船の船長機關長の大部分は本校の出身者たるの盛況に御座候入學期は毎年五月と十一月との二回にて五月に入學せらるべき諸君の入學試験は來四月一日より舉行可致目下募集中にて願書べ切は二月二十日迄に御座候別封規則書御送申上候間此際有志諸君の御志願を切望仕候募集人員は航海機關兩科共各四十名宛に御座候入學試験は一見困難なるが如く候へども其實極めて容易なるものに御座候試験學科にて最重要なるは代數及び三角にて英語幾何算術漢文等は之に亞ぐべく候(中學卒業生は以上の六科目のみ)學資は航海機關兩科共各入學者の半數を貸費生となし他

を自費生となすの定にて選擇は試験の成績順により申候又自費生たりとも入學後の成績良好なれば貸費生となり進んでは特待生ともなるを得可申候貸費生は被服食料書籍等悉く官給にて且毎月雜費として金貳圓宛を給與せられ候間學資金としては別に父兄より支給を仰く必要無之候自費生とても月謝食費等を要せず候間毎月十二圓位有れば十分に有之候本校の特典といふべきは入學と同時に海軍兵籍に編入せられ卒業すれば豫備少尉候補生豫備海軍機關少尉候補生に任命せらるゝ事に有之候されば徵兵猶豫等は一切無之候練習船大成丸にて世界を周航するも面白く海國男兒として最壯快を感ずる事業かと愚考仕候右有志諸君の御參考迄に概略申上候草々 敬具

一月十九日

山口縣出身

商船學校在校學生

縣立萩中學生徒諸君御中

### 本校記事

自明治四十五年一月  
至大正元年十二月

### 始業式の訓話

一月八日、例の如く、始業式を行はれ、終りて、校長は、諸子に訓諭すべきことありとて、徐ろに口を啓きて曰く、今や、諸子と共に、此の新なる年に於て、一堂に相會するを得たるは余の最も欣ぶ所なり。諸子は、

年の新なると共に、益々其心を新にし、學問徳行の又新を謀らざるべからず。就きては、今より、本校が、操行に關して定めたる人物判定の標準を語りて、諸子の注意を喚起せんと欲す。余の人物査定の標準は、之を分ちて三等とす。即ち善は作さずして、常に悪行のみ多きもの、之を丙とす。乙は、更に之を分ちて二とす。其一は、善をなすことあるも、亦時に惡をなすことあるもの。其二は、惡も作さざれども、善も亦なさざるもの。此二者は、前者に比すれば、固より優ること遠けれども、未だ以て至れるものとなすべからず。甲たるべきものは、日々に進みて善をなすものならざるべからず。故に、諸子若し最善の人たらんと欲せば、惡を作さざるを以て足れりとすべからず、必ず進みて、善を作さざるべからずと述べ、更に進みて、微生の信、父の羊を攘みしを證せし子の例を引き、此の如きは眞の信にもあらず、眞の直にもあらず。孔子も、言必信行必果硜々乎小人哉とのたまへり。眞の人物は、可以托六尺之孤可以寄百里之命君子之人乎君子之人也と云へるが如くならざるべからずと諭し、加藤清正の論語を讀みたることより、其人物事業を説き、終に、論語の世界無比の書なることに論及し、此の如き書を常に熟讀するは、修養上に大効あるべしと、尾々、二時間に涉りて演述せられ、終りて、常の如く授業を行はれたり。

### 團隊長距離競走

一月二十九日、午前九時過より、例に由りて、團隊長距離競走を、大井村に行ふ。當日の記事一編を得たれば、左に附載す。

一月二十九日をトして、我隊四百の健兒は、大井村に至るの第二回長途競争を執行す。先日來、天氣兎角不順なりしたため、定刻七時半といふに、九時〇五分に至りて、全員漸く運動場に參集す。やがて、各隊とも、所屬隊長の指揮により、整列して命を待つ。草鞋脚絆の扮装に、各中隊の區別として、白赤青の紐を帽子に巻き必勝の色を面に現はし、二里半の行程も何ぞと、丈夫の意氣、天を衝くの慨あり、勇ましくとも勇まし。幹部亦注意をさし、怠なし。

九時四十分、第三中隊第三小隊先づ發す。各小隊亦十分毎に相次ぐ。步調整然、一絲亂れず、鋭鋒當るべからず。道を海岸にとり、雁島小畑も隣りに過ぎ、前をば越えよ、後に越さるなど、激勵の聲に勇氣百倍し。右曲左折、越ヶ濱を過ぐれば、此處は最後の難關、大井村は迫れるぞ萎むなど、幼を助け、弱を勞り、相次ぎて、目醒ましくも、決勝點に突入せり。早きは十時四十九分五十秒。遅きは零時九分三十秒なり。先生既にありて、休憩所の設備亦遺算なし。

高倉神社の下、急に、人を以て埋められ、所々に焚火して、暖をとり、互に語り、互に勞ふ。次で、一同午餐を喫す。時に、今日の勝負發表せらる。その概況次の如し。

- 第一着 第一中隊第一小隊 一時九分
- 第二着 第三中隊第一小隊 一時九分三十秒
- 同 第二中隊第三小隊 同
- 同 第一中隊第三小隊 同
- 第三着 第三中隊第三小隊 一時九分五十秒
- 第四着 第三中隊第二小隊 一時十分三十秒
- 第五着 第一中隊第二小隊 一時十一分
- 第六着 第二中隊第一小隊 一時十一分三十秒
- 第七着 第二中隊第二小隊 一時十二分

又も、第一中隊の頭上に月桂冠は下れり。同隊の光榮何か之に加へん。願ふに、其の差や、僅に數秒を以てし、殆ど勝敗の別なし。以て其の競争の激烈なりしを知るに足る。而も、昨年の第一着は、今年の第七着に相當し、昨年の末着一時三十四分の如きは眞に想像の外なり。以て各員努力奮勵の程を推測するに足るべし。逐年、この趨勢を以て進まば、レコードは更にレコードを生み、僅一時間を出でずして到着するも亦難きにあらざらん。午後一時十分集合、直に歸途に就く。折しも、天候激變し、西北の風は突を交へ、瞬時にして、四顧晦冥、怒濤澎湃、悽愴の氣人に通る。前面の風益々募れば、寒愈加り、面を撃ちて冷且つ痛。溶けたる涙の、既に身に及べども、英氣益々旺盛なり。軍容堂々、駭雪中の行軍を續行すれば、彼の奈翁の莫斯科退却の狀をも想見せざるを得ず。彼は全敗の軍、此は全勝の軍、願へば、勇ましくも亦心地よかりき。

漸くにして、風雪越ヶ濱前にて收り、雁島にて解散せしは、二時前後なりしか。(平島公平記)

### 第十二回卒業式

三月二十四日、午前九時より、第十二回卒業證書授與式を舉行せらる。縣知事代理坂本縣屬栗屋陸軍少將玉置野北の兩陸軍中佐原神代の兩陸軍少佐内田町長山村檢事以下來賓保證人列席、校長卒業證書並に賞品賞狀を授與せられ、懇篤なる告辭あり、次いで、坂本縣屬知事の告辭を代讀せられ、來賓總代として、栗屋少將の祝辭、生徒總代として、柏村檢三君の祝辭等あり、終りて、卒業生總代長宗純君答辭を朗讀し、式を終へたり。此日、證書を受けたる卒業生諸氏の姓名は、卒業生一覽中に載せあれば、此に擧げず。受賞者並に賞品左の如し。

- 袴地 一反
- 長 宗 純
- 右本縣賞與規程第一條第一項に依り縣知事より授與せられたるなり
- 半 紙 二 東 以下本校の賞與に係る
- 同
- 右本學年間精勵し學力俊秀にして能く校則を守り且伍長として其任務を盡し卒業の際特に成績優等なるに因り前記の物品を賞與す
- 半 紙 一 東
- 同
- 右本學年間精勵し學力俊秀にして能く校則を守り且伍長として其任務を盡したるに由り前記の物品を賞與す
- 半 紙 一 東
- 同
- 右本學年間精勵し學力俊秀にして能く校則を守り且伍長として其任務を盡したるに因り前記の物品を賞與す
- 半 紙 一 東
- 同

- 原 政 一
- 陶 村 政 一
- 伊 藤 義 彦
- 平 島 公 平
- 秋 本 一 郎
- 伊 佐 小 次
- 渡 邊 梅 吉

右本學年間伍長として能く其任務を盡したるに因り前記の物品を賞與す





右本學年間精勤せしにより之を賞す  
修學旅行

四月二十三日、五年級生一同、丸本、山本、藤井、三教諭に引率せられ、修學旅行に出發す。紀行文一編あり、當時の詳細を知るに足る者あれば、左に附載す。

修學旅行日記

桃李花已に落ちて、氣温は、冷熱其度を得、今や旅行の好時節たり、是に於て、吾五學年生六十餘名は藤井、丸本、山本、三生先の引率の下に、筑後國大牟田方面へ修學旅行する事となれり。

四月二十二日午後九時、旅行隊は、命の如く、大阪商船會社出張店裡の波止場に集合したり、折しも、降雨彌増し激しく、一行は爲めにづぶ濡れの浮目に遇へり、暫くにして、點呼終り、見送の人々と、袂を分ち、新庄丸に便乗しぬ、夏蜜柑の積荷、思の外に賑取りて、抜錨は、十二時四十分延引せられたり、船は聳々たる機關の音と共に進行を始めつ、雨は漸く小降となり、海上風死して、さながら鏡の如くなりき、舷側の暗潮には、機火飛散して、美觀譽へんに物なく、城下の點々たる燈火も指月山の雄姿も、次第に遠ざかりて、其壯快云はん方なし、余等は暫し甲板の人となりて、故郷の空に憶懷れたり、二十三日、青海島、川尻沖、はては、名にし負ふ角島燈臺も、夢の中に通過しぬ、響灘に入りし頃、けたまましき汽笛の聲に目覺め、見れば濃霧濛々として、咫尺を辨せず、船は、斯る場合には、渚近く航海するは危険なりとて、進路を、西へ西へと取りたるなりとは、後に聞知するを得たり。

往日、上村艦隊が濃霧の爲に妨げられて、目ざす敵艦を打漏したるは止むを得ざりしなりと、初めて覺りぬ。十時二十分、流石の霧も漸く薄らぎて、東方遙かに、藍色淡き本州西端の邱陵を望見するを得たり、實にや、渺々たる沙漠を旅する隊商の、オアシスを見出でたらん時の喜は、かくやあるらむ。

六連蓋井諸島の飛石然たるを、後に見て、船は關門水道に入りぬ、兩岸の峻嶺峨々として、綠嶺らんとし、彦島嚴流島、之と相映じて、其景致を添ふ、嚴流島は、昔宮本武蔵、佐々木嚴流と、武技を角したる遺跡なりといふ、關門の水道は、東西交通の咽喉にして、大小の船舶、出入織るが如く、所謂の朝に千艘の出船あれば暮に萬艘の入船あるものなり、潮汐迅速にして、動もすれば、危険の惧あり、然れども、近時内務省は、之が改良に腐心して、或は海底を深へ、或は築港する等、種々手段を講じつゝあれば、其缺點も遠からずして、除去せらるべし、十二時十五分、下關に着す、顧るに、昨夜萩を出てしより船室に居ること十五時間なり、種々の事情の下にかくも遅れたるなれども、交通

の不便は、貴重なる光陰を空費せしむること大なり、三時四十分、連絡船に乗り十五分にして、關門海峡を渡り、九州の地に入る、直に門司驛發三時三十分の汽車にて、大牟田に向ふ、憎き雨は又もや霏々たり、轟々の音と共に南行す、山飛び、水走り、民屋市塵林叢崖岸悉く踊り去りて、應接に遑あらず、汽車は、三十分の後、小倉に着し、戸畑、枝光をも過ぎて、やがて、八幡驛に到る、此間、右に、煙突林立黒煙天に漲り、工場棟を連ぬるを見る、是ぞ東洋第一と稱せらるゝ八幡製鐵所なり、折尾福間を過ぎ、夕方、千代の松原を後にして、博多久留米を經、大牟田に着きは午後七時三十一分なりき、本日は、惜い哉、夜に入りければ、豫定の如き觀覽も出來ず、此地に一泊する事となれり。

住吉旅館に入り、草鞋の紐を解きたり、十時まで、自由散歩を許されたれば、或は市中見物に出づるもあり、或は、はや、床に就くもあり、何れも、嬉々談笑の裡に、寢に就けり。

二十四日、今日は、三池炭坑全部を見物し、太宰府に詣て、博多に一泊の筈なり。三井炭坑會社には、藤井先生の舊友藤村藤氏、及び我輩出身の工學士林新作、林俊香の兩氏ありて、多大なる便宜と懇切なる、指導案内の勞とを取り給はりたるは、吾等の最も感謝し、併せて光榮とする所なり。

旅館を發したるは七時過なりき、嗚呼偉觀、抑も、三池炭坑に冠すべき讚辭は、街口語を措きては、他にあることなし、規模の大、山麓の長、三井の寶庫として、北九州は不知火の有明灣頭に、一萬數千の石炭とを吞吐しつゝある、東洋一の炭坑たるは言はずもがな、一萬噸の巨船三隻を、同時繫留せしむべき築港工事、斯界の耳目を聳動したる三池式快速積込機唯々文明の威力に驚歎するの外なし。

炭坑の位置は、山河を併呑して海に及ぶ形にして、鑛區は、福岡熊本兩縣に跨り、東西一里半、南北四里の幅員を占め、表面は、東北方に聳ゆる三池山より、鳥原灣に達する平坦廣潤なる田圃にして、所々に丘陵起伏せり。九州鐵道大牟田驛を中心として、交通の便頗よし。始めは官有なりしが、明治三十二年遂に三井氏の有に歸し爾來嶄新なる利器を裝置するに務め擴張に擴張を重ねたる結果遂に、今日の盛況を呈するに至れるなり。採炭總區は三百五十万坪に亘り坑口六あり。就中万田坑は絶大なる設備を有し、更に東北一哩を隔て宮の原坑あり。三池獨得の因人作業は専ら同坑にて行はるゝ由なり。其他宮の浦七浦大浦驛立の四坑を合して、三池炭坑と呼ぶ。吾等此度旅行の最大目的實に斯坑の見學にありしなり。

一行は三氏に引率せられ、先づ發電所を訪ひぬ。電機は一科専門の學に屬し説明中士の八九は合點するを得ず。只工場の壯大にして、機械の裝置の複雑なりといふ印象を心裡に留めたるのみ。此電力が即ち當炭坑内津々浦々に導かれて、斯の如き大作業をなさしむるなり。

一行は更に足を築港方面に運べり。當築港工事は、我國鐵業發達史上に於ける一大雄圖たるを失はず。有明灣底一面の混濁淺灘をなし、干満の潮の差十八尺に及ぶ厄介の處なりければ、往時は輸出設備甚不完全にして爲めに生ずる損失と不便とは決して尠なる能はざりき。是に於て三百万圓の巨資を投して雄偉豪壯なる設計を畫したるなり。即ち海面一哩四方を兩分し、半を浚渫して港となし、其土砂を以て一半を填め陸地を作り、中央に一大「ドック」を鑿成する方法なり。埋築地の兩端より南北二條の大突堤、海上に突出し一條の水路を挟む。其延長實に一千間に及ぶと云ふ。其水路の極る所に壯大なる一個の閘門を設く、其内は四万坪に渉りて三角形をなせる一大「ドック」にして石炭の積込は此處にてなされるなり。然して干満の差を調節するは彼の閘門による。

大「ドック」正面の繫船壁は長さ四百呎にして、一万噸の巨船三隻を同時に繋留せしむべく、岸上には天を衝く三臺の特許三池式快速積込器の装置あり。此器を以てすれば一日五千噸の荷役に堪へうと云ふに至りては巧妙巋新、確かに世界的大發明たるを失はず。一行は次に万田坑に導かれぬ、万田坑は、三池六坑の中にて最重要なるものなり。同坑は堅坑二箇所あり。共に深さ約一千尺に達し、一日の出炭高は二百五十噸なりと云ふ。其壯大推して知るべし。同坑は排水設備の完全なるを以て名あり。昇降機によりて坑内に降れば、一千尺の地下に、排水機關の雄大なるものあり。其首腦坑道を渡り見ば、必ず廣闊なる工事の施されあるに一驚すべし。

坑道は煉瓦の長壁と、頑丈なる支柱とにてなり、堅坑直下を四通八達す。主要坑道は電車を引ひ、分坑道はエンドレスロープを利用して、人手を借らずして運搬の用を達せしめ、電燈は限なく點せられ、手に携へたる最新輸入獨逸式安全燈も、殆ど其要を見ざる程なり。一千尺の地下に斯の如き大都會の實現されんとは、娑婆の人の夢想にだに及ぶ所にあらず幾千の坑夫共は此地下にて、高熱七十度の中に全力を傾注して。一日百噸以上の採炭をなすつゝありと云ふ。

堅坑より搬出せられたる石炭は、間斷なき昇降機の運轉にて、直ちに選炭場に送られ、大塊中塊粉炭の三種に筋ひ分けらる。斯くして、自然に階下のレールに導かれて、炭車の上に落下し、滿載すれば、機關車之を引き、社の専用鐵道にて、各方面へ運送す、専用鐵道の總延長は、四十哩に及ぶと云ふ。万田坑を出て、職工千二百を有する大鐵工場を見る。其規模の大なる事亦筆紙に絶せり。

殊にうれしく感じたは、吾等の同輩なる、青服著したる工業學校の生徒諸君が、實習に従業せられつゝありたるを參觀せし事なり。要するに、同坑は、前途尙頗る有望にして、採炭の如きも未だ其十分の一に達せず。やがて築港工事も大成せんか、泰西のそれと比して少しの遜色あるなし。殊に特筆大書すべきは、目下工事取急中なる、煤炭製造所之なり。書きたき事は種々山々なれども、余りに長きに渉るを以て、遺憾ながら、此に擱筆す。やゝ疲れたる足を曳き、午後二時半宿に歸る、此間七時間を費せり。此短時間にて、大工業地を一週し、略々大體を觀覽し得たるは、一重に前三氏の盡力にて、坑内の電車及び汽車を利用するを許されし爲なり。此に再び三氏の好意を謝す。三時七分、大牟田發上り列車にて出發、午後四時十五分、二日市に下車し、太宰府神社に參詣す。太宰府神社は官幣中社にして、筑前國太宰府

にあり。宮は、今を距る、一千三百年前、延喜五年の創建にして、月を經年を重ねて、終に、今日の如き輪奐の美をなし、禮賽の男女常に絶えず。社殿は、背に青山を負ひ、前に大池あり。群鯉其中に遊び、老樟數株、枝幹空を蔽ひ、影を池水に涵せり。梅樹は菅公に因みて最も多し。自然の美と、人工の美と相調和して、一つの樂園をなせり。「太宰府神社、社殿に金銀を鑲めず、丹碧を施さず、素樸にして高潔、所謂神々しき趣を存し、自ら神威の高きをを表す」と何某の記し、趣に違はず。されば、下に述ぶるが如き者は、人をして、轉た靈覺を禁ずる能はざらしむ。社殿の右側に、一棟の家ありて、白衣の神職數人、數多の御札守、菅公の肖像、其他種々の物を陳列して、之を嚮くを認む。御札守に大小種々あり、價值各差あり。夫れ、社寺にて、御札守を販賣し、愚民を籠絡し、金錢を貪る事は、且つは神威を瀆し、且つは宗教の神聖を傷くるものならずや。又社殿を去る事遠からざるに、數多の飲食店ありて鼓歌の聲常に絶えず、賽客の後を追ひ來りて、遊興を勤むる婦人あるに至りては、神聖を汚損すること最も甚し、浩嘆に堪へざるなり。吾等は、汽車の都合にて、長く足を留むるを得ず、都府樓の跡、天拜山等を見る事を得ず。急ぎ鐵道馬車に乗りて、二日市に出づ。其間僅かに三十三町なれど、時間の都合あれば證方なし。二日市驛に達し、汽車に投ず。時は六時五十六分なりき。間もなく博多驛に下車す。驛前の丸明館は即ち吾等の宿舍なり。晚餐を終り、寢に就くや、全日の疲勞に、忽ち熟睡したり。二十四日、午前十一時迄自由散歩を許可されたれば、各自市街を遊覽す。福岡は九州第一の商工業地にして、博多灣に臨み、曠漠たる沃野を控へ、將來大いに有望なるべき地なり。市の名物博多人形は美麗なれば、家包にとて之を買ふもの多し。西公園は市の西端なる荒津山にあり。吾等はしばらく電車の人となりて、先づ西公園を見物せんとす。道側に、黒田長政の築けりてふ福岡城あり。今は、第三十五旅團司令部及び第二十四聯隊兵營となりながら、尙昔の面影を残せり。西公園に到る。園内の光雲神社は、如水長政の二公を祭れりといふ。公園の海に面せる方に行けば、征露記念碑二基あり。下なる平地に下れば、四方の風景最も佳に、人をして、意氣自ら壯大なるを覺えしむ。福岡全市、千代松原、奈多ヶ原、志賀島の絶景、皆指呼の内にあり。

吾等は、約の如く、十時半、東公園に集合せり。東公園には、龜山帝及び日蓮の銅像あり。音に聞ゆる千代の松原、松の緑と白砂との對照すこぶるよし。日連銅像の附近にパノラマ館あり。此邊一帶の地は、昔日フビライの軍侵入の當時、我軍の決戦地たりしなり。逍遙四顧の間人をして轉た感慨に堪へざらしむ。

十一時十分、吉塚驛を發車す、門司に着したるは、一時五分なりき。例の如く此地より連絡船にて、下關に渡り、九州の地を離る、乗車の都合にて、暫く自由散歩の隙を得たれば、下關市を見物す。

市は、一衣帯水を隔て、門司市に對し、世に小浪華と稱せらるゝ要津にして、西海の咽喉を扼し、處々に砲臺の設あり。市の東方阿彌陀寺町に赤間宮あり。官幣中社にして、安徳帝を祭る、建久中の創建に係る。龜山八幡宮は、海に臨める小丘上に鎮座し、水光帆影掬すべく、御龜銀杏、岸の松、豊公の韓國より齎せしといふ蘇鐵などあり。本日は先帝祭の事として、市内は、男女の往來、織るが如くなりき。

五時十分下關驛を發し、小郡に向ふ。車は走り、景は轉じ、長府驛を過ぎる頃、車窓より、波濤なる海上に、千珠滿珠の二青螺を見る。風光頗る明媚なり。大嶺線の分岐點たる厚狹驛を過ぎ、小野田驛に到れば、遂に舍密セメントの二會社を見る。煤煙空を蔽ひて模糊たり。小郡驛に着したるは、正に八時。之より、輕便鐵道の便を借る。一車箱六十幾人を詰め込みて、苦しみ事限なし。山口町堅小路中川旅館に着したるは十時過なりき。

二十六日九時、一行は、歩武整々、鴻城を發す。軍歌の聲勇ましく、一の坂を越えぬ。流汗珠の如し。十二時卅分、佐々並に着し、林屋にて晝食をなす。休憩する事暫くにして出發。膝栗毛に鞭打ちて行く事里餘、櫻の茶屋に立寄る。元氣益々旺盛にして、難なく、一升谷の險を過ぎ、午後四時半、鹿背隧道外の茶屋に着す。吾等の大いに感謝する所は、下級生諸君が、里餘の途を、懇々吾等のために、出迎の勞を取られし事なり。

五時、元氣頓に加り、隊伍整々、鹿背峠を下る。松陰先生のゆかりある涙松の邊にて、指月山の英姿を望む。笑をたゝえて恰も一行を迎ふるものゝ如し。大谷嶽の蜿蜒たるを過ぎ、金谷社前に達すれば、諸先生並に生徒諸君の來り迎へらるゝあり、喜ばしき事限なし。而して、校長の知簡なる訓諭ありて、五時四十分、吾校の萬歳を三唱して解散す。樂かりし旅行も遂に終結をつけぬ。此に監督諸先生の勞を謝し、以つて筆を擱く。

### 松陰神社參拜

五月二十五日、零時四十分より、例に依り、松陰神社に參拜す。

### 軍人志望者の柔劍道會

六月七日、午後一時より、本校生徒にして、軍人志望者たるものゝ柔劍道會を、本校道場に開く。古谷栗屋の兩陸軍少將小倉大佐其他の在郷軍人諸氏出席周旋せらる。會終りて、來賓に、茶菓を供したり。是同會が、古谷少將の來萩を機として開催せるものなり。

### 久原氏の來校

七月一日、午前十一時、久原房之助氏は、實兄齋藤幾太郎氏等と共に來校し、齋藤氏は、久原富美子氏獎學資金の件に付き、簡短に演述する所あり、終りて、久原氏は、一場の演説を試みられたり。右演説の要旨は、某氏の筆記せる者を得て、講演欄に收め置きたれば、就きて見るべし。獎學金給與規程は左の如し。

### 久原富美子氏獎學金給與規程

此規程は今回久原富美子刀自が學事獎勵の爲め萩中學校の優秀なる卒業生の更に高等の學校に入學する者に學費を給與せんことを思ひ立てれ不肖等に其の規程の制定及給費生の選抜監督等を依頼せられたるを以て不肖等の議定して刀自の承認を經たるもの也。

明治四十五年七月一日

|   |   |   |
|---|---|---|
| 澁 | 吉 | 良 |
| 増 | 山 | 宗 |
| 菊 | 屋 | 孫 |
| 村 | 上 | 俊 |
| 松 | 本 | 善 |
|   |   | 一 |
|   |   | 江 |
|   |   | 輔 |

- 第一條 久原富美子氏獎學金は山口縣立萩中學校の優秀卒業生にして更に高等の學校に入學せる者に學費を給與する爲めに設く
- 第二條 給費生は毎年新に參名を選び其の内壺名は高等學校又は私立大學に入學せる者他の貳名は高等専門の學校本科に入學せる者とする但し私立大學及東京神戸高等商業學校の豫科本科と同視す
- 第三條 給費生にして高等學校を卒業し帝國大學に入學せる者には引續き學費を給與す
- 第四條 給費生たる者は左の資格を具備する者に限る
  - 一、性質善良にして品行方正なること
  - 二、體格強健にして成業の見込あること
  - 三、學業の成績優秀なること
- 四、萩中學校に第一學年より在學せること但し第一第二第三の各項に該當する者は本項を缺くも詮衡委員協議の上特に撰拔することあるべし
- 第五條 給費金月額は大學に在學する者には貳拾圓私立大學豫科及東京、京都、大阪、神戸の高等學校又は高等専門の學校に在學する者は拾七圓其他の學校に在學する者には拾五圓とす
- 第六條 在學中左の各項の一到該當する給費生には給費を停止す
  - 一、不品行又は不徳義なる者

### 本校記事

- 二、學業の成績劣等なる者
  - 三、疾病其の他の事故に因り卒業の見込なき者
  - 四、學年試験又は卒業試験を受けざる者又は之に合格せざる者但し正當の理由ありたることを證明したるときは此限にあらず
- 第七條 給費生の選抜監督給費の中止停止等を取計はしむる爲めに詮衡委員五名を置く其の内貳名は萩中學校長及首席教諭にして他の三名は奨學金給與者の指名依囑せる者とす
- 第八條 詮衡委員中一名を常務委員と爲し萩中學校長之に當る
- 第九條 詮衡委員は毎年八月下旬までに給費生を選抜し第四條第一第三及第四項に關する萩中學校長の證明書及第二項に關する醫師の診斷書を添へて奨學金給與者に報告すべし
- 第十條 給費生となりたる者は左の誓書を學費給與者に差出すべし

(用紙美濃紙二ツ折)

誓

書

掲 者 儀

今般何校何科に入學致貴殿の給費生に選抜せられ候に就ては自今一層衛生を重じ品行を慎み學業に奮勵し以て必ず貴殿奨學の御篤志に酬ひ申すべく仍誓書如件

何縣何郡何町何番地何某男族籍

年 月 日

氏 名 年 月 日 生

久 原 富 美 子 殿

第十一條 給費生は宿所を給與者及常務詮衡委員に届け置くべし轉宿の場合も亦同じ

第十二條 已むを得ざる事情ありて轉學休學又は退學せんと欲する者は豫め詮衡委員に申出て其の承認を受くべし詮衡委員は其の意見を付し之を給與者に通告するものとす

第十三條 給費生は毎學年の初一月以内に於て前學年の學業成績を詮衡委員を経て給與者に差出すべし

第十四條 給費金は毎月之を給與す但し修學旅行二箇月以上に亘るときは學校の證明書を添付して旅行中に受取るべき給費金の前渡を請ふ

ことを得

第十五條 給與金を受取りたるときは其の都度受取書を給與者に差出すべし受取書に用ふる印形は聖書に用ひたるものと同一なるべし

第十六條 四月より學年を開始する學校に在學する給費生には其の入學せる年に限り九月に於て以往五ヶ月間の給費額を一時に渡すことあるべし

第十七條 休學せる者には休學期間給費を中止す

附 則

第十八條 此規程は明治四十五年度の卒業生より實行す

第十九條 將來此規程を廢止することあらんも其の際給費生たる者には其の卒業まで給費を繼續すべし

師範學校生徒の來萩

七月二十一日、本縣師範學校生徒四百餘、校長教員諸氏に引率せられ、本校寄宿舎に來宿せらる。十日間、當現に在りて、游泳講習の筈なりしが、聖上崩御に會し、閉會式を略し、三十日午前中に、山口に引揚げらる。右見送の爲、村上校長は特に出校せられたり。

聖 上 御 不 豫

七月二十三日以後、聖上御容態に關して、縣廳より、時々電話を以て通知あり。其都度、校長は、在萩各教師へ通知し、更に便宜もよりの生徒に通知せしめられ、二十九日に至り、御容態御危險に拜せらるるとの報あるや、直に各教師を召集し、此旨を告げ、尙數通の回章を作り、生徒一般に通知せられたり。翌三十日、午前六時、崩御の報至るや、直に職員會議を開き、午後三時、在萩生徒全部を召集し、講堂に於いて、御眞影を拜し、奉悼式を挙げ、終りて、校長より、大喪に關する諸般の要領を説示せられたり。

御 大 葬 遙 拜 式

九月十三日、午後十時半より、御大葬遙拜式舉行の筈にて、十日より、各學年分擔區域の掃除を始む。時々降雨ありしにも拘らず、一同鎌鍬を執り、競争事に従ひ、十二日には、一通校庭及び運動場の掃除を終へたり。遙拜式當夜の模様は左の如くなりき。

遙 拜 式 の 記

九月十三日、本日は青山に於て、大葬儀執行せさせらるるにつき、本校には其時刻にならひ、午後十時より、運動場に、莊嚴なる透拜式を舉行したり。一同は、集合喇叭に先立ちて、運動場に集合せり。式場の中央に、壇を設け、新なる大八足卓に、大なる玉串を建て、其兩側には、篝火をたかれたり。時に風寒く身に沁み、星の光凄しく、一層哀をそへたり。かくて、校長職員一同の透拜終り、五年級より順次に透拜しぬ。此の間、満場寂として、しはぶきの聲さへ無く、莊嚴を極めたり。此の時、衆人の心中果して如何なりしか。式後、校長は、本日より三日間は、本校生徒は特に注意して、不謹慎なる行爲なきやう心掛くべき由を告げられ、十一時解散せり。(T、M生)

勅語奉讀式

校長は、豫めて、歸省中の教員生徒に通知を發し、一日早く出校することを促し、八月三十一日、午前九時、一同を講堂に會し、御踐神勅語を奉讀し、聖旨の大意を布行し訓諭する所ありたり。

校庭掃除の分擔規程

八月三十一日、勅語奉讀式終り、校長は、今回校庭掃除の分擔規程を定めれば、九月より實施すべしと命ぜられたり。規程左の如し。

- 第一條 各學年生徒及び寄宿舎生徒は校庭を分擔し組長及び舎監指導の下に其整理及び清潔に關する左の入手を爲すべし
  - 一、樹木芝及びクローバーを保護培養すること
  - 二、雜草を芟り地面を均らし掃除を爲すこと
  - 三、其の他整理及び清潔に關する一切のこと
- 第二條 入手に關する方法は各學年生徒及び寄宿舎生徒に於て適宜に定むべし
- 第三條 各學年生徒及び寄宿舎生徒の分擔區域は別圖の如し(別圖畧す)

非常警備規程

十月二十九日、左の非常警備規程を發表せらる。  
 第一條 本校は勿論其の附近に非常の事變起りたるときは職員生徒及び小使は之を認知すると同時に直ちに登校すべし  
 第二條 本校の火災に罹り或は類焼の虞あることを認めたるものは先づ型影及び勅語膠本を志都岐神社に遷し校旗を捧げて之を警護し奉り次に教務室及び事務室に於ける重要書類を運び出すべし

- 第三條 前條の場合に於ては直ちに之を校長及び警察官に急報し同時に非常喇叭又は半鐘の亂打等臨機的手段を以て一般に警報すべし
- 第四條 誠之學舎の生徒は第二條及び第三條の規程の外は舎監の指揮を受けて行動すべし
- 第五條 通學生徒は第二條及第三條の規程の外は職員員の指揮を受け左の分擔により盡力すべし
  - 消防 第四、五學年生徒
  - 運搬 第二、三學年生徒
  - 警固 第一學年生徒
- 第六條 警察官及び消防夫の來りたるときは生徒は消防上のことは其の指揮に従ひ主として物品の運搬及び警固に従事すべし
- 第七條 火災外の變災に際しても亦本規程に準じて臨機處置すべし

學友區規程

先帝御不例の際、屢々在萩一般の生徒に通知を要する事あり、便宜に依り、全地域を數區に分ち、各區内生徒をして週次相通せしめしに頗る敏活を感じたるより、遂に本規程を設け、九月九日、之を發表せられたり。規程左の如し。

- 第一條 本校通學生在住區域を分ちて九學友區となし更に之を分ちて二十五小區と爲す。
- 第二條 學友區には區長一名小區には友長一名副友長一名若くは二名を置く
- 第三條 區長は教員中より校長之を命じ友長及び副友長は每學年の初に學友の互選に基き區長之を命ず但し其内一名は必ず區内の自宅通學生たるべし
- 第四條 學友區には學友名簿を備へ置くべし
- 第五條 學友區及び小區の區劃左の如し

東萩學友區

- 第一小區 川島村
  - 第二小區 土原村
- 西萩學友區
- 第一小區 堀内村
  - 第二小區 平安古町

本校記事

本校記事

南萩學友區

第一小區 河添村  
 第二小區 江向村  
 第三小區 橋本町 御許町

北萩學友區

第一小區 吉田町 今古萩町 古萩町  
 第二小區 濱崎町 東濱崎町 濱崎新町 熊谷町  
 第三小區 北古萩町 今魚棚町 樽屋町

中萩學友區

第一小區 唐樋町 東田町 西田町 上五間町 下五間町  
 第二小區 津守町 米屋町 鹽屋町 細工町 惠美須町  
 第三小區 春若町 北片河町 古魚棚町 南古萩町 瓦司  
 第四小區 吳服町 南片河町 南古萩町

椿東學友區

第一小區 中津江 日代 上野 松本 中ノ倉  
 第二小區 雁島 鶴江 香川 前小畑  
 第三小區 中小畑 後小畑 越ヶ濱

椿學友區

第一小區 椿町 金谷 雜式丁 櫻江  
 第二小區 濁淵 梅谷 青海 櫻江  
 第三小區 笠屋 河内 大屋 霧口  
 第四小區 木部 沖原 霧口

山田學友區

第一小區 中渡 奥玉江 山田

三見學友區

第二小區 川屋敷 玉江浦 倉江 小原 青長谷  
 第一小區 河内浦 石丸 一長谷 藏本 吉廣 畔田  
 第二小區 中山市

規程の發表と同時に、校長より、左記各教諭に、學友區長を命ぜられ、又十一月一日、各學友區員をし友長副友長の互選をなさしむ。結  
 左の如し

東萩學友區長

田中 教諭

第一小區友長 内山 芳忠 副友長 藤山 二郎

第二小區友長 香取 敬藏 副友長 山田 健三

西萩學友區長 藤原 教諭

第一小區友長 鈴川 清 副友長 増野 雅治

第二小區友長 柳屋 良輔 副友長 松尾 潔

南萩學友區長 藤井 教諭

第一小區友長 安田 安 副友長 草刈 直清

第二小區友長 卜部 豊安 副友長 篠田 直武

北古萩學友區長 本保 教諭

第一小區友長 池田 猛 副友長 上岡 讓熙

第二小區友長 金子 生一 副友長 永喜 平作

第三小區友長 柏村 稔三 副友長 片山 平作

中萩學友區長 安藤 教諭

第一小區友長 河崎 松之助 副友長 三上 孝之

第二小區友長 口羽 忠介 副友長 竹内 久治

第三、四小區友長 上利 祥介 副友長 飯田 治郎

本校記事

本校記事

|          |    |    |     |    |    |
|----------|----|----|-----|----|----|
| 格東學友區長   | 領野 | 教諭 |     |    |    |
| 第一小區友長   | 格武 | 忠  | 副友長 | 森重 | 橋雄 |
| 第二小區友長   | 堀信 | 一  | 副友長 | 中村 | 百合 |
| 第三小區友長   | 山田 | 雪三 | 副友長 | 熊谷 | 謙介 |
| 格學友區長    | 田總 | 教諭 |     |    |    |
| 第一小區友長   | 池内 | 清  | 副友長 | 三宅 | 十六 |
| 第二小區友長   | 笹村 | 繁  | 副友長 | 江本 | 敏武 |
| 山田三見學友區長 | 山本 | 教諭 |     |    |    |
| 第一小區友長   | 野原 | 英式 | 副友長 | 來島 | 直介 |
| 第二小區友長   | 山下 | 貞一 | 副友長 | 勝野 | 秀信 |
| 第三小區友長   | 横田 | 弘  | 副友長 | 浮里 | 宜也 |

送迎彙報

二月二十日、午後零時十分、教諭本俣次作氏の紹介式行はる。  
 九月七日、J. E. Moncrief 氏の告別式 W. J. Sutherland 氏の紹介式ありM氏山口高等商業學校の聘に應じ本校を去らるゝに就き其後任として、O氏就職せられたるなり。氏は北米合衆國Michigan州 Saginow 市の人、一千九十一年、Oberlin 大學を卒業せられたり。  
 同八日、放課後、教諭戸塚魏氏の告別式行はる。書諭は、神戸第二中學校に轉任せらるゝこととなり、二十一日出發の筈なり。  
 十月二日、教諭田邊友吉氏の紹介式行はる。教諭は、戸塚教諭の後を承けて、地歴の教授を擔當せらるべく、福岡縣立高等女學校より轉任せられたるなり。  
 有福校醫の死去せられたる爲、玉木政輔氏其後任として、囑託を受けられ、十一月十九日放課後、講堂に於て、新任の披露あり、終りて、學生衛生に關する一場の談話を爲れたり。  
 十一月三十日、教諭中村宏規氏の告別式あり。教諭は縣立豊浦中學校に轉任せらるゝ事となりたるが爲なり。

文 林

入學試験の當時を想ふ

宿題、一回添削

第一學年 中 本 義 助

學年の第一學期は、既にとく暮れて、第二學期の末ともなり一輪の明月、天に懸り、寒風徒に枯木を吹く候となりぬ、願れば、往事茫茫として夢の如し。時は明治四十四年朔風凜烈肌を劈く時、中學入學の企畫を立て、日々教師に就きて教へらるること四ヶ月餘にして、櫻花爛漫、春風駘蕩たる候となり、歳日は人を待たずして、早や入學試験の前日となりたり。父母は、吾の合格を、さも祈りたまふらしく、平日よりは、一層、吾を勵ましたまへるが如き感ありたり。さて、試験の當日、旭日のどかに昇りて、南明寺の櫻は満開し、阿武川の川風も靜に吹きて、余の登校を見送れる心地す。さて試験は始まりぬ。こゝに、勇氣百倍し、平日練りたる腦力を絞り出して取り掛り見れば、意外に容易さが如く思はれたり。さて試験は異様なく終りたり。

四月三日に至り、入學を許可すとの葉書を一見し、その喜び言ふ可からず、手の舞ひ足の踏む所を知らざりし程なり。况や、父母の心は察するに餘りあり。さて、入學して見れば、小學とは異なり、學科も複雑となり、校則も嚴肅なることを覺ゆ。予は、その初に本學年間の企畫をたてたりしが、その企畫の如くに成り得

しもの、果して幾許ぞや。

古人の語に、一駿千里の駒も終には鈍牛の歩に若かずといへり。吾等は、滋々志を強固にし、過去現在に鑑みて、未來によく勵精し、進んで倦まざらんことを希ふなり。

### 入學の當時を想ふ

上同

第一學年 木村清一

願れば、予は、去年の二月頃、すでに萩中學へ入校せんと企てたり。其の時、予は高等一學年にして、同級生の入校せんとする者、予を加へて六七人なりき。然るに不幸なるかな、予は、頓に、家事の都合に依りて、入學受験を中止せり。實に残念に耐へざりき。友人等は、幸にも、試験合格せり。此れ我母校の名譽なり。然れども、予の胸中には、かの残念の漂ひて、つまらぬ事ながら、心の浮く暇あらざりき。故に、今年も同じく家事の都合に依りて受験すること能はじと思ひて、試験の事などは、一つも氣に懸けず居たりしが、三月頃に至れば、そぞろに去年の残念、胸に浮び出でぬ。予もし受験すと定り居らば、如何に、多忙を極めしならん。されど、家事の都合なれば、如何に思ひても致し方なし、など思ひつゝ、思きつて、快活に家事の手傳等をなし居たり。然るに、七日の後には試験あるべしと云ふ頃となりて、外國に居る叔父より通信あり。その書面に曰く、「萩中學校にて入學試験を受けよ」と。實に、其の時の予の心中の喜び、如何に言ひてよからん。さて其翌日は、先づ取敢へず、願書を書きて、直ちに中學校へ持ち行きたり。出願は滞りなくすみたり。予深く考ふるに、予は今高等二學年を卒業し居れり。即ち小學を卒業して中學の試験を受くるなり。

友人の某は、尋常六學年、若しくは、高等一學年修了なり。されば、予は、彼等より、一年、若しくは二年多く修學せり。されど、彼等は、半年許も前より入學準備書等を見て、充分受験用意を爲し居たるに、予は、何分俄の事なれば、斯の如き用意、一つもあらず。若し予が不幸にして不合格となりたる時は、否否、よく考ふべからず。事此に及び、快活に運動して、試験の期日を待つより外なしとて、大いに運動せり。かくするうちに、三月三十日は、來れり。朝早く起床して、家を出で、親友なる某に連れられ、急足にて、中學校さして行きたり。道中某より、受験の心得等を聞きつゝ、歩むうち、學校に着けり。試験は始まりぬ。然るに、意外に、算術國語皆容易かりし爲め、早く、答案紙を、先生とおぼしき人に差出し、友人と同道にて、我家に歸りぬ。翌日の體格検査を受けたり。此は確かに甲種なりしが、學科試験も正しかりきと思へども、また如何にも氣遣はしかりき。種々思ふ内に、四月十日は來りぬ。朝、學校より、合格の通知あり。嗚呼、これにて、予は、萩中學校生徒となりたるなり。

### 入學試験當時を想ふ

上同

第一學年 倉重義雄

余は、この進歩しつつある社會に貢献せんと目的を以て、昨冬、中學校入學志願と決定し、寒風身を裂く頃より、毎日一生懸命に勉強しつゝありしが、春に入りて母校なる小學の學期試験もすみ、春季休業とはなりぬ。入學試験は迫れり。三十日は、即ち我が運命の定まる日なり。うぐひすは梅枝に嚙り、山川草木春信を報ずる時となれど、余には未だ春が來らざるなり。愈々試験當日となれば、友人二三と同行し、定の時

間に、中學校に行きたり。門側の小舎にて、受験番號と受験料受取書とを受け、指圖のまゝに控所に行きたり。こゝには、既に多數の受験者集り居れり。待つこと少時、やがて、前方に於て喇叭の音聞ゆ。あな、始まるかと思ひ、まつしぐらに進み行きて見れば、名も知らぬ先生數多居られ、受験者の名を一々呼ばれたり。さて、愈々第二次の喇叭、強く我等の耳を劈くと共に、受験場に入りたり。豫て、父の言に、「試験を受くるには、先づ心をちつつけて、題意をまちがへぬようにし、分らざる所あらば、分りたる方より行ひ、而して、業の間には必ず便所に行け。」といはれしにより、其の通りになしたり。さて、如何なる問題出づるか待ち居りしに、案外容易く思はれしが、ただ算術の第一番の運算を違へたるは、甚だ残念なりき。翌三十一日には、身體検査を受けたり。此の頃、少々風邪にかゝり居たりしが、その翌日より、家に臥すやうになりぬ。一日違ひにて、身體検査を受くることを得たりしを思へば、今も、身がずんとするなり。成績發表當日も、尙起床することを得ざれば、友に頼みて、掲示の趣を知らせらるゝことを得、入學許可と聞きたる時の嬉しさ、病氣も忘るゝばかりなりき。やがて、入學通知の葉書は來りぬ。四月七日、入學式行はれ、校長の訓示を受け、こゝに、始めて、萩中學校生徒の一人となり、今は春も春らしくなりて、翌九日より通學を始め、これよりは、一層勉強せんと決心したり。

秋

宿題一回 添削

第一學年 梅田秀起

衣は裕と成り、蟬聲は松蟲の聲と變れり。郊外に出づれば、天高くして、氣清く、廣き稻田は、風吹く毎に、黄金の波をたゞよはし、稻穂をついばむ雀の群は、鳴子の音に驚きて、いづくともなく飛び去る。さて、山に入れば、栗拾ひ、茸狩等に、遊び戯るゝ童子の聲も聞ゆ。秋の月は、春花と共に愛賞せられ昭昭として鏡の如く、千草八千草の咲きみだるゝ所に照渡り、露にやどりては、螢の光の如く、大海を照しては、金波を漲らせり。やがて、霜降る頃に至れば、百樹皆紅葉となり、所謂、二月の花より紅なりの景に變じ、滿溪、錦繡の如き景を呈す、げに、龍田姫の染出したる錦に比せらるゝも宜なり。此の景色を愛しつゝ、山野を跋涉する、誰か愉快をさげばならん。されども、秋は、正に是れ燈下親むべく、書編緋くべき時なり。時に及んで勉勵し、出世の資となすこそ、吾人の第一の務なるべけれ。

友人の病狀を郷里に報ずる文

一時間即題 一回添削

第二學年 近藤常雄

拜啓前略御免被下度候、御令息三郎君昨日午前三時頃より突然苦悶の聲を發し苦み居らるゝ様子に御座候へば隣室に少し用事有之候ひて早くより起き居し小生は驚きてかけつけ見候處吐物飛散の中に伏し居られ候依て電話にて近所の山下醫學士の來診を乞ひ候處其診察の結果青年元氣にかられ校催マラソン競争に参加せられし爲以前より未だ全快せざりし某病の再發せしものと知られ候間同醫師の言に従ひ信用ある日本病院に入院被致候名醫の手にかゝり居られ候へば近日全快退院のことは必定のことに御座候間何卒御氣遣被成間敷右不取敢御報知申上候なほ以後の御容態は其經過により御報知可申上候、草々不備

### 故郷の弟に學事の狀況を報ずる文

一時間即題  
添削せず

第二學年 藏 田 正 一

拜啓 既に初夏の時季に入り野も山も緑滴る如く蟬の初音も蒸し暑く聞え初める様になつた。御身は御兩親の膝下で定めし楽しく愉快に御暮しの事と察する。兄も専心勉強し在れば安心するがよい。

扱て兄の通學する學校の様子を少許り話して見やう先づ二學年に入つて組長の先生が變られた今度は何某先生といふ極めて親切な方だ。又組は一學年の時は一之組といふのであつたが今度は二之組といふのになつた、其他種々の變化があつた。課程は差程に一學年と變りはないが代數といふのが新に加はつたこれは随分腦力を要する學科である。然し兄は幸に十人並の成績を占めて居る。

今度の土曜日は毎年の例によつて短艇競漕會が開かれるが定めし盛會であらうと思ふ御身にも見せ度思へど何分遠隔のことと遺憾至極である。當日の様子は又精しく後に御知らせしやう。

扱て第一學期の臨時試験も最早目の前に近づいて來た、兄は大いに勵んで立派な成績を得又御身の常に望んで居る模型飛行機や其他の珍しい土産を澤山携へて楽しく歸省する心算である。御身も良く學問に勵んで立派な成績をとり共に御兩親を喜ばさうではないか。筆末ながら御兩親によろしく。 忽々

### 故郷の弟に學事の狀況を報ずる文

一時間即題  
一回添削

第二學年 河 野 道

謹啓、春の暖い季節もいつしか過ぎ去つて、何處の里も一面に青葉茂れる樹間に、百鳥の樂しげに鳴く季節となつた。昨日、父上様から、家庭の狀況の報知が參つた。御前も、光ちゃんも大層勉強して居るとの事、誠に結構で、僕も嬉しく思ふ。僕は遠い此處で勉強して居る。來年は、御前も是非此所の中學校に入學せねばならない。參考の爲、今、學校の學事の有様を少しく話さう。生徒の總數約五百人あまり居り、其内、僕等の級が百人餘も居る。一學年に入學すると、先づ、第一に、英語植物が有つて、英語はよほど面白い。これから先は、語學が社會に必要で有る。礦物植物も中々必要なものだ。それから、武道には擊劍柔道が有る。御前は柔道がよいと、僕は思ふ。柔道は初段の先生が指南せられ、劍道も二人の先生が指南せられる。英語の時間には、米人のモンクリーフといふ先生が、色々な事を話したり、行なつたりせらるるから面白い。英語はよく趣味を持たなければいけない。其外、地理でも、歴史でも、總て趣味が無ければだめである。地理の時間には、色々の諸國の産物が見せられ、歴史でも、博物でも、實際に就いて説明せられる。小學校の様に、一人の先生が總ての學科を教へられるのではない。所謂専門の先生ばかりだ。亦漢文と云ふ支那の學問を學ばねばならない。漢文も大層必要で、日本の古い歴史は大抵漢文で書いて有るから、是が讀めねば、昔のことはわからない。二學年から、代數とて面白い數學がある。人々は代數學がむづかしいとて困るが、よく先生の説明を聽いて、自分の心を活動させれば、わからないことはない。御前も中學に入學せなければならぬ故、勉強しなさい、光ちゃんにもよろしく。先は學事のあらかた御報知まで。 草々

### 兄より學事の狀況を報ぜられし返事

一時間即題、添削せず

第二學年 松 本 正 人

拜啓先日御なつかしい御手紙御送り下さいまして大變有難く存じます御手紙によりまして御地の學事の狀況がよくわかりました當地の事にひきくらべまして大變に發達してゐる事がわかりました實に當地程開けぬ所はありますまいと思ひますつまらん私も今は中學校の二年生になりましたが地方の發達にひきくらべまして爾後非常に社會に出て働かねばならん大責任があるといふ事を知りましたそれで今後は一層身體を健康にして日本の歴史をよく讀んで先輩の人々を手本として國語や英語などをよく學んで將來我國の柱石となる様な人物となつて國の爲に働かうと存じて居ます壹學期の試験も追々近づきましたから今迄よりは一層よく勉強しようと思ひます夏休みには何卒御體を御大切になされて健康な御體となられて御歸郷せられむとを切に祈ります 匆々頓首

### 人は一代名は末代

一時間即題、添削せず

第二學年 中 村 貞 夫

「人生僅か五十年」と古人も言ひし如く、人は如何なる偉人豪傑も、將如何なる無智無能なる人も、世に在るは僅に一代なり。然れども其名に至りては、後世永遠に遺りて、或は尊ばれ或は憎惡せらるゝなり。見よ、楠公は如何に、ワシントン如何に、フランクリン如何に、將ひるがへりて、足利尊氏明智光秀は如何に、

前者は、今日に至るも、猶世人に尊崇せられ、後者は、逆賊と稱せられ、以て憎惡し、且、譏らるゝなり。人の名の、後世の人々に及ぼす力も亦大なりと言はずして可ならんや。是に於てか、吾人は大に奮勵努力して以て、其名を後世にまで傳へんことを思はざる可らず。只徒に醉生夢死するは、男子たるものゝ大に恥づべき處なり。故に、今より、大に其覺悟をなし、以て天下に大に貢獻する所なかる可らず。

### 人は一代名は末代

同上

第二學年 石 井 精 一

「人は一代名は末代。」げに人一代の名は、善きこと惡しきことにかゝはらず、幾千年、幾萬年の後にも、誰かゝる事をなしたりと傳はるなり。楠木正成父子、新田義貞の如き者は、今に、なほ、眞に忠臣の鑑ぞと尊び敬はれて、神にも祀られ、北條高時、足利尊氏の如き不忠者は、幾百年の後も、不忠者よとせしられて、其の惡名は、末代迄も傳へらるゝなり。されば、我々も、生前に、善事をなさば、其の名は、末代迄も傳へられ、惡事を働かば、その惡名も、亦末代迄傳へらるべし。こゝに於て、我々は、宜しく、善名を末代に残し、國民の模範として尊敬さるべき人と成らざるべからず。

### 明治天皇

二時間即題、添削せず

第二學年 磯 部 千 尋

今や我等六千餘萬の同胞は、天皇崩御の報に接し、痛悼措く所を知らず。先に、御危篤の報に接するや、萬民大ひに驚き、偏に御平癒の一刻も速ならんとを、天神地祇に祈願せしも、哀れ儘ならぬ浮世の習、遂に七月三十日崩御遊され、偉大なる御霊は、天に登り、永く邦國を守り給ふ神と成らせられたり。

嗚呼此の悲報突如として民間に傳はるや我國民は云ふに及ばず、遠き他國の人々迄も、皆哀悼の念にうたれ痛惜して止まず深く弔意を表しぬ。

謹て惟るに今を去ること四十五年の昔、御父孝明天皇の後を承けて我が萬世一系類なき皇統を御繼承あらせられたり。時に世論紛々として天下麻の如く紊れ居たりしが、天皇は、勵精治を圖り給ひ、遂に明治維新の大業を爲させ給ひ、直に五條の御誓文を下し他日の政事上の大方針を定め給へり。之より四十餘年の長き間、一意専心、邦國の發展を計り給ひ、廢藩置縣、憲法發布等を行はせられ、近くは日清日露の二大戦を行ひ、以て國威を海外に輝し、世界一等國の班に列するを得しめ給ひし等、其御偉業枚舉に遑あらず。

實に天皇は世界の歴史を飾る大英主にまします。今更申すも畏けれども、英邁文武御仁慈の君にましまし其折にふれて讀み出でさせ給ひし御製にも、恒に國家を思ひ人民を慈み給ひし大御心の拜察せらるゝは、畏しとも畏き極なり。尙和歌に秀てさせ給ひし事も、御歴代に例類少きことにして、近時、某外國人は天皇を絶大なる詩人と讃稱し奉れりと云ふ。嗚呼偉なる哉明治天皇其の御偉業を一々申し奉れば筆紙に盡し難し。但神明に近き世界の偉人と申し奉るの他なし。

### 明治天皇

二時間即題  
一回添削

第二學年 吉 田 操

嗚呼、明治四十五年、七月三十日、此日は實に我帝國國民たる者の最も悲痛すべき日なり。叡聖文武に渡らせ給ひし我が明治天皇は、此日午前零時四十三分遂に崩御遊ばされたるなり。當時に於ける國民の悲嘆は如何なりしか、國民の落膽は幾何なりしか。暗雲低く大内山を鎖し、號泣の聲、天地に響き渡れり。余こゝに、拙筆を以て、聊かその御偉績を演べん。我が大日本帝國は、四五十年前に於ては世界各國の、之を知る者甚だ尠く、たゞ之を知る者も、只清國の屬國として知るに過ぎざりき。然るを、天皇の多大なる御盡力に依り、國運は隆々として發展し、日清の役に清國を破り、北清の變に、我が武勇を、世界に示し、日露の役に於ては、世界の強國として、各國の恐れたりし露西亞大帝國を、一撃の下に屈し、今や、國威は赫々として宇内に輝き、世界の強國、世界の一等國として、歐米列國と比肩するに至れり。僅々四十五年の短日月の間に、斯くの如く、我が帝國は進歩發展したるなり。かゝる例は、古今東西、何處にか有る。世界各國の、先帝を、世界の偉人と稱し奉るも亦當然の事なるなり。實に、先帝明治天皇は古今無類の大偉人、大英雄にましましき。古より、偉人豪傑と稱せらるゝ者は、皆文武の兩道を兼ねたる者なり。我が明治天皇は、文武兩道に秀てさせ給ひしのみならず、その御事業に於ては、實に古今無類なり。實に、先帝は偉人中の偉人、英雄中の英雄にましましき。かゝる聖天子を戴きし、我國民の幸福は如何。我等は益々奮勵努力し、以て先帝の遺し給へる我が國をして、益々進歩發展せしめざるへからず。

### 乃木大將

一時間即題  
一回添削

吉 由 操

敵の、難攻不落の金城と稱せし旅順の大要塞を、一撃の下に粉碎せし大名將は誰。我が愛兒の戦死を聞き、毫も之を悲しまず、御國の爲に御役に立ちたりと云ひて喜びし大勇士は誰。凱旋觀兵式の際、他の凱旋將軍は、花馬車に乗じて意氣揚々たりしに、獨り「一將成功萬骨枯」の詩を思ひて、馬上悄然たりし白髮の老將は誰。遊惰文弱に流れし學習院の風紀を一新せし大教育家は誰。滔々たる世の惡風潮に毫も感染せず、毅然として之に抵抗せし大君子は誰。明治天皇の靈樞宮城御發引の號砲と共に、軍刀を以て割腹し、屠き殉死を遂げ、世界の人をして驚嘆せしめし大忠臣は誰。嗚呼、乃木陸軍大將、嗚呼乃木陸軍大將。或人の「今日までは偉れし人と思ひしに人と生れし神にぞありける」と詠みしは、實に當然の事なり。嗚呼、惜むべきは乃木大將なる哉。尊ぶべきは乃木大將なる哉。

### 夕 陽

宿題、一  
回添削

第二學年 櫻 井 義 彦

秋風、肌を刺し、黄金の波の打ち寄する田の邊、學習に勞れし眼を、西山にうつせよ。赤に黄に紫に綠に、彩られし雲、ちぎれては結び、結びてはちぎるゝ處、大なる太陽のいと神々しき姿を見ん。今や將に、太陽は沈まんとするなり。

嗚呼、嗚呼。何たる凄絶の景ぞや。無想の境、無邪の域。誰かこの景に對して、崇高の念を生ぜざらんや。それ、太陽の現象たるや、雄なり、大なり。而して、朝日の景は莊にして、夕日の景は嚴なり。世人、多く、旭日を賞すれども、夕陽の景も亦捨つべからざるものあり。見よ、今や、太陽は没せんとして、没する能はず、何事をか、我等が地球の人々に對して囁くものゝ如し。聞け、その天來の聲を。修養せよ。強者たれ。雄飛せよ。國體を汚す勿れ。天晴なる大正の民たれ。と、聞ゆるは金の聲、玉の音。無意の中、時はすでに過ぎて、四隣暗黒、はや、月の光、星の耀、天色翠綠、あゝ廣き哉。

### 境 遇

宿題、添  
削せず

第二學年 戸 塚 端

此世に生活せる數多の人々の中には、農あり、商あり、或は官吏軍人等種々ありて、互に、相助けあひて、この複雑なる人間社會を形成すれども、其身分に至りては決して同等ならず。或は嶄然衆人をぬきて、高位高官に登り、身には金色燦爛たる美衣を纏ひ、常に大厦高樓に起居して、何事も唯心の儘なるものあり。或は平々凡々として市井の凡人に伍し、平凡なる生涯を醉生夢死するもあり。或は赤貧洗ふが如く、身には襤褸を纏ひ、喰ふに食なく、住むに家なく、一命を有志家の情によりて辛くも保ちゆくもあり。かくの如く、世のあらゆる人々盡く其境遇を異にし、其間隔の甚だしきは實に驚くに堪へたり。同じく人と生れきて、かばかりの差を生ずるは何故ぞ、これ皆其人の意志の如何に依るなり。

凡そ人と生れては、何人も其身の榮達を望まざるものはあらず。然りと雖も、其意志の強弱に於ては決して同一ならず。或は其意志鞏固にして、如何なる困難に遭遇すとも、百折撓まず、千挫屈せず、其困難にうち勝ちて遂に立派なる境遇を造るもあらん。されど、世の多くは薄志弱行の徒にして、前路に横れる數多の障害に堪へかね、遂に己の意志を放擲して徒に安逸を貪り、他人の境遇を羨むのみにして、一生世の敗殘者となるに至るなり。かくの如き徒は、常に歎じて曰く「嗚呼、不運なり。何故我にのみ好運は來らざるか。」と。

是等の輩は畢竟境遇てふものを解せざるなり。

夫れ宇宙は茫漠たり。好運の神は到る所に存在し、立身の好機は常に我等の捉ふるを待てり。されど、この神を發見し、この好機を捉ふるは甚だ難し。故に意志薄弱なる輩は、其あまりに難きに失望し、安逸を希ふに至るなり。滾々として湧きいづる清水も、滯ること久しければ、遂には子才の生ずるが如く、如何なる天資を有する人も、かくの如く安逸を希ふの心生ぜば、決して何時までも天才たること能はず、遂には他の者に追ひこされて、立身の好機を逸し、不幸なる境遇を造るに至らん。又之に反し、如何なる天質遲鈍なるものと雖も、克く己を知りて奮勵し、一意専心唯其業務に勉勵せば、遂には世の天才をも凌駕し、偉大なる境遇を造るを得べし。况や其天資非凡にして、尙大いに奮勵するに於ては、如何なる境遇と雖も容易く造るを得べきなり。かくの如き人物の好典型たる彼の大ナポレオンの言に曰く、「境遇か、我境遇を造る。」と。宜なる哉。大いに味ふべきは此言なり。即ち如何なる人の榮枯盛衰も、皆自然の境遇にはあらず、其身の造りし境遇なり。

故に此境遇は即ち額に出づる汗の結晶なり。其出てし汗が奮闘の汗なるときは、其結晶は完全にして且大に、又安逸の汗なるときは、不完全にして小なるものなり。

今まで述べ來りしは、一個人につきてなれども、大いなる國に於ても亦然り。其國の強さと、弱さと、又文明なると否とは、皆其國民の意志の強弱如何に依るなり。僅か數十年の前までは、其名も世に顯れず、外國製の地圖に、往々支那と其着色を同じくせられし我日本帝國が僅々四十年の間に、一躍世界の一等國に列するに至りしは、これ、一天萬乘の君の御稜威に依るものなれど、亦我國民の鞏固なる意志與りて力ありしものといふべし。

此大偉業を承繼せんとする我々青年たるものは、大いに奮勵努力して、我國をして尙一層幸福なる境遇を得しめざるべからず。

月日の小車の廻りは矢よりも疾くして小止みなく、河水は逝きて再び還らず。大いに振ひ起てよ我國民。一寸の光陰決して輕んずべからず。

### 友を諫むる文

一時間即題  
一回添削

第三學年 柴 田 省 三

拜啓階前の梧葉既に落ち木枯も將に吹かんとする候に候處二三日前より君の姿は我教室に見えず相成候故病氣にもやと種々噂いたし居り候處風説によれば貴兄は時々町を通られ病氣とも見えずとの事君學業を廢して逍遙し而かも病氣にあらずとなればそも何の用に候ぞ古人も「少年易老學難成一寸光陰不可輕」と云ひ居り

候に君は何の故に此少壯時の大切なる時を空費せられ候か君は未だ詩歌管絃をもてあそび酒池肉林に遊ぶに至らずと雖も今にして行を改められずば遂には我校の名を墮し先祖の名を辱しめ給ふに至らん余は君を惜みて失禮をも顧みず一言して未だ墮落の淵に沈まざる内に君を助けんとするものに候君幸に我言をいれて再び同じ學びの庭にて勉められん事は余が一生の願に候ぞ過つて改むるには、かる勿れ君明日より直に登校せられよ切に待ち居り候勿々

友を練むる文

上同

第三學年 横山 繁介

拜啓時下秋涼の候に御座候處益々御清福に渡らせられ候段奉大賀候下りて拙者方も皆々無事消光罷在候間乍憚御休神被下度候

扱て近頃聞知候所によれば貴兄には寫眞の業に忙がはしく學校も爲めに屢々御缺席遊ばさる、由實に驚き申し候小生も始めには中傷の言とのみ信じ居候に意外にも眞實に候はんとはあれ程賢明なる貴兄殊には先生の御覺えも芽出度君がかくも學業に不熱心になられ候は如何にもはがゆく候勿論御朋友の中の奸惡なる者の徳憑による事とは硬く信じ居候依つて何卒惡友共をのぞき寫眞の業等は御廢止被下度候但し寫眞の業の全く惡きが故に御止致にはあらてかくの如き技藝は兎角遊び勝ちと相成るものと信じ候に由り御止致候儀に有之候萬一御止り無之節は自然に惡友の爲め感化されて其後に至り氣付候共最早取返しのかざる様相成可申候惡友をのぞき遊逸を避け拮据黽勉以て身を立て名を擧げ父母を表すは賢明なる君として實に易々たる事に候は

ずや深く君を信頼して諫むる微意の一端をも御斟酌被下候は、獨我身の幸のみかは草々

友を諫むる文

上同

第三學年 下井 干城

村はづれの野原にて、君の將來の方針、希望等を聞かされしは、早や三歳の昔と相成り候。其時、君の熱烈なる離別の握手に、我は如何に泣き申し候ひしか。只々數ならぬ一農兒の我も、光輝ある、元氣ある、而して潑灑たる君の希望の、一刻も早く、君の鋭敏なる頭腦と手腕とによりて、實現せられんことを祈り候。

あゝ、何を思はむ。今この悲しき消息に接し申さんとは。祈りし神の御情のなきに候や。否々、決して然らず、遊惰なる東都の暗流に、おし流されたるに候。將た、君の精神の金鐵ならざるに有之候。

思ひ起すも、只涙の種に御座候。君が躍り狂ふ胸を抑へて、この村を去りしより、爾來三年、風雨暑寒の日に関らず、朝は露を踏みて野に出て、夕は星を戴きて、茅屋に歸る迄、一瞬も余の胸を離れざりし者は、君を想ふの情に外ならず候。

あはれ、君が東都に出て、より、絶間なく送らるゝ御手紙に喜びしは、東の間、一月たち二月立ちてより、君の御消息にだに接せず相成候。剩さへ、今この惡しき君の墮落の報を見る。君よ、我は又何をか言はむ。あゝ、情深き君の心、いと厚き君の信義、はた君の孝行の心は、最早君を去り候や。我は昔の君の逝きしを悲しみ申し候。

されど君、ひるがへつて、君の家庭を見たまへ。一人の御老母と、一人の御令妹とが、指折り數へて、君の

成功を待ちつゝあるに候はずや。又君を兄と慕ふ一農兒の又、君の成業を祈り居るに候はずや。燃ゆる我等の情が、吾の心に通せざるが、いとゞ残念に之有り候。君、東都を棄て給ひては如何。寂しと雖も誠の村へ歸り給ひては如何。而して我等と共に安らげく農を勵まれば如何。

秋風颯々たる夜、叢にすだく蟲の聲を聴きつゝ、つまらぬ胸中を披瀝仕候。女々しき事乍ら、涙に筆も滞り文章意の如くならざるは、幾重にも御諒察奉願候。

### 友を諫むる文

上同

第三學年 兒 玉 才 三

向寒之候貴君には御障りもなく御健勝に御暮しの事と遠察仕候先日天神祭には御來萩の由承り候處一向に御見受け申さず候間如何やと存候處此程世間の噂に承り及ぶ處によれば貴君には近頃二三の悪友と交り學業も殆ど放棄の有様との事諺に「火のなき所には煙上らず」とやらまさかに虚言とも思はれ申さず君の親友なりし〇〇君も非常に心配され如何せんものと小生に相談され候間小生も素より貴君とは親友の仲見捨てても置けず候間貴君の耳にさからふやも知れず候へども一寸諫言申上候今後は斯かる人々との交際を全く止め小生及〇〇君のためと思はれ何卒心を入れ替へ被下度候學の道も熱誠を以てし一時一物の習慣をつけてすればなかなか面白く相成るものに候へば今よりは當地に來られ共に勉勵せられんことを偏へに懇願致し候先は乍拙筆一言御諫めまで如此御座候

### 乃木大將

上同

第三學年 加 藤 萬 壽 夫

日露戰爭に於て、殊功を立てたる者を擧ぐれば、先づ、第一に指を乃木大將に屈せざるべからず。其の威名赫赫たる將軍は、大正元年九月十三日夜八時を期して、遂に、其の夫人と共に明治天皇に殉死をとげられたり。

嗚呼、惜むべきかな。將軍、かつて西南戰爭の時、聯隊長となり、其の現す功大なりしが、一度、其の聯隊旗を、賊手に奪はるるや、彌、死を期し、國に報いんと務めたり。

後、彼の惡むべき露國と戦端開かるるや、將軍は、敵の、難攻不落と恃みたる旅順攻圍軍司令長官となりて、大いに、其の腕を振ひたり。二子を失ひたるも、此の時の事なり。しかも、將軍は聊も惜む色無く、却つて、諸兵卒を勞りたり。將軍の意何ぞ偉大なる。

將軍は、又、平素に於ける行も質素にして、且つ、確實なりしなり。先帝陛下の、嘗て、軍人に賜ひし詔勅に御答へ申し奉るべきは將軍なり。實に、將軍は軍人たらん者の理想とすべき精神を有せられしなり。嘗に軍人たるもののみならず、大いに日本人精神の模範を示したるものなり。我等日本人たるものは、勤めて、此の精神を學ばざるべからず。嗚呼、絶代の忠魂、秋の紅葉と燃えて、天に昇れるぞかなしき。

乃木大將上河

第三學年 松原 淨 二

大正元年の九月なりき。我等六千餘萬の同胞は、先帝陛下の崩御に逢ひて、悲哀に沈みたりし時、俄然一悲報は我等が胸を驚動せしめたり。曰く、「乃木大將は殉死せり」と。我等は此の報の夢ならんことを祈れり。されど、其の甲斐はなかりき。嗚呼絶代の偉人は逝きけるなり。過ぎにし明治三十七八年戦役に於て、露國が巨萬の富を抛ちて、固めに固め、難攻不落と誇りし旅順の城を包圍したるは大將なり。天然の要害に加ふるに、文明の利器を以てし、敵を一步も進めじとしたる金城鐵壁も、將軍の勇の爲に、智の爲に、陥落せるなり。二愛子を捧げて君國に盡し、今亦、榮位をすてて、先帝の御後を追ひ奉りし將軍の誠心、亦けだかからずや。

懷郷宿題、一回添削

第三學年 三木 定 治

あゝなつかしき哉、彼の圓滿平和なる仙境に起臥して、夢に自然の妙音を聞きつゝ、常に美神の懷に眠りて、悠悠變化なき拾有餘年の境涯、いかに穩かに、樂しき生活なりしよ、休暇毎に學校の制服制帽にて歸り來る友の美しく、燃ゆるが如き野心の炎抑へ難く、慈愛深き父母の膝下を離れ、山に川に紀念多き、故郷を去りてより茲に三歳、三度思ひ出て多き他郷の秋を迎へたる我感慨やそもいかに、夜毎客窓孤燈の下、懷郷の念浮びて我が胸を去らざるなり、あゝ故郷ほど慕はしきものはなし、げに故郷は人の最も感觸深き處なり、

神聖なる聯想の伴ふ處なり、故郷の、山や川や野や田畑や、是れ皆舊時の歴史なり、一樹一草も是れ一の紀念碑なり。殊に祖先の安らげく眠り玉へる處なり。慈愛深き父母兄弟の生活する處なり。いかなる人と雖ども誰か此の神聖なる樂土を思はざるものあらんや。見よ、昔者豊太閤の小田原の陣より旋るや、先づ銀杏村に入りき、華聖頓の退休するや、依然たるオントウオルノンの一農夫となりき、斯くの如く位人臣を極め譽一世を掩ふの偉人も故郷を思ふの情に於ては共に一なり、开も故郷何故に戀しきか、是れ故郷は實に最初の感觸の剗刻せられたる處にして、而かも記憶と想像とを喚起せしむるの標幟なればなり、其愛郷の念深きは其感觸の最も深きが故なり。人の愛郷の念の存するは、常に慈父母兄弟を慕ふが爲めなるか、朋友のなつかしきか、然り是等の情あるは素より論を待たずと雖ども然も尙之に止まらず、かの鰥寡孤獨よるべなき身も尙愛郷の念禁ずる能はざるは何ぞや、他なし一片の小丘も父祖の骨を埋めたる所と思へば懷しさに堪へざるが故なり、一株の楊樹も幼きとき親友兄弟と共に其下に遊び戯れたりと思へば油然として今昔の念禁ずる能はざるなり。噫愛郷てふ觀念は最も不可思議なる自然的感情ならずや、夫れ一國を愛するの精神は故郷を愛する精神より來る、故郷を懷ふの情無き輕薄者にして安んずる國家を愛する事知らんや、蓋し家を愛するの念と、郷土を愛するの念と、國を愛するの念と其本を一にする者たり、而して雜慮の之に泌入せざるときに於て宛も白雪の皚々たるが如く透明なる水晶の如く八面玲瓏人の感想中最も粹美なるものたり、あゝこの優美高尚なる感情は以て邪を散じ卑を去り吝を破り蕭條たる殺風景も和氣藹々たる樂園たらしむべきなり、越鳥の南枝に巢ひ、胡馬の北風に嘶くもの豈夫れ偶然ならんや。

義士の墓に詣つ

特別  
寄稿

第三學年 富 田 穰

今茲滯京の際一日の閑を得、電車に乗りて芝高輪泉岳寺に賽し、義士の墓に詣て、又其遺物を観る、賽者の來往する者常に肩摩し、華を供する者、香を拈する者、電車の發着毎に續紛絡繹たり。已に墓門に入れば、香煙濛々として斜に燻り、坐に崇敬の感に打たれたり。石階を上れば、淺野内匠頭及び其の夫人瑤泉院の墓あり。共に石柵を廻らし、鐵錠を鎖し出入を出さず。其上側に四十七義士の墓あり。正面なる良雄父子の墓には、特に板屋根を蔽へり、何れも古色蒼然として懐古の好詩料たり。

惟ふに徳川昇平二百餘年、元祿の盛其極に達し、唯奢侈を是れ競ひ、賄賂公行、一片士氣の見るべき無し。是時に當りて義士の此壯舉あり、直に晴天の霹靂にして、大いに世道人心を鼓舞し、士氣を振起し、懦夫をして立たしめ、頑夫をして廉ならしむ。

而して此間義士の苦心慘澹具に痛楚を嘗めたるは、世の普く知る所なり。薩の士喜劍其義に感じ屠腹して、地下に眞雄に謝す。其跡稍々狂に近きも、其義を重ずる眞に古武士に愧ぢざるなり。故に其墓、義士の墓傍にありて、人亦之に賽す、嗟呼、義士百世に膺食して、遺風千古を照すものは何ぞや。唯一片忠誠の氣の然らしむる所に非ずや。東湖先生も其鬱屈するに方りてや、四十七士を生ずと歌へり。此氣實に千古に高く、凜冽として宮嶽の雪よりも清く、芳山の櫻よりも麗なり、神洲の眞髓は實に此に在り。夫れ一吉良爺を斃す、縦令ひ上杉氏の後援あるも、何ぞ此の如き擾々多士を要せんや。良雄の智にして之を慮らざるに非ざるも、意ふに之を斃すは易く、之を斃すに其の方宜しきを得るの難きなり。此れ良雄等の此舉、大いに世に壯とせ

られ、範を後世に貽すものか。而して淺野内匠頭亦此濟々たる多士を養ひ、以つて己の股肱とし、能く一死を捧げて難に殉せしむ、此君にして此臣あり、所謂る人世意氣に感ずるものか。其平常の行爲心事以て大いに見るべき者あるや必せり。世徒に其短慮を咎むるは、其心事の皎々たるを知らざるの見なり。余は深く義士を崇拜すると共に亦深く内匠頭の人と爲りを欽慕す。之を思ひ彼を思ひ、感慨量無く、涙頬邊に滴るを覺えざりしなり。

墓門を出て、寶物館に入り、其遺物並に木像を見る。何れも當時を回顧せしむるの料にして、古色掬すべき物なり。之を熟覽するに及びて、又益々其感を深からしめたり。嗟呼、義士の一舉、後世之を淨瑠璃に演劇に、浪花節等に演じ、聴く者見る者をして歎歎流涕大いに之を喜ばしめ、之を以て生計に資する者、千百を以つて數ふべし。其餘澤の及ぶ所亦大ならずや。周臣三千の一心、能く周祚を開き、四十七義士の一心亦此の如し。

今や日東六千萬の皇民一心以て事に當らば、其銳坤軸をも劈くべきなり。振起せよ、神洲正氣の元氣を。歸りて眞砂山下に之を記せば蚊遣の煙徐々に靡く所、髣髴として墓表の影點々たるが如きを見る。

乃木大將を悼む

一時間即題  
一回添削

第四學年 平 山 茂

世俗滔々として輕薄浮華に流れ、その底止する所を知らず。人道衰へて、士氣地を拂ふ。而して此の濁流の間に處して、清廉剛直、一意君國あるを知つて一身を顧みず、以て一世の師表たるもの實に我が乃木大將な

り。先に 聖天子神去り給ひて、萬民悲傷涙の袂未だ乾かざるに、今又乃木將軍の計に接す。悲しき極みなり。一家を擧げて君國に殉ず。何ぞ壯烈の極みなる。自刃して西南戦役以來の責務を明にす。何ぞ篤實の極みなる。死して戦友に謝し、殉じて君の先驅となり、斃れて國家人道の衰運を復興す。何ぞ至誠至忠の極みなる。誠に楠公死して尙死せず、今や第二の楠公を見る。誰か第三の楠公となるものぞ。明治の聖世、我世界の人傑を求むるもの、先づ指を藤公、乃木將軍に屈せざるべからず。而して今や共にあらず。將星墜ちて、天地くらし。悼まじき極みなり。悲しい哉。

### 日記 拔萃

宿題一  
回添削

第四學年 石 川 長 介

明治四十五年一月一日。天が吾人に與ふる一日は決して無意味でない。偉大の眞理無限の教訓が含まれて居るが、凡人にはとても見つかからない。譬ひへボ眞理でも見つけ次第書く事にしよう。其には今日から始めるが一番だ。思ひ立つたが吉日と云ふが其は意志の強い偉人の事、凡人は印象の深い日が吉日だ。凡人が思立つたが吉日主義を取れば、日と共に決心は鈍る。と云つてそんなら今年は遊んで、來年の元日から勉強しようなどと思ふと鬼が笑ふ。

一月三日。松の内も今日限と、小僧君大喜びて遊ぶ。彼等は年中一所懸命に働くから、今日が嬉しいのだ。毎日遊ぶ僕には今日の有難味はわからない。

一月廿日。敗けたら鐵拳と云ふ條約で某君と角力した所僕が敗けた。反對に一拳加へて逃げる。先生怒つて

石を投げた。身をかはずはすみに、ズデンドーとコートのぬかるみへ轉んだ。イヤ成程天は公平だ。

三月卅日。友人と瀧穴を見物した。雄大玄深なる景は禿筆の能く盡す所に非ず。尙驚くべきは所狭しと落書きせる見物者の姓名なり。己の名を残さん事かくも望まじきにや。歴史といふものあるを知らざるにや。

四月九日。校友田村稔一君逝けり。性温厚にして義の爲に他事を忘れし美談あり。死せる三日前彼は宿題たる寫生をなさんと登山せりと。豈凡人の忍ぶべき所ならんや。而も今は逝けり。

六月十日。電燈やランプは赫々たる光は放つが、熱と來てはカラ駄目ぢや。石炭瓦斯なんか上部は平凡でも熱は大したもの。而も一度マントルを得れば皎として晝を欺く。能ある鷹は爪を秘し、弱い鳥は嘴が大きい。途上嚴めしい紳士に會つたが、其は大道に立つ藥賣であつた。

六月廿八日。越ヶ濱に自轉車を飛ばして痛快を叫んだ。動一動鳥頂天となり、角を廻らんとする一刹那、前方十間に砂塵たて來る怪物あり、行く手の何物をも粉碎せん勢の自動車であつた。下車せんか時間なし。道を避けんか左は岨しき山、右は海岸の崖下正に一丈、死の手は我を捕へんとす。此迄なりと決心の臍を固め、二尺の隙ある右に向ふ間もなく、怪物は愈々迫つた。萬事休す、衝突々と許り、死を覺悟してキット怪物をにらみつけた、人間死を期すれば、かくも沈着たり得るや、自轉車は熟練なる輕業師の乗れるが如く、直立不動にて、怪物との間、只一髪、而も之に觸れずして、九死に一生を得たり。

七月四日。つくづく考へれば、世に不用の物はない。人の不用視する蚊、此も夏出る許りに、人は蚊を追ふ爲に團扇を用ふ。所て涼風肌にしみて夏知らず。人生かく觀じ來れば、不平も煩悶もあつた物ぢやない。

八月廿七日。「腹が空つては戦はならぬ」とは愚人の弱音たるべし。成程戦の如き大活動は出來ざるも、些

細の事に此言を用ゆるは、御門違ならん。生雲よりの歸途食を求めんも家なく、空腹のまゝ、七里を踏破せり。故に曰く「心なくては何も出来ぬ」と。

九月十日。先生「濃硫酸を薄めるには、水を入れてはいけない。水中に硫酸を入れねば危険です」

僕の心「すると水の様な純粹な人が、劇烈な悪友に交ると危険だな、が善者の中へ悪友が入れば感化されるな」

九月十四日。悲壯極る乃木將軍の死、悲觀の極自殺せん奴は、思ひ止りて生きよ。功成りて潔く死せよ。死ぬる決心を活動に用ふれば、成功疑なし。人から惜まるゝ死様せねば、高價な乳で育つた値はないぞ。

十月六日。青い空、青い海、玉と砕くる磯の波、僕の竿へ大魚が食ひついた。閃く銀鱗に満身の神経は集る。千圓やると云つても、逃す氣はない。逃がしてはならぬと云ふ心配があるから、面白いのだ。逃げたつて損はないと呑氣を出せば、到底此の快味は得られない。

十月九日。秋季展覽會出品のべ切は明日、多くの者は今日書くのだ。而も揭示されしは七月三日。今日揭示されても不都合ないが、そんな事されると、時間が短いと大騒、口は中々重寶な物である。

十月十四日。先日の暴風に曲りしポプラは、依然として三十度の角をして居る。五六人て押したが、ピクともせぬ。悪に曲つた心は、少々の事では眞直にならぬ。實際先日位の暴風は、毎日吹くがいつかな元に歸らぬ。だから改心しても、非常な善事をやらねば、社會から認められない。

十月二十八日。何回やつても化學方程式は暗夜の牛だ。所が先輩に教はると一目瞭然。獨學でも出来ぬ事はないが、一寸した急所も中々わからぬ。其所になると先生様だ。然るに「歸つて考へればわかる」なんかと、

碌々耳をかさぬ者がある。白狀すると僕もそうだった。

十一月八日。英雄と鈍雄との差は、社會の風波に對抗すると否とに由る。湯に入らんと素裸體にて飛出せしに、寒風肌をつんざきて、思はずハックシヨなる敗北の聲を發せり。浴後は熱のため寒風反つて氣持よし、即ち知る、英雄の心は鈍雄浴後の心に等しきを。悲觀煩悶交々、到る鈍雄は、須らく浴後の心を忘るべからず。

(終)

### 友の入營を送る文

一時間即題、  
一回添削

第四學年 小 川 義 雄

拜啓、天高く馬肥ゆるの候漸く去り、橋上に霜白き時と相成り候。此の時に當り北越の地に入營せらるる君の、如何に寒冷身に泌み候事ならんと推察いたし候。今や君、成功の一階級たる士官學校入學試験に採用せらる。中學五ヶ年の其の間、朝に夕に勉め勵まれし甲斐こそ表はれて候へ。御兩親様方の御喜び如何ばかりかと芽出度存じ奉り候。

思ふに男子生を日東皇國に享け、日月と普き天恩に浴しながら、只徒らに凡々たる春秋を過し、空しく瓦礫と朽つるは、最も羞づべきの至りにして、國家に對しても不忠の極みと存じ候。

君や今は已に帝國の護りたるべき國家の干城とは成られ、報國の一大端緒を得られ候。國に報ゆるに何れの職か之を選ばん。然れども武士は一度平和破れて國難起るの時には、戰陣の間に奔走し、干戈を振うて軍旗の下に神國を守り、幾千萬の蒼生をして、爲に安きを得しむる一大重任を負ふ者に候。二十世紀の東洋は今

や益々事多く、將來何れの時に、劍戟の光閃き、軍馬荒涼の野に嘶くやも圖り知る可からず、我國家は忠良なる武夫に頼む所、彌々多き時に當り候。君が身を軍籍に投ぜられたるは眞に時を得たる者といふべく候。以後は専心軍事を研め、以て國家有用の軍人たるを期し、益々強め給はん事を願ひ奉り候。生は、將來君の芳名の我陸軍、否國家に歌はるる時の來らん事を、千秋の思ひして待つ者に候。終りに君の健康を祈り、益々國家の爲に盡されん事を、一重に願ひ奉り候。敬具。

### 春と秋と

一時間即題  
一回添削

第四學年 山下 眞一

山鶯溪間より初音を奏づるや、梅一輪を魁として、千山萬野の草木悉く緑青色の衣かづきはじめ、五六旬の後は雲か雪かの櫻花となつて人の心を惹く。この頃は人の心浮きたちて、今日は嵐山に杖を引き、明日は隅田に船を浮べて無爲に日を送るもの少しとせず。然るに炎熱地を蕩かす盛夏の候も瞬く間に過ぎ去り、蜩の亡骸塵溜にひからび、桐一葉庭前に落つるを見て、愕然として右盼左顧せば、緑深かりし野も山も、一面の赤黄色となり吹く風さへも身にしむ秋とはなれるなり。人は家に閉ぢ籠りて燈下に親しみ、或は軒もる月の光にそゞろ哀を催し、人の心一般に陰鬱となる。あゝ何ぞ造物者の巧妙なることや。かの奈翁が眇たるコルシカの一島より立ち、全歐洲を蹂躪し、光榮ある佛の帝冠を戴きし頃は、實に彼奈翁の春なりき、モスコイに志破れ遂に捕虜となりて、セントヘレナに鳴く海鳥に腸を斷ちし失意時代は、實に彼奈翁の秋なりき。あゝ世事百般斯の如くならざるはなし。電氣に陽極あれば陰極あり、物に表あれば裏あり、人生に華やかなる青年時代あればまた孤影悄然たる老年時代なからざるべからず。

勉めよ、勵めよ、三寸の息ある中に。殊に元氣旺盛せる青年時代に。

人生は五十の春、五十の秋を迎ふるも、そは春の綠芽の秋の黄葉に變ずる一瞬に等しきのみ。

### 子を喪へる母に

上同

第四學年 幸月 富士昌

御令息様御事かねて御病氣の由承り居り候處、未だ血氣盛りの御身の、平素も極めて健に御はせしこと故、必ず御平癒の日あるべしと期し居り候ひしに御遠逝の報に接し、意外のことに夢かとはかりたどられ候、古より老少不定の世なりとか、無情の風は時をさらはずなど、か申し居り候へ共、斯病には専門の、しかも名聲高き醫學博士の親しく脈をとられ、人一倍御いつくしみ深かゝりし御許様の數日間一睡も遊ばされず、百方看護につくされしものを、如何に無情の風は時をさらはずとて、誘ひし風の誠にうらめしく存せられ候。

今はかへりて、御生前學術も御優等に、溫良成人の風ありし點は、長く忘れがたき御許様の御歎きの種となりしなど、いよ／＼口惜しきことに存じ候、

嗚呼今にして、思ひ出し候へば、過ぎにし暑中休暇終りの際、汽船會社迄見送られ、互に裏の濱邊にて手をとりに合ひて健康を祈り、汽船に乗りしを、御令息は只一人無言のまゝ、小生の船の沖合遙に消ゆるまで見送られ、小生亦甲板上より、はるかに御令息様の御姿の見えずなるまで、互に見送り見かへつて、名残りをを

しみしも、今となりては、あれが此の世の別れにて候ひき、思へば、一層悲しさまし候、尙又過ぐる日には御手紙被下候て、休暇も近くなりし故、今度は二人にて旅行せんなど、種々のこと認められ、小生歸郷の日を一日千秋の思ひして待ち、居る旨のべられしに、未だ小生歸らざるの日に、かなしくも、黄泉の客となられ、はかなくも、御手紙は思ひ出の種となり、御手紙ひろげて、御地の空を望み候へば、涙はとめどもなく、兩の頬をつたはり候、嗚呼此の後は、何の樂ありてか歸郷仕るべき。然れども、最早今となりては何とも詮方これなく候へば、定まる天命とあきらめらるべく候。

日頃より人一倍御孝心深かりしことに候へば、御許様のおなげき、さこそと察し上げ候へ共、それが爲却つて數日の看護に衰弱遊されし御身の御健康を害せられ候うては、不幸の上に又不幸を重ねること、存じ候間、只此の上は是非なきこと、御あきらめ遊され、佛事供養等の御いとなみせめてもの御心なぐさに遊され候様祈り上げ候、これが何よりのおんいつくしみと存じ候。

御くやみ傍參上致す筈に御座候へ共、何分海山隔てゝのことに候間、御無禮には候へ共御無沙汰仕り、休暇には早々御墓參仕るべく候、

次に別封誠に輕少なるものに候へ共、志ばかりの香華料として御靈前にそなへ度候へば、御納め被下度候。尙々御地は寒氣殊にはげしく候間、折角御自愛遊され候様一重に祈り上げ候。草々頓首。

子を喪へる母に

上同

第四學年 堀 勘 市

秋風が身にしむ今日三郎様の御逝去と承り、感慨無量何とも御ものの申し様も無之候。皆々様さぞ御愁傷の御事とお察し申し上げ候。嗚呼此春まで、机を並べて螢の光窓の雪、共に勵みしは夢か現か、取る筆にも心添はぬ思致し候。先日戴き申し候御玉章、噫、あれが最後の三郎様と佛壇にかざり、線香をくゆらし申し候。噫、親愛なる三郎様の御母君様よ、健かなる父母健かなる兄弟のある私は、始めて人生の悲哀の極なる死の如何なるものかを味ひ申し候。されど、死は天命にて、人力を以て如何とも爲す能はざるものに候。三郎様の短き人生は樂しき未來の世界に永く永く御座すと御あきらめなさる様祈り申し候。御胸に溢る、悲みは御察し申し候へど、若し御心勞のため御病氣ともあれば三郎様は如何に草葉の蔭に歎かるゝことに候はむ。先づは取敢へず御悔み申し上げ候。かへすゝも御諦めなさること肝要と存じ奉り候。

時間の價值

上同

第五學年 村 田 芳 彦

「時は金なり」とは、よく人の口にする所なるが、眞に然り。一分時の遅速も、時に大局に關係することあり。一日の内睡眠休憩の時間を差引く時は、勤勉すべき時間は實に僅少なり。然れども、これを善く利用する時は、學を進め業を修むることを得べし。人生僅か五十年、龍となり、豕となる所以のものは、時間の價值を

知ると、知らざることによること疑なし。されば、時の貴重なることは、金以上なり。金銭もこれを節約すれば、其額・莫大となる如く、時に於ても同じ。吾人は、須く先づ、無用の雑談、無用の娛樂、無用の心配等を廢し、以て時間の經濟を計り、之を利用するに敏活を以てすべし。然る時は、吾人の本分とする處を遂行するに於て、綽々として餘裕あるべきなり。

人間の通弊として、安逸を貪り、遂に、人生の失敗者となれるもの、生活を見よ。放蕩息子精神の如く、散漫として、締め括りなし。苟も、一かどの人物とならむと欲するものは、須く、この點に着目せざるべからず。佐藤一齋曰く、「前乎、我者、千古萬古、後乎、我者、千世萬世、假令、我保壽百年、亦一呼吸間耳。今幸生爲人、庶幾成爲人、而終斯已矣」と、男子、この意氣なかるべからず。徒らに、人生の短さを知つて、これを利用することを知らざるは不可なり。

## 修學旅行日記中の一節

宿題、一回添削

## 萬田の炭坑

第五學年 竹 内 久 治

五月二十四日曇

三池築港の、完全と宏大とに驚きし我等は、貨物列車に便乗して、萬田の炭坑に向へり。三池式ローダー、及び、瓦斯會社等を右に眺め、友と其の工事の偉大なるを見ては、三井氏の富裕に驚き、其の設備の完全なるを思うては、學問の進歩を語りつゝ行く程に、いつしか炭坑に着きぬ。見上ぐるばかりの大煙突は、さな

がら林の如く立ち並び、黒煙濛々として、空にみなぎり、天日も之が爲に暗し。やがて、先輩林新作氏、及び、林俊香氏等に導かれ、發電所に到りぬ。直徑丈餘の大車輪、此所彼所に回轉し、殷々、轟々、百雷の一時に落つるが如く、魂飛び、肉躍らんとす。學士は、懇々と、諸機械に就き説明せられしも、電氣學の素養なき我等には、十分に其の理を了解すること能はず、實に遺憾の極みなりき。次に、排水機石炭撰擇機等を觀て、何れも其の偉大なると、巧妙なるとに、暫し、呆然たりき。かくて、休憩所にいこひて、各其の感想を語り合ひつゝ、中食をしけるに、先輩諸氏の斡旋に依り、教師及生徒數名に限り、入坑を許すべしとの事なれば、我等の喜び譬ふるに物なし。やがて、余は、先生の差し出されし籤をとりけるに、思はざりき、其の選に當らんとは。余は、手の舞ひ、足の踏む所を知らず。乃ち降底規定幅をかぶり、手に安全燈を携へて、事務員二名に導かれ、昇降機に乗り、側の棒を握りて待つ程に、驚くばかりの音響と共に、下り始めぬ。上に響きし物音も、人語も、漸くに遠かり、唯、開ゆるものは、昇降機の寂寞を破つて下る音のみ。次第に急劇に降れば、奈落の底に沈むが如く感ぜられて、心地いと惡し。稍々、呼吸に苦しみを感じ、耳に壓迫を覺ゆ。暫くして、昇降機は坑底に達しぬ。急ぎて機を下り、案内者に從ひて行くに、坑中恰も隧道の如く、其の清潔と、其の工事の容易ならざる事に、驚かざるを得ざりき。暫く行くに、電燈燦然として輝き、車輪轟々として響くところに到りぬ。もとより、我等は、坑底にかゝる機械の運轉する事は、思ひも寄らざりければ、其の驚き一方ならず、呆然として互に顔を見合せたり。聞く、此の機械は、上の排水器と相共力して坑中の水を排除する爲に、設けたるものなりと。こゝには、男女數多居りて、盛に巨釜に石炭を投じつゝあり。熱氣強く、汗淋漓として垂る、苦しき事云はん方なし、坑夫の平然として職務に従事せるを見れば、其の鍛

鍊のほど、驚くばかりなり。やがて、其の所を去り、暫く足を運べるに、軌道は縦横に走りて、石炭を満載せる電車は、自然に往來せり。尙進むに、坑中寂として聲なく、恰も暗夜の如し。安全燈を照しつゝ行く。このところは、殆ど、石炭層中に、隧道を穿ちたるが如く、四壁皆石炭なり。此の坑は約三四哩續くべしと、其の偉大なる工事、實に鬼泣き、神哭するばかりなり。嗚呼、工業は、實に國家發展の最要素と云ふべし。英獨の發展、實に偶然ならざるなり。余は、工業の必要なる事を今更の如く感じ、他日工事家たらん念、混々として胸裏に湧出す。暫くして、前に來りし道を逆戻りして、昇降口に到れば、昇降機は、我等の歸るを遅しと待ち居たれば、一同急ぎ打ち乗り、喜び勇んで昇れり、時に午後一時過ぎなりき。直ちに列を整へ、厚く禮を述べて、炭坑を辭し去る。私立工業學校、瓦斯會社等を左に見て、共に坑内の状況を語り、三井氏の大事業家たるを景慕し、我等の多大の新知識を得たる事を喜びつゝ、急ぐ程に、いつしか大牟田の宿に歸れり。

艱難汝を玉にす 上同

第五學年 椿 武 忠

ケプレルが、天體運行に關する重要な法則を發見せしや、世人は、以て、異教を唱ふる者と爲し、其著を擧げて、一片の煙と化し、其身を國外に放逐せり。然るに、彼の堅忍なる、數年間、貧困缺乏を敵としつゝ、泰然として、研究の歩武を進め、遂に、一大星學者として、芳名を擧げ、吾人の腦裡より消ゆる能はざる人と爲りき。

亞米利加南北戦争の間、大統領として、立ちて、大に、其手腕を揮ひ、遂に、百萬の奴隷に解放の慈雨を注ぎし偉人は、見る影も無き茅屋に生れ、師にも就かず、書をも手にせず、たゞ貧苦の搖籃に眠りし一少年なりき。

生物進化論を以て、一世を風靡せしダーウインは、一生涯、一日たりとも健康なる日を知らざりき。然れども、彼の不屈なる精神は、強健なる體格の人も、逡巡すべき大業を、よく完成するを得しにあらずや。

水天一髪、陸の影だに見えず。來し方を顧れば、白雲漠々たるのみ。風浪と戦つて、身は綿の如きを、水手は船を回さん事を迫り、海中に投ぜんことを以て威嚇頻なり。天空には、明日の運命を豫告する如く、諸星の瞬く未明、一點の燈火は、眼に映じたり。幾十日の困苦辛酸を経て、遂に、コロンブスは新大陸を發見せり。

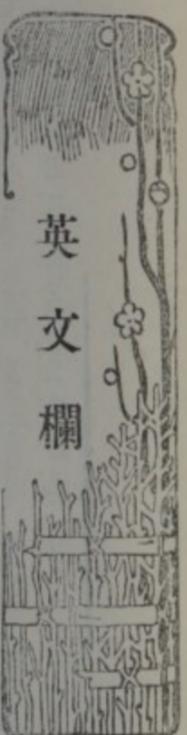
あゝ、歴史は一大大學なり。艱難辛苦の激浪と戦つて、名を成したる偉人は、其の講堂に列坐せるにあらずや。吾人は此等の人々の如く、天の降す試金石、即、艱難に打勝つ爲に、不撓の精神を抱いて突進す可きなり。運命の海洋の彼岸には、艱苦を知らず、鐵石心無かりし彼の死骸山積せり。これ茅屋に生れ、虚弱の身を有し、たゞ堅忍のみありし人の、上陸して桂を手折るを眼前に見つゝ、過去の遊惰、及、薄弱なる意志の結果として、中途に溺死せる者なり。孟子曰く、「天の將に大任を斯人に降さんとするや、必、先づ、其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其體膚を餓えしめ、其身を空乏にし、行、其爲す所を拂亂す」と。至言と言ふべし。されば艱難は人を玉にする事を思ひて、苦患に逡巡する勿れ。不拔の氣を以て、進んで艱苦を征服せよ。

故乃木將軍の小照に題す

一時間即題  
一回添削

第五學年 増 野 雅 治

日露の役に於て、第三軍の司令官となり、旅順を包圍攻撃して、これを降し、武勳一世に高く、三尺の童子といへども、よく其の名を知るは、將軍なり。將軍は實に生ける神なりき。其の人格の偉大なる、古來、殆ど、其の比を見ず。天下滔々として、相率ゐて、名利に趨るの時、獨、一身を君國に捧げ、遂に 先帝の御後を慕ひまつりて、天國に赴きしが如き、至誠にあらずして、安んぞ、よく、此の如くなるを得んや。其の情に厚きや、よく、其の部下を愛撫するは勿論、貧民を視ること、我子も、嘗ならざるものありきと云ふ。されども、大義の爲には、私情をなげうちしは、二子を日露の役に失ひて、猶ほ、恬然たりしに徴しても明なり。其の身を持つること、常に、嚴正にして、質實飾らざりしが如きは、何人も、大に、學ぶべき美德ならずや。嗚呼、將軍の影は、眼前に立てども、今や、其の人なし。哀しきかな。乃木の花は、既に散りしも、其の香は、萬世に残りて、後生を感化せん。余、今、此の小照に對し、感慨措く能はず。聊、一言を題す。



英文欄

THE BATTLE OF KOAN.

4th year I. Shimose.

Whenever we read the history of our Empire, we are struck with admiration at the royalty and bravery of our ancestors. Because of them Japan has never be beaten by any other country.

But nothing was more alarming than when the Mongols attacked Japan. At any rate, I do not know how Kublai Khan, the king of Mongol, came to do such a thing. He had conquered Europe then, and his glorious name was spread far and wide. It was no wonder that there seemed to be nothing in Japan which was so very small in his eyes. And so he sent messengers to our country with a view of overawing Japan. How they were to be dealt with was, indeed, a serious affair.

From ancient times, the Japanese have been a brave people. Did Tokimune Hōjō, Shikken at that time, give up? I should say rather, he, worthy of being a Japanese, killed them at Tatsunokuchi. At this, Kublai Khan got very angry, and determined to annex Japan at one charge. Indeed his army numbered one hundred thousand, and with great warships which covered the sea, made an attack directly upon

Hakata via Iki and Tsushima. On hearing this news, there was no soul in Japan but was prepared for the worst.

It took place in May, the 4th year of Koan. The enemy's ships were so large that it was impossible to get on board them. But our brave daring Samurai, who considered it their primal duty to go through fire and water for their lord's sake, boarding small ships, caring no more for the showers of the Mongols' arrows which were shot from Ishibiyu, than if they had been showers of Mongol rain, charged into the enemy and climbed up the enemy's ships, throwing down their own masts over the ships, and fought hard.

We can hardly describe what a hard and furious charge the Japanese must have made! But there was no knowing when it would be over. Kaneyama Jōkō was afraid of the future of our country, and prayed to the Iwashimizu-Hachiman-gū to make the Mongol surrender. The pray soon took effect. Suddenly, in July, arose a terrible hurricane in Chikushi. Taking advantage of the violent storm, our enemy made fierce attacks upon the Mongol invaders, so that they were literally annihilated: only three out the whole 100,000 barely escaped with their lives.

The valiant scheme of Kublai Khan proved but a vain bubble. Heaven forbid that we ever forget the 4th year of Koan!

### MY FIRST TRIP.

4th year Y. Takeshige.

It was on the 5th of August in the 42nd year of Meiji that I left here to travel availing myself of the summer vacation. The next morning, while gentlemen, merchants and soldiers looked busy, I, rustic, waited for the 9:20 A. M. train for Onoda and delighted to get on the train at the Ogōri Station. After getting a ticket, I got on the train, which started from there, pouring out black smoke furiously from its chimney. Strange to relate, telegraph poles ran at full speed, farmers went speedily by, while fields and mountains walked. The sight in front of my eyes was varied constantly as if by a kine-scope. It was not long before the train arrived at Onoda, crossing several bridges and passing many strange sights.

Because it was very warm, I swam in the sea, though it was muddy yet very calm. The waves are kept back by a large high dyke.

I inspected the gloomy Cement Company and the sulphuric Company's brick-buildings. To my great alarm, I found that I had no purse when I felt for it in my bosom to buy some picture post-cards. It contained a little money, only property I had. Now I changed my color and sought for it for a few hours, but in vain. But what pleased me was that I met on my way to the station a kind old man with the very purse of mine.

In the evening I arrived at the Chōfu Station by train. It was so dark that there was nothing to be seen. This being my first trip there, I not only lost my way, but could not walk owing to the fatigue of travelling, and there was no one to tell which way I should take. But not having enough money to take a

jinrikisha from there, I was obliged to go on foot along the Road, shaded by rows of tall pine-trees. When I found the long-wished-for light, my face was radiant with pleasure. After I finished supper about 11 o'clock at my rettion's, I retired to a warm bed. What do you think was the dream I dreamt, who was a wee bit of a lad and traveled for the first time in his life.

You know, Chōfu is noted for its natural beauties; pine trees growing on the sandy seashore; waves dashing upon the rocks, plovers flying in the cloudless sky, sailing vessels navigating on the blue sea, on which I floated a boat sailing here and there every day.

Thus a few days were passed joyfully. Don't laugh at this rustic, I wondered at the large number of ships lying at anchor in the port, as well as countless houses, some of which were built in foreign style, at Shimomoseki. When I got on board a ship for Hagi, I was reluctant to take leave of it, but I felt joyful to see the native sky again.

---

### CICADA.

5th year J. Ueoka.

Taking a walk in the garden, you will see a large insect humming on yonder tree. That is a cicada. As they say, no bird, no other insect is so noisy as the cicada.

I have always thought it strange that while birds or other insects excite our sentiments by their merry tunes, only the cicada is a noisy singer hated by men. But this idea disappeared with a saunter which I took this summer and that is why I will tell you about.

I was unsatisfied with the manner in which I had spent the vacation, so when I returned home from my uncle's, to come back to school again, I took a walk to a hill in the neighbourhood, taking advantage of the few days that I had till that time the opening of the school.

Early in the morning, I started along with stick in hand. The sun was not yet up, the mist hung over the green fields and all the trees around. How delightedly I looked upon the dew lying on the leaves and grass! How pleasantly I felt, when I wet my feet in the dew! When I reached the mountain the sun was shining with all his might, so that I was compelled to take a rest in a small temple.

At sunset when the cool evening breeze began to blow, I started to ramble about under the shadow of the trees. Then I heard the cicada chirping in the solitude; I saw through the leafy trees the setting sun, and a giant peak rising above the clouds, bidding "Good night" to the sun.

How radiant the color was on the edge of the clouds! This lovely scene struck me in a moment. The chirping of the cicada seemed to me entirely different from that which I had always heard. I felt as if I were hearing music in a green and beautiful palace.

The cicada seemed to me to say "Do not mourn for us nor our busy life, we have our share of good." While I was lying on the grass, I heard it shout two fold, from hill to hill, and seemed to pass, at once, far off and near.

If we had peace in our mind, we would see that everything in the world is a sign of the beauties of nature. It is because of our own minds, that the merry songs of the birds and insects seem and to us. These were my convictions in the spacious leafy temple.

The shade of evening came slowly down, the woods were wrapped in deeper brown, I was on my way

home presently. When I came back home, and entered my bedroom, the beautiful scene still followed me, and in the night it presented itself in my dreams.

### GENERAL NOGI.

5th year H. Shiraishi.

I solemnly affirm that our readers have not forgotten the Russo-Japanese war which broke out in the spring of 1904; especially; the battle of Port Arthur.

On the afternoon of the 1st of January, 1905, Port Arthur, the most impregnable of all the first-class fortresses in the world, fell at last, because of General Nogi whose fidelity burned like fire and with a will which knows no defeat. Let our Marshal Nogi waver at the fortress, the war might stand on the brink of ruin; indeed it was on the verge of utter defeat.

But the doom of the Russian Army might be said to be sealed by that mighty will.

Our General Nogi, wiping away his tears, threw the sacrifice of lives on the altar. "Die for the country." was his watchword. And his soldiers welcomed the order of death and fought with swords, with daggers to the death, and then this attack upon the enemy turned them into "Bikudan." Such a murderous and incessant battle can not be found in the history of the world.

All military officers in the world admired the dauntless bearing of the General and also were surprised at the boldness of Japanese soldiers. Exploits of the General are so high, but nevertheless he was ashamed of his own conduct that he had lost the lives of so many of his soldiers; and said, "I can not meet the

fathers and brothers of my lost soldiers. I have killed many."

Thus General Nogi, called a dauntless officer, had such a depth of mercy in the bottom of his heart.

### OUR JOURNEY TO KYUSHU.

5th year M. Akagawa.

On the night of 22nd of April, though rainy, our party consisting of nearly sixty students and teachers, started on board the ship called "Shinsho" for Shimonoseki. I enjoyed myself very much, because it was my first journey on the sea, although the wind blew hard and the waves were very high. I had been often told about the light-house at Tsumoshima, but to my disappointment, our ship lost its course on account of a dense fog. Nothing could be seen but water. Before daybreak our ship drifted at the mercy of the waves. However, sailing twelve hours after we had left Hagi, we found ourselves at Shimonoseki, whence across the straits of the same name, landed at Moji. Then we took a train for Omuta, which is situated in the Province of Chikugo. It is not a large city, but is noted for its coal mines, We passed many famous cities in the boundless plain of the Chikugo River, seeing very beautiful landscapes on every side. At seven in the evening we reached our destination, where we put up for the night.

Next morning we inspected the Omuta Harbour-constructions which are said to have cost almost five millions yen, and which were completed a few years ago. As soon as we had viewed these, we were led to the great mine, named "Manda," and some other places. The mechanisms are so wonderful that they beggar description. There are other coal mines, and places worth visiting, but as we had to reach Fukuoka

before dark, it was impossible to visit all of them. At four we reached the Futsukaichi station where we worshipped the Dazaiji Tenmanga near where Sugawara Michizane spent his last days with sorrow and lamentation. On our return we were carried by a train. Again getting into the car we came to Fukuoka before sunset as we had expected. You know that it is an important city not only from the political, but also from the commercial point of view. Many public buildings,—the Prefectural Office, the 24th Regiment, the Kyushu Imperial University are situated here. We can find two parks; and the electric cars are running through the street very noisily. I had never seen them until I came to Fukuoka. In the east park there are two bronze statues, one is of Mikado Kameyama, and the other is of the well-known clergyman named Nichiren who is the founder of Nichiren Sect in the Kamakura period. Whenever I saw them, they reminded me of the time when the Mongolians attacked the coast of Hakata.

At eleven on the twenty-fifth, we departed for Yamaguchi by train. Between these places I have no experience to recount. But on the way I saw that well-known iron-foundery at Yawata on the left hand through the window of the car. The plan is on a very grand scale, as you know, numberless chimneys are towering high and magnificently, therefore the smoke is rising up to the sky from morning till night. At last one is led to think it is cloudy even though very fine.

About midnight, finally we arrived at Yamaguchi and soon put up at an inn. Next day we came back on foot, and were welcomed by many friends.

In short, this journey was a toilsome one, but on the other hand, it was instructive.

## BE INDEPENDENT AND FREE.

5th year M. Kawasaki

Everyone is a free moral being, and he has both a free mind and faculty which can see right and wrong. Then, if we do our duty and observe what we must do, then we will never be ashamed of ourselves though we are poor or unlettered. The king, or the God even, cannot restrain our freedom, for a man who does not a bad deed would not be punished by the All Mighty One, Whocannot accomplish oppression of the just. Hence, let us do everything that is right. If we do the right, we will never be afraid in front of God, still less among our companions. A real man, no matter how healthy, distinguished, and wise he is, one who does the right. Wealth without justice is like the cloud, poverty with justice is like the great stone, and we don't know which is the more powerful in the world of freedom and independence.

Then since we must be independent, be independent in the way of right. Let us walk freely—walk freely in the road of the right. This is the reason of being a man, of having glory. Don't become a man like a dog or a who has no definite ideas and who tries to do utter obedience,—be it right or wrong—for his master. Such a man does not dislike the right, but likes what he can enjoy and he is worthless. He is not a man who does not like to see the honour of the man, but he hates the labour. He wishes to succeed by chance. Leave out such a poor and base idea out of the mind of the crowning summit of all creation—man.

Then my loved and respected students,—I desire you to stand in the place of the right and the freedom, and not to be deprived of your honorable privilege, and never steal other's. And never permit

yourself to be treated as a cow, a pig, or a dog, and also never conduct yourself in such a base way to be treated like them, for it is neither the open way nor the way which is guided to the gate of success. Some one said "I am I, not a bit more or less." The secret of success is that fight out with such an idea. Whoever has no such mind will die stony; so every one must make his own lot, and do, himself, whatever good he wants to do.

Do you know a parasite? It cannot live independently. You would not become such a worm. Why don't you know your price? You are surprised to hear Aristotle's and Cant's deep thoughts and particular ideas, but have you not a distinct mind? That also develops your thoughts. You are quailed before Alexander the Great and Napoleon, but they are not men out of the line. If you only be surprised at the foot to see the high mountain, hardly can you climb a foot before your courage will be lacking, and even half mile you cannot ascend. Make your lot yourselves. A scholar, a wise man, a minister, or a king is a man, and you are also one of men. Be an independent and free man. The world waits for such a man.

---

### GENERAL NOGI.

5th year K. Katori.

One more name was newly scored in the hero's biography of the world on the 13th of August this year. Of course, as you know, he is General Nogi who killed himself on the death of his late Emperor.

His suicide shows the grand power of virtue on the world. His faithful spirit throughout his life for his Emperor makes this fact apparent that he didn't kill himself thoughtlessly but it was influenced by his

late Emperor's death.

His death was so severe and respectable that, however, the material powers may serge upon the world, they can not help but comprehend that the mental power is far higher than the material. Truly, his sword poured his blood on our heads with much greater influence than a thousand words of instruction.

The Japanese, who showed themselves, of late, to have an inclination of versatility or unkindness found for themselves exactly what their duty is, just as we stand astonished when the lightning strikes.

When his death was announced, the foreigners must have been more taken by surprise than at the crumbling down of Port Arthur.

Especially is this true of the foreigners who attended the late Emperor's solemn funeral, and seeing the condition of our strange earnestness, and again this matchless violent conduct they would know that in the Japanese minds there are the fearful mental dynamites which effect great change by touching them.

Then his one sword gave us not only great influence on virtue but also it showed us a greater authority than the making of the "dread naughts" or the "increasing of divisions."

One's suicide never before surprised the world as this and the authority of one sword never made them fear as this one. So they are stupid fellows who rebuke his death, because it shows the greatest authority of all others.

His little body of five feet long covers the whole world and its praise will be sung forever. Ah! what a great man he was!

講壇

拜禁闕詩略解

特別會員 金子乙助

此の詩は、松陰先生が、魯艦に乗じて、海外に航する策を索めんとて、嘉永六年九月十八日、江戸を出發して、西の方、長崎に趨かる、途次、十月一日、京都に入り、皇城を伏し拜みて、感慨の餘、賦せられたるものにして、先生の詩中、尤も、有名の作なり。全篇忠憤の氣に充ち、殊に、上林の一句は、悲壯慷慨、人をして、うたた、凄然たらしむ。諸子、宜しく、誦讀吟詠して、先生が、如何に、尊王心に篤かりしを知るべし。尙、詩の解釋に入るに先立ち、當時に於ける先生の境遇、及、時勢の趨く所を概説して、參考に資すべきはずなれども、そは、既に、諸子の熟知する所なるべければ、これを省くこととせり。

癸丑十月朔拜鳳闕肅然作之。時余將西走入海。

山河襟帶自然城。  
野人悲泣不能行。  
聞說今皇聖明德。  
祈掃妖氛致太平。  
從來英皇不世出。

形勝依然舊神京。  
上林黃落秋寂寞。  
敬天愛民發至誠。  
安得天詔勅六師。  
悠悠失機今公卿。

今朝盟嗽拜鳳闕。  
空有山河無變更。  
鷄鳴乃起親齋戒。  
直使皇威被八紘。  
人生如萍無定在。

何日重拜天日明。

(注解) 癸丑。嘉永六年に當る。○肅然。つつしむ貌。○入海。海外に出づること。○山河襟帶。山や河に四方を取り圍まれ、自ら、要害を爲すにいふ語。○形勝。地勢、又は、風景の勝れて居る土地。○依然。もとのままの意。○盟嗽。盟音クワン、手洗ふなり。嗽音シウ、口すすぐなり。○鳳闕。皇城。○野人。田舎者。すべて禮を知らざるもの。こは、先生、自ら稱して、野人といはれたるなり。○上林。御所の御庭。○黃落。草木の葉の、黄色に變じて、枯れ落つると、○寂寞。ものさびしきこと。○聞說。「キクナラク」と訓む。聞くには。○今皇。こは、孝明天皇を申す。○聖明德。天皇の御徳。○至誠。極めて眞實なること。眞心。○鷄鳴。昔の丑の時(八ツ時)の異名。今の午前二時。夜あけ。○齋戒。飲食舉動を慎み、汚にふるるを忌むと。ものいみ。○妖氛。妖音エウ、氣音フン、あしき氣。わざはひ。こは、洋夷の禍を指す。○六師。天皇の統御し給ふ軍隊。皇軍。○八紘。紘音クワウ、八方。○不世出。世に稀なること。○悠悠。ゆつくりとしたさま。○萍。音ヘイ、浮草。

(通解) [第一句] 平女京の地たる、いはゆる、山河襟帶であつて、要害堅固、天然の城壘を成し、地勢の勝れて居ることは、今も昔のまゝであつて、實に、桓武天皇奠都後、一千有餘年來の、いとも貴き帝都である。

[第三句] さて、吾は、此の度、深く、時勢に感ずる所があつて、ひそかに、魯國の軍艦に乗じ、海外に出づる策を、もとめようと思つて、西の方、長崎に趨く途次、今朝、ここを過るに際し、手や口を清め、敬んで、皇城を伏し拜んで、お暇乞を申し上げたのであるが、此の時、吾か胸中には、無量の感慨湧き出て、

悲哀の情、切に起り、はふり落つる涙は、止むるに由なく、そこらあたりを立ちもとほつて、暫し、立ち去ることが出来なかつたのである。

〔第五句〕見まはせば、折しも、晩秋の事として、こがらしは、遠慮なく、御所の御庭にまで吹荒み、木の葉は、枯れ落ち、梢は、あらはになつて、いとも哀な、物さびしい光景を呈して居る。嗚呼、かかる光景を見るにつけても、思ひ出でらるるは、皇室の御上である。回顧すれば、其の昔、武門、政權をぬすみしより、世は、幾度か變遷して、星霜、茲に、六百年、皇威は、衰へさせ給うて、今や、昔の御光を仰ぐことは出来ぬ。まことに、秋風寂寞の感じがして、畏多いといふもおろかである。然るに、山河だけは、皇威の、かく、衰へさせ給ふにも、拘はらず、つれなくも、形勝依然として、空しく、昔ながらの有様を存して居るが、これ、はた、却つて、なげきの種である。

〔自第七句〕この頃、密に、洩れ承る所によれば、今上天皇陛下には、天資、御聰明に渡らせられ、御聖徳の有り難きことは、ただただ、感泣し奉るの外なく、上、神明をうやまひ、下、人民をめぐみ給ふこと、何れも、真心より起らせられ、殊に、夷狄を憤らせ給ふこと甚しく、米艦、浦賀に渡來以來、かしこくも、毎朝、早く、御起床あそばせられ、親しく、御ものいみありて、敵國懾伏、天下安穩を、御祈願あらせらるると申すことで、誠に、恐懼のいたりである。

〔第十一句〕されば、臣民たるものは、苟も、ゆつくりして、生をぬすむべき時でない。宜しく、國家の爲に、全力を盡して、一日も早く、大御心を安め奉るべきことを謀らねばならぬ。どうか、速に、攘夷の詔を得て、あまねく、之を皇軍に傳へ、君臣一體となり、舉國一致して、外敵を討ちこらし、君の御稜威を、八方に輝したいものである。

〔第十三句〕われ、つくづく、これまでの歴史を按ずるに、英邁なる君主は、世に稀であつて、いつの世にも、常に出でらるべきものではない。然るに、われ等は、何の幸ぞ。今や、かかる聖明の天皇を奉戴して居るのであるから、實に、千載の一遇ともいふべき時で、洋夷を攘つて、國威を發揚するには、この上もない好機會である。然るに、今の公卿方は、どうであるか。十分に、補弼の任を盡され、國家の爲に、努力せらるべきはずであるのに、却つて、ゆつくりとして、みすみす、この好機會を、失ひつつあるもののみで、一人として、已、立つて、時局を救はうとする誠意のあるものはないのである。慨きても、尙、餘あることではないか。

〔第十五句〕一體、人の一生といふものは、しかく、安閑として、生をぬすんで居るべきものではない。例へば、丁度、浮草の、水のまにまにただよつて、居所を定めないうやうなもので、東奔・西走・南船・北馬大に、國家の爲に活動し、斃れて已むの精神でなければならぬ。そこで、われは今や、一身の安危を顧るにいとまなく、國家の爲に、この非常の事を、くはだてて居るのである。しかし、事、志と違ふのは、世の常であるから、その成否の程は、もとより、あらかじめ知ることは出来ぬ。して見れば、又、何れの日、ふたたび、ここを過つて、重ねて、皇城を拜むことが出来るであらうか。まことに、覺束ない次第である。或は、これが、皇城の拜み收めかも知れぬ。嗚呼、これを思へば、實に、名殘の惜まるることであるわいの意なり。

さて、此の詩は、初の二句に於きて、平安京の、昔も今もかはらぬ形勝の地たることを述べ、次の二句に

て、皇城を拜したるときの状態を説き、第五句第六句にて、上林の寂寞たる秋景と、山河の變更なき有様とを對照して、皇室の式微を慨く所、意味言外にありて、感いと深く、第七句より第十句に至るまでは、孝明天皇の聖徳をたたへまつりて、洋夷を憤らせ給ふことを云ひ、第十一第十二の兩句に於きて、洋夷を攘つて、國威を發揚すべき希望を叙べ、第十三句第十四句に於きて、君ありて臣なきことをなげき、最後の二句にて、己の身上に落着して局を結べり。

右は、校長の命により、一わたり、解釋を試みたるつもりなれども、余の謝劣なる、十分に、詩意のある所を、發揮すること能はざるは、深く、慙づる所なり。

因に云ふ。ここに掲げたる詩は、先生が、最後の改作に係るものなり。而して、その原詩を尋ねるに、松陰詩集に載する所と、長崎紀行に載する所とは、互に、多少の異同あり。即ち、松陰詩集には、第二句を、東來日々憶神京に、第五句の秋寂寥を、秋蕭瑟に、第八句の愛民を、憐民に、第十句の祈禱を、祈穰に、第十二句の直使を、坐使に作れり。又、長崎紀行には、第二句を、東來無日不憶帝京に、第五句を、鳳闕寂寥今非古に作り、其の他、愛を憐に、直を坐に作ることは、松陰詩集所載のものと同じ。然るに、今一つ、先生自筆の刷物あり。(この刷物は、その原本、今、御物となり居る由なり。こは、山縣公の家寶たりしを、往年、公より、畏きあたりへ、獻納せられしものとか。)これには、第二句を、東來無不日憶神京に、第五句を、上林零落非復昔に作れり。其の他、愛を憐に、直に坐に作るなどとは、前二者とかはりなけれど、第十一句より第十四句までを、從來英皇不世出。悠悠失機今公卿。安得天詔勅六師。坐使皇威被八紘に作りて、句の入替り居るを異なりとす。記して參考に供す。

### 選書展覽會の書に就きて

特別會員 安藤 紀 一

余は、校友會の書道部長として、生徒諸君に、本部選書展覽會の事を言ふべし。此會に陳列する書は、各自提出の全部に就きて、數名の審査員の選出したるものにて、これが、書としての普通並以上のものと見認め、選に外れたるは、皆な或る非難ありて、展覽に値せざるものと認めたるなり。さて、今年の開會に於ける陳列品は二百廿二、選に外れたるは二百四十品なり。陳列品のみ見るときは、書道年年に發達したる様なれど、他の二百四十品の事を思へば、一般の書道猶幼稚と謂ふべし。本部は、世の嘆稱を博する程の巧手を諸君中より得んの望よりも、普通並にて見苦しき點なき書き手を多く得むとの望が、甚だ急切なり、故に、一たび選に外るゝ人の奮勵の結果、年を逐うて、次第に多く選に上るに至らむ事こそ、實に本來の望、即ち書道獎勵の本旨なれば、陳列品中に有望の一科を設け、縱令授賞までには値せずとも今一層奮勵せば更に上達すべき見込あるものを、此科に列して、其人の向上を望祈せり。故に是等の人々、一旦陳列の榮を得たるからは、復た選に外るゝ失敗は取らじの覺悟あらば、外るゝもの年年減少すべし。然るに實際は之に反して、前年上選のもの後年は外るゝあり。龍門の鯉一度瀧昇りして、再とは時昇らぬに齊しき、こは實に輕々看過すべからざる事なり。余は、以上の事情より、聊感ずる所あり、こゝに諸君の書に往々見る所の失點を列記して、これが矯正の手段を取らむことを勸奨せんとす。所謂失點とは、

- (一) 文字拙劣なること
- (二) 文字に誤あること
- (三) 語句に誤あること
- (四) 語意統一なきこと
- (五) 語意穩健ならぬこと
- (六) 字の排置あしきこと

(一)は、即ち選に外る、大原因なること論なし。十分練習すれば此失は無かるべきが、いかに練習しても、適當なる手本なければ効なけむ。但し手本なくして善く書く人は此限にあらず。手本は中等學校用として作りたるもの宜し。古人の法帖は、字形は學び易きがありても、筆意は學びがたし。掛幅、額面、柱聯、書籍の題詞などは、手本として可なるもあれど、一概に適當とは謂ひ難し。是等は書者の人物こそ大抵有名のものなれども、さりとて、必しも書に巧なるには非ず。

(二)の失點は、手本に據れば、大抵その恐れなし、但行草體は、その結成を能く知らざれば、手本に據りつつも、誤字を書くことあり。草書に於て一字の境界の分らぬまゝ書きて失敗したる例あり。楷書にても、教育勅語の全文を書きて、大抵可なり出來たる中に、憶を憶と誤りたるにて、折角の骨折が水泡に歸したる例もありたり。是自己の臆斷によりて、手本に據らず書きたるによるか。

三も、亦た自己の臆斷にて書くものに多し。

(四)の失は、長き文詩の一部を、何の考なく抄出するより起る。上章の末と下章の首とを連書する如き、其一例なり。千文字の中を抄出するにも、心得あり。苟もすべからず。

(五)の失は、修身勸學に關する語などを擇ばずして、月に酔ひ花に遊ぶとか、粗暴奇僻、若くは、悲觀厭世に傾く語などを漫然と書くをいふ。かく穩健ならぬ語句を書くは、書道の汚れは更にも言はず、其人の平素の修養の心掛空しき程も見えて、かたはらいたし。

(六)の失は、多數の字を一行に書きて兩傍を甚だ廣くし、行と行との間を兩邊よりも廣くし、上下に多少の餘地を置かず、及び、毎句を別々に引離すなどをいふ。凡そ唐紙半切ならば、一行にて大字五六字、二行にて

一行八字乃至十字、其他更に小なる字には行數を適當に増加すべし。四半切、これに准ず。

右の諸件は、諸君の平素より心得べき事、特に、かかる競争揮毫の際に心得べきことなり。要するに己の書かむとする字は、成るべく教師などに豫め示して、其差圖を受くべし。更に言ひ置くべきは、字を隈取る事、是は最見苦しく、且つ卑劣なる振舞なり。一たび墨を落さば、字形善くても悪しくても、男らしく、それに措くべし。是等は、心の修養上大に關係あること故、審査の際は、嚴に觀察して、一箇處も此様子あらば、直ちに廢棄すべし。又た自己姓名の文字、概して粗拙なり。其人の筆道の巧拙は、姓名の字にて早く知られ、又これが爲めに、本文の書き様の佳なるものをも効力ならしむる事ある故に、展覽會の時に限らず、何時にても、不斷注意して姓名を書き認むべし。

### 松陰追慕會に於ける村上會長講話の要旨

H、F 生 筆 記

本日は松陰神社秋季祭の當日であるにより、此れから例により參拜する。しかし、其前に、すこし講話をしたい。一昨年より、毎年、當日を以て、先生の追慕會を開き、先生に關する講話をすることとしたが、昨年は、松本先生の有益なる講話があつたから、諸子は先生につき、未だ知らない所を知り、未だ聞かない所を聞き、先生の感化を受けたことは少くないと信ずる。余は今より、先生遺文中の語句につき、少し話したいと思ふ。といふのも、先生の人格が、先生の詩歌文章中にあらはれて居ることが多いからである。しか

し、英雄能く英雄を知るといふから、先生の如き偉人を能く知ることには、偉人でなければ出来ない。我々の見る所は、眞に其一斑であり、其片鱗であることは免れまいが、それは仕方がない。先刻配布したる刷物は、安政六年、四月二日、先生が、野山の獄中から、野村和作に贈られた手紙の中の一節であつて、之を味へば、我々にとりて、よき教訓となることと思ふ。先生が、幕府の嫌疑を受けて、野山の牢に幽囚の身となられたのは、安政五年、十一月二十二日、翌年、五月二十五日に、江戸に呼び出されて、此地を出立し、涙松の下にて、諸友に別れ、最後の一瞥を、此地に向けられたのである。現今の松陰神社春季の祭日は、此日を、直に、太陽曆に當てたのである。先生は江戸に著かれて、七月九日、傳馬町の獄に下られた。幕府は二回ばかり吟味して、直に、死刑を宣告した。十月二十七日に、先生は、小塚原にて、從容刑に就かれた。其日を太陽曆に換算したものが即ち今日今日である。されば、今日は、先生を追慕して、其遺風を仰ぐ者に取りては、最も重き日である。さて、野村和作とは、故の品川彌二郎子爵と共に、先生から最も愛せられた弟子で、入江九市といふ人の實弟である。入江といふ人は偉い人物であつたが、惜いかな、京都の變動の時に死なれた。和作といふ方は、其後、大に國事に盡瘁し、功を以て子爵を授けられ、内務大臣遞信大臣にもなされた、野村靖氏其人である。先生の手紙は、憂國の精神から出ぬものではなくて、其を讀めば、今も、なほ、吾人を感奮興起せしむるが、此の野村氏に與へられたる手紙の如きは特にそうである。

何分誅せらるゝにもせよ、此の冬の間には合ひ不申、いづれ來年の事なり。來冬までは餘日もある事故、互に勉強して、學問をしよう。僕來獄以來、頗る進歩を覺ゆ。兩つなき命なれば、惜んだ上にも惜み、最上至極な所を行らう。

此の先生の推測は當らなかつて、先生は、其歳に、刑に就かれたが、兎に角、先生の意では、此の冬は、まだ、此首は落ちぬ。此首が落ちるのは、來年であらう。其故、しつかり學問しやうといはれたのである。此處が、先生のえらい處である。此の處を、よく考へねばならぬ。普通人ならば、いづれ、遠からず死ぬる身じや、學問なんかいるものかと自暴自棄してしまつてあらう。然るに、先生はさうでない。大丈夫たるものは、決して醉生夢死すべからず。たとひ、明日死なうとも、死ぬるその時までは、務める筈の事を務めねばならぬとの精神であつて、實に立派なものである。唯死にさへすれば、我事がすむといふ様な無責任な考てはない。そこで、若し殺されるならば仕方はないが、殺されて居るならば、一日でも、二日でも、學問して、修養を積み、精神を研かうと申されたのである。命をしむといふことに、二様がある。一つは、死ぬることがこわさに、道をはづれても、義理を缺いても、なるだけ死ぬまいとする卑怯者であつて、一つは、責任を知り、天職を重ずるが爲に、此命を粗末にせぬ。死ぬる其時まで大切に、死ぬる時には、屑く死ぬる人である。命を大切にするのは、死ぬる事が出来んからではない。死ぬるより一層大きな事を考へて居るからである。古來のえらい人といはるゝ程の者は、みな、命を粗末に考へて居らぬ。石田三成といふ人は、大奸物の如くいはれて居た人であるが、近頃、朝吹英二といふ實業家は、三成の人となり喜び、當地出身の渡邊文學士に依頼して、其傳記を書かせた、萩圖書館にも一部ある。彼は、決して尋常の人ではない。やはりえらい所のある男である。その三成が捕虜となり、刑場に送らるゝ時、咽が乾いて、湯を求めた。警固の者が、水はない、干柿があるから、之を食うてはどうかといつた。ところが、三成は、干柿は味の毒といふから食うまいといつた。警固の者が、追つけ死なねばならぬ者が、毒忌はいらぬ事ではないかと笑つ

たら、三成は、一旦、大事を思立つた者は、死ぬるまで、素志を貫く事を忘れてはならぬと答へたといふ話がある。人は、死ぬる其時まで、生命を大切にせねばならぬといふよき手本であると思ふ。此は、身体を大切にすることであるが、衛生ばかりではいかぬ、同時に、精神の修養をもやらねばならぬ。明日死ぬるからといふて、修養を怠つてはならぬ。出来るだけやらねばならぬ。先生のかゝれたのは此處である。此文句で、先生の精神が、誠によくわかる。其の主意は、餘命を空しくすごしてはならぬ。明年までの命なれば、特に惜まねばならぬ。惜みて修養せねばならぬ。これも、先生の平素の修養がつんで居つたればこそ、こんなことがいはれたのである。孔子は、朝聞道而夕死可也と云はれた。晩には死ぬと極つて居ても、精神修養はやらねばならぬ。先生は、孔子の此精神を體得せられたのである。先生の學問は眞の學問である。口耳四寸の學問ではない。今の書生の學問は、兎角、耳から口まで、僅か四寸の間を通過する丈であるからいかぬ。心證體得をしないからいかぬ。先生等の學問はちがう。それ故、一言一句、一舉手一投足、ことごとく力があつた。先生が、命を大切にせられた精神がわかつて、始めて、ほんまに、命がけの仕事をする事が出来る。命がけてやらねば、えらい事は出来ぬ。地位財産などを考へる様で、何が出来るか。先生は、命がけて、國事に盡された。それでこそ、あの様な立派な人になられた。命を惜む奴が、兎角、命を粗末にする。命を粗末にする様な奴には。本途の命がけの仕事は出来ぬ。命がけの仕事をしたければならぬから、命を粗末にしてはならぬ。死ぬる其時まで、命を惜まねばならぬ。修養せねばならぬ。かういつたらば、中には、今日の如き太平無事の御世に於ては、先生のやうに、命がけてやるやうな仕事はないから、先生の教訓も、我等に取りては、無用であるなどいふものもあらう。が、それは大間違である。先生の此教訓は、何事にも應用する

ことが出来る。學生の試験について云へば、初日に、數學に失敗して、點が少なかつたから、もう駄目だなどと、其跡を投げすてる如き者がある。此が間違だ。先生の教訓を、かういふ處に應用せねばならぬ。數學が、如何にまちがつても、英語が、如何にまちがつても、やはり勉強せねばいかぬ。落第するに極つたからとて、自分は、いづれ落第する。落第する者が勉強したからとて駄目だなど自暴自棄するは、大に不可である。是は、甚だ、先生の精神に戻つて居る。徒歩競走をやる者が、一番後れたからとて中途で已めてしまふ事がある。是がやはりいかぬ。最後の決勝の合圖が鳴るまでやらねばならぬ。やつて行けば、反つて、優勝者になれるかもしれぬ。最後までやつて見ねばわからぬ。先生の此教訓は、あらゆる方面に應用する事が出来る。此手紙の一節には、千萬無量の意味がある。此一節は、常に、之を讀みて、自ら戒めてもらひたい。失敗でもした時は、必ず、先づ、之を讀むがよい。よい御守になる。八卦を見て貰つたり、神佛に立願したりしたからといつて、自ら奮はぬ者には、何の効もない。其よりは、此御守を大切にすることがよい。何より靈驗があるであらう。

### 陸軍中佐國司伍七氏講話の要旨

柏村稔三 枝村英介 筆記

私は、明治三十六年獨國に留學し、三十七年に歸國致しまして、滿洲軍參謀本部附參謀として、日露の戰役に參加した者であります。御承知の通り、沙河、遼陽、大石橋等の戰も、面白くはありましたが、而しながら、其の局面が實に廣いものだから、即ち、五十里にも、戰線がわたつて居たから、實際參加した者でも、

其の様子が、十分には、明らない。旅順は、割合に、戦線が短かつたから、比較的、全局面の戦況が、よく知られた、私が、實際に参加して見た所を、今から、御話して見ませう。しかし、其とても、十分といふ事は、とても出来ません。先づ、地形から申しますと、大畧、次の様なものであります。東港は、人力で造つた物でありまして、大艦も、容易に、横づけになります。入口は、非常に狭くて、大艦は、一隻づつてなければ、出入が出来ません、堅固な黄金山砲臺、其の他、東方には、到る處に砲臺があり、又、東雞冠山砲臺、二龍山、椅子山、案子山、松樹山等の要塞が、旅順を取り巻いて居るのであります。二龍山から松樹山までを、本防禦線と云ひ、案子山から椅子山までを、第二防禦線と云ひ、白玉山黄金山までを、第三防禦線と云ひ其の中が即ち市街と云ふ様なわけなのであります。戦は、二月八日に、旅順港外で始まりました。日露兩國とも、開戦の命の出ない内に、先方の軍港に推寄せて、出港する敵艦を全滅させやうと云ふ同じ考を持ってゐたのであります。日本の方が、つまり少し早かつたのであります。即ち、日本は、二月八日までに、回答を寄越さねば、開戦すると、栗野大使を以て、露政府に通知してあつたが、彼は、日本が、かくも、早く始め様とは思つてゐなかつたらしい。一方、東郷艦隊は、二月七日に出港しました。露艦隊は、二月九日未明に、佐世保攻撃と定めて、當直員の外は、残らず、市街に上つて、盛なる送別の宴をはつて居りました。而かも軍艦は、全部、港外に假泊して居つたのです。我が艦隊は、全部、燈火を消し、眞黒な中を、旅順港さして進みました。處が、前申す様に、敵艦が、港外に居るものだから、先づ、水雷艇を以て、敵艦を攻撃させたのであります。敵は、不意を喰つて、其の騒ぎ一通りでなく、港内指して、我先にと逃げ込み、非常な損害を受け、其の旗艦はやられ、中には、味方同士衝突したのもありました。依つて、露帝は、一方、士氣

を奮はしむると同時に、大いに日本を威嚇しやうといふので、有名なるマカロフ將軍をやりました。彼は、即ち、長山列島に、艦隊を集合して進んだのであります。早くも、之を知りたる東郷提督は、大いに、之と戦つて、其の旗艦と共に、あはれ、望を屬せられしマカロフ將軍を、海底に沈めました。これからと云ふ者は、敵は、少しも港外に出ないやうになりました。しかし、何時出るか明らないから、未だ、安心して、陸兵を上陸せしむる事は出来ない。それで、西洋各國からは、其の大膽なのに驚くといふよりは、寧ろ笑はれた、旅順閉塞隊なるものを作つて、之を實行したのであります。其の御蔭で、第二軍を、普蘭店に上陸せしめる事が出来、そして、南山の激戦に、大勝を得ました。此第二軍は、第一、第九、第十一師團の精兵を以て組織せられ、乃木大將、此が司令官となり、難攻不落と謠はれた旅順口を、其の背面より攻撃せられたのであります。七月の下旬には、小孤山、大孤山、水師營等を取つてしまひ、其れから、懸命になつて、旅順占領を急いだのであります。其の裏面には、大なる政略的關係がありました。と云ふのは、即ち、旅順を占領すれば、世界に對して、日本の信用が高まり、従つて、金が出来ると云ふ様なわけなのであります。此處で、一寸、砲臺の説明を致します。先づ、砲臺に近づくと、一番始めに鹿砦、其の次が鐵條網、其の次が外濠（深さ六米、カボニエルと名づく、一種の空所あり、外岸穹窿の左右より、機關銃をうつ）外濠より、墜道を以て、輕砲位地の下を過ぎ、重砲位地に達して居ります。重砲は其の下に、兵士の、居室があつて、我が兵に、其の影を見せずに、容易に發砲することが出来る仕掛となり。重砲位地の後部には、内濠があるのてあります。八月上旬、夜に乗じて、敵陣に突貫しましたが、今云ふ様な準備がしてあるのだから、如何に、我が兵が勇敢でも駄目である。第一回總攻撃は、見事失敗に終りました。中でも、二龍山に向つた第九師團

の如きは殆ど全滅と云ふ有様でありました。依つて、原則に従つて、穴を掘りつつ、敵壘に近づくべく開始したのであります。其の穴といふのは、一直線にすれば、敵が、其の中へ大砲をうつ恐があるから、電波形に掘るのでありますが、九月下旬になつても、僅か十町しか出来ない。て亦、無謀にも、第二回總攻撃をやつた。蟠龍山を取りて、之を根據として、敵に向つたが、人力は、未だ、文明の器に勝つこと能はず、第一回同様、不成功に終つたのである。依つて、又、例の穴掘りを始めねばならない様になりました。段々進んで、遂に外岸穹害に達し、之を取りカボニエルを取るには、土俵を用ゐるなどして、十一月の下旬になりました。此時、彼のバルチック艦隊が、佛領カムラン灣に入つたと云ふ報が來ました。其れから計算しますと、一月の始には、我が臺灣海峡に來る様になります。而るに、旅順の内には、七隻の敵艦があり、バルチック艦隊は、數字上から申しますと、日本艦隊より有力であります。其に、我艦隊はといふと、其の修理の爲に、少くとも、一ヶ月を要するのであります。以上の理由からして、旅順の占領と云ふ者は、いやが上にも急がねばならない様になりました。そして、十一月の二十六日に、第三回總攻撃を開始したのであります。各方面共に、二十八日の榴弾を以てやり出しましたが、ベトン帯には、少しも其の効目が無い。即ち少し滑つて、空中で破裂するのであります。第一回の突撃隊は、遺憾にも、無効に終つたので、更に、第二回を試み、戦友の相繼て斃るる死體を踏越えて進みましたが、やつぱり駄目でありました。處が、二人の將校らしい者が松樹山と二龍山との間の城壁に登つて、しきりに、部下をばげまして居りましたが、丁度、其處へ、彈丸が飛んで來て、二人共死んでしまつて、どうしても、日の丸の旗をかかげる事は出来なかつたのであります。其の二人の將校が立つて居つた時間が僅か二分間であつたと知つては、實に情なさに、涙も出ない位であります。

戦は、午後二時まで續いたが、どうしても、占領の合圖がない、二時になると、松樹山、二龍山共に沈黙の有様となつた。そして、乃木將軍は、復命して、砲戦を始めたのであります。そして、四時になると、突貫をやりましたが、前回同様、少しも効目がありません。午後六時まで續いたが、一人も、防禦線内に入る者がありませぬ。死屍纍纍、草木皆腥しと云ふ有様で、各方面ともに兵力なく、萬一、敵が、其れを知つて、一面より突撃して來たならば、第三軍は實に危い運命に陥るのであります。て、仕方がないから、遂に、中村少將の率ゐる一旅團（是は、乃木將軍が、最後の手段として用ふるために、始から残して置かれた者であります）に、抜刀隊を以て、決死を覺悟して、敵陣に突入るべく命ぜられました。午後六時、少將は、部下と共に輕装し、目じるしとして、兵には一すぢ、將校には十文字の白襟をかけさせ、敵たりとも、聲を出さずに、之を刺し殺せと云ふ命令を下しました。松樹山の少し西にある砲臺の眞下まで敵に見られずに進軍致しました。水師營を出て、本街道を進んで來た二十四箇中隊の内、此地に到着したのは僅か二箇中隊のみ。銃劍を以て、盜賊の様に、のそりと、無聲で敵陣に入るのであります。始の程は、どうやらうまくゆきましたが、敵が遂に知りましたからたまりません。サーチライトを照すと共に、大砲をどんどんあびせかけますから、彼我共に混戦の内に、全部やられました時は、流石の大將も顔色を失はれました。が、四圍の情況は、旅順の占領を切望する事いよいよ切てあります。百計既に盡きました。是にたつた一つの方法があります。其は即ち二百三高地を取ると云ふ一事なのであります。二十七日から、之を開始し、百米の處までは、穴を掘つて進みました。が、赤坂山から、機關銃を以て防害をしますから、第一師團の半分と、友安少將の率ゐる後備の一箇旅團とを以て、赤坂山と二百三高地とに向つたのであります。此の激戦は、夜に入つて、益々

其の度を加へたのであります。我が軍が、二百三高地の約三分の二位昇ると、赤いランプが、敵塞の一番上からスウツと上る、そうすると、椅子山から、サーチライトで照して、砲をうつ、ランプが下る、大砲は休む。今度は、小銃戦に續いて爆發戦が始まる。次第次第に、火が下つて、遂に山の三分の一位の處で消えるのであります。私共の陣地から見居りますと、實に不思議でなりません。やがて、報知が來ましたが、又も不成功でありました。二十八日の日より、土俵を築き築き敵に近づいた。其の内に、夜になると、又例の赤いランプが昇つて、昨夜と同じ事をして、靜かになる。晝の間の奮戦は、又も水泡となつたのであります。此の夜故兒玉大將が、第七師團の一聯隊の兵を以て、乃木大將の處へ來られて、「君が死んでも、僕が居るから安心してやり玉へ」と云はれました處が、乃木大將は、「命をかけて必ず占領するから、後事を頼む」と云はれて決死の色が表はれて居りました。二十九日には、第七師團の將校を連れて來て、地形をよく見せました。三十日、相變らず二百三高地の西南部と、赤坂山とへ彈丸を送りました。七師團の内に私の一友が居りました。高崎山に來て、私と二人で、要塞戰の困難を、互に話して居りました。私が、「要塞戰では、將校が、後から行くがよい」と云つた處が、彼が、「馬鹿云へ、己が一番先に行つて、先づ、敵をやつつけるから、酒の一升位買つとけ、向からまねくから」と答へました。實に、彼等は、此の様に元氣充滿たる者でありました。それもその筈、北海道から出て來たので、未だ、一度も、敵と戦つた事が無いものでありますから。赤坂山に向つた二箇中隊は、二分間で、全部やられました。日暮までに、やうやう、一箇大隊（五百人）位の兵が、東の方の部分へ上りました。が、悲しい哉、又例の赤いランプが出て來ました。三十分位で全部死んでしまつたのであります。赤坂山より、又報知が來ました。始め一箇聯隊進んだのが、今は、私の友人の吉野大尉が、

中隊長として、二百人ばかりを率ゐて居るばかりであります。食物がないから送つてくれと云ふのであります。第七師團長は、僅か一日の間に、自分の兵士の約三分の二を失つたので、色を變へて居られました。處が、丁度其處へ、二百三高地の方から、「旅順口が見へる、白玉山下に七隻の軍艦が假泊して居る」との報知が來ました。それで、二百三高地の一部分を開きて臺として、觀測所を拵へて、敵艦をやつとけると云ふことになりました。其の夜、大急ぎで之を作りましたが、翌一日の朝、一撃の下に破られてしまいました。それ、二説が起りました、海軍から來て居た岩村中佐は、どうしても、觀測所をつくつて、軍艦を沈めねばならぬ。萬一、敵艦が港外へ出るといけなと云ひました。而し、私は、如何程人命を捧げても、この有様では、觀測所を作る事は不可能であると主張しましたが、結極、兒玉大將の命に従つて、二人で、其處まで、様子を見に行きました。私が、帽子を、竹の先にさして、一寸出しました處が、例の機關銃がすぐやつて來て、無數の穴があきました。十二月二日、第四回を開始しました。大孤山から、報知が來て、「二百三高地の後にも、敵兵の死體が多くある。新市街より、風變りの應援が來た。處が、丁度、其へ二十八珊が命中して、一人も残らず全部死んだ」と云ふことが明りました。意ふに、之は、水兵が應援に來たのでありませう。大砲で、敵の後方をうち乍ら、我が軍は、又も二百三高地に向ひました。例の土俵を築きながら進みました。惡戦苦闘の上旬、遂に頂上に達する事が出來たので、三日を一日置いて、四日から、岩村海軍中佐の言を納れて、軍艦を攻撃しました。二十八珊は一萬米突有効なので、丁度、港内まで、丸か達します。此の日に三隻だけ、敵艦をやつつけましたが、傾いたがりて沈みませぬ。潮が満つるに従つてだんだんと、影が見えない様になりました。次の朝は不幸にして、霧のために、軍艦がみえませぬ。午前十一時頃になつて晴れましたが、軍

艦はまだ居りました。岩村君は、大笑で、又うち出しましたが、一隻だけは、遂に港外に出てしまいました。よく考へて見ますと、敵艦が、かくも、早く港外に出なかつたのは、水兵を、二百三高地に、應援にやつた其の爲なのであります。話變つて、コンドラチエンコ將軍は、旅順の東の方を防いだ有名な人でしたが、不幸にして、二十六日、會議中の處を、二十八珊に見舞はれて、其が爲に、死んだのであります。大約、右の様な有様で、旅順は、遂に、明治三十八年一月一日と云ふに、日本の有となつたのであります。思ふに、旅順の大勝奉天の大勝、之は、皆、我が日本魂の力によるのであります。病院に居る負傷兵を見舞ひますと、異口同音に「内地へ送りかへされる様なら、戦地で死んでしまふ。今さら、何の面目があつて、おめ／＼國に歸られよう」と云ふのであります。諸君よ、實に、此の軍人あつて、大敵ロシアを敗ることが出來たのであります。此の精神があつたればこそ、戦へば勝ち、攻むれば取つたのであります。諸君、而るに、戦後日尙淺き今日、六七年にもならない今日、我が國民は、日本魂を失ひはしませぬか死は鴻毛のそれよりも輕しと云ふ精神を捨て、しまつたのではありますまいか。近頃、所謂社會主義などいふ者が、日本に唱道せらるゝ様になつたてはありませんか。天皇あつて國家の成立する所の日本には、實に厭ふべき現象であります。西洋は、人民が本位である、だから社會主義もよいかも知れないが、日本に於ては、絶対に不可である。其の異國の道を持つて來て、此の神聖無比なる我日本帝國の國體をけがさんとして居る、實に慨嘆に堪へない次第であります。もし、我が日本國民が、段々と、社會主義を奉ずる様になつたらどうてあります。戦に破れ無限の辱を受けたる露國は、必ずや、十分の準備を成して、我に復讐するてあります。其時其の場合、此の帝國を如何にしますか。あゝ、三千年來、綿々として續いたる我が帝國、必ずや、亡國の悲運に逢

ふてあります。附いては、教員は、十分なるが上にも十分に、小供の頃から、よく、我が國體の如何なる者なるやを知らしむると共に、家庭に於ても、よく注意するところがなくてはいけません。思ふのであります。昔は、武術を勵んだのみならず、其の心の修養と云ふことに、十分力を注いだ者であります。處が、今日では、學校に於ては、時間が不足でありますから、家庭と相待ちて、其の實を擧げる様にせねばならないと思ひます。ハイカラ主義ばかりまねして、日本をしてハイカラ國とならしめるのが、決して我等の目的ではない。元より、西洋のことをまねて、進歩發達を謀るが爲に、彼の諸國の文物を輸入するのも必要であります。が、而しながら、如何なる偉大な人物と云ふても、缺點はある様に、西洋の事と云ふても、全部吾が日本人がまねてよいと限つてはをらない。國體に不適當な事物は、どこまでも、之をしりぞけねばならぬのであります。甚だ無禮な申し分か知りませぬが、西洋では、小學校で、手工をやらせるのがあります。それは、西洋では貧者と富者との學校が別であります、それで或種の學校にはそんな必要もありません。然るに、日本では、貧者も富者も一緒な學校でありますのに手工を課して居ります。私が、彼地から歸つた時、小供が、マツチの箱をはつて見せました。私は、小供に、マツチの箱をはらせやうとは決して思はない。西洋の事と云へば、一も二も無く、まねをするとこの様なことが起つて來ます。だから、輸入する者に附いては、よく考へて、例へ善事でも、日本に適するかどうかと云ふ事を、深く、研究せねばなりません。日本國民の、第一に務めねばならぬ者は、申すまでもなく、忠と孝であります。世の教育家と稱する者に、やゝもすれば其の枝葉を論じて、其の本を忘るゝ者があります。遺憾の事といはねばなりません。各國は日本人を目して、鬼と云つて憚つて居ります。此の名を維持するには、どうしても、日本魂が必要であります。亦其の第一の

方法としては、在郷軍人會と學校とが相待つて、日本魂を、小供の時から、十分養はせると云ふことが必要であります。かくすれば戦争當時の如き立派な國民が、何時までも出来るのであります。日本魂は、つよいはつよいけれども、此鬼には金棒がありません。あつてもが、短いのであります。て之を長くして、力と相當する様にせねばならないのであります。昔から、日本では士農工商と分れて居て、武士と云はるゝ者は、金をまうける事などは、甚だ卑んで居た。其の結果遂に、遊んで居て食はうとする様な惡風が出来ました。是れ即ち恣賊主義であります。だから滿洲では、見事失敗して居てはありませぬか。我々日本國民は時間を徒費せず、骨を措かず、どん／＼働いて、而して、日本の金棒を長くせねばなりません。要するに、今は覺醒すべき時であつて、何でも彼でも、西洋にまねると、西洋化したおかしな、日本が出来て來ます。それで諸君も、十分、此點に注意して、すは戦争といふ時には、何時でも敵を敗るだけの準備をして置かねばなりません。我が防長は昔から、武を以て名を成して居ります。我田引水の様でありますが、武備の調つて居ない國はつまりません。獨國が近年盛んになつたのも、武が其の元であります。武が元となつて、従つて商工業が起るのであります。長々と御話し致しまして、さぞ迷惑でありましたらうが、何とぞ、私の云ふことを、水泡に歸せしむる事なく、十分、今日の日本なるものを御考へ下されん事を切望致します。終りに臨んで一つお笑話を致しませう。二百三高地の占領がかくもむつかしかつたのは、深い原因があります。二百三と云ふ數字は、二で割れば一が残り、三で割れば二が残り、四で割れば三、五で割れば三、六で割れば五、八で割れば七、九で割れば五が残り十一でも十二でも割れませぬ、七ならば割れます、即ち二十九になります。我が國には、十二師團ありますが、七師團でなければ割れません、即ちとれないのであります。而かも二十九

九でなければなりません、即ち十二月二十九日にやつたので、全く之を取ることが出来たのであります。諸君御謹聴を感謝致します。

### 久原房之助氏演説の要旨

H、F 生 筆記

諸君、奨學資金の件につきましては母の代理として、唯今、兄が一通り申述べました所によりて、母の意趣は、大體御了解下された事と信じますれば、其につきては、私は何も申上げる必要はありません。唯私は母に隨行して此地に参りました丈のことでありますが、多少世間から誤解せられ居るやの掛念もありますれば、聊所存の一端を述べて、私共來萩の意を明にして置きたいと思ふのであります。此度私共の歸省した本志は、五十年忌の佛事を營み度といふのであります。然るに、久々の歸萩の爲、豫期以上の騒ぎとなり、竊に心痛し居る次第であります。園遊會を開きましたることに付しても、世上には多少誤解せられ居る様であります。私の方の考では、久々にて、舊知の諸君に御面會の好機を得たれば、一夕緩々懇談申し上げたいと思ひましたけれども、何分多數にて、適當の家屋もなく、さればとて、之が爲に多數の日子を費さむことは、私の事情が之を許しませんし、主人として、來賓を接待する上に、園遊會は至極便利であると考へました故、かた／＼かゝる手段を取りました譯なので、決して、故郷に錦を飾るなどとそんな了簡は、老人は勿論、私共一同毛頭もありません。誤解など來ししては、母にも氣の毒でもあり、又此地青年諸君に對しても、一種の面白からざる影響を及ぼしはすまいかと云ふことを恐るゝのであります。要するに主意は先靈の

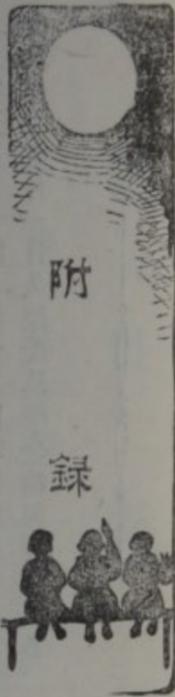
供養に在りて、他に何等の意味もありません。私は尙青年の未成品であります。將來如何に成行すべきか、今日之を豫知することは出来ません。されば、かゝる誤解は、私に取りても甚迷惑する所であります。又或向きよりは、かゝる費用を一般の有益なる事業に用ゐたらばとの忠言もありました。如何にも尤な事ではあります。併し、何分本人は老人でもあり、婦人でもあり、それ故、兎に角に、高齢者を優遇し、又貧困者を慰め、神社佛閣を修理し、小兒子弟を喜ばせて見たいとの意向がありましたので、結局老人の心にまかせてかくは計らひましたのであります。其の邊の意を充分酌量して貰へば、自然と氷釋することゝ信じます。本校に奨學資金の方法を設けましたのも、前陳諸件と同様、老人の意向に出てましたので、私共は老人の意を承けて之を實行するまでの事でありませぬ。其間にも、萬一誤解などありましては、私共の責任は少々でありませぬ故に、此に一寸辯じ置きます。諸君は、何卒十分に老人の意を酌量して、老人の希望を空しからざらしめられんことを願ひます。當萩の地は、嘗に夏蜜柑の産地たるのみならず、人物の産地であります。過去に於いてさうであつたのみではならぬ、將來にもさうでなければなりません。老人の所爲を誤らしめず、萩地の將來を誤らざる様、諸君の注意を願ひたいので、蛇足ながら一言を加へておきます。前述の通り、萩地は、夏蜜柑の産地たるのみならず、亦人物の産地であるについては、今後も、其跡を絶たぬ様、續々之を出さねばなりません。此點につきては、諸君は重き責任があります。漫然経過せられてはなりません。就いては、何か諸君の御参考にもなる御話でもすることが出来ると宜しいですが、何分私が青年の未成品なので、遺憾ながら、之と云つて御話すべき材料が有りませぬ。がしかし是迄自己の経験した事に基づき、聊か所感を述べて見ませう。私が諸君に申したいと思ふことが二つあるのです。第一は、世に立ち、自己の生存

を意味あらしむるには、一旦志したる事は遂げざれば止まぬと云ふ精神を持することでありませぬ。之を本領とするときは、何事も輕舉妄動することは出来ぬ。己の蒔きたる種は己必ず之を收めねばなりません。世には種々の事情あり、境涯あり、逆境に立ちて、百事意の如くならざることあり。是は誰にも免れぬ事でありませう。然るに、かゝる時は、直ちに從來の方針を抛ちて他に轉じ、是は不愉快なり、是は面白からずと、轉換又轉換するときは、其内に老衰して、一生を遂に成すことなくして終らねばならぬことになりませぬ。我は致方なし、子供を教育して、子供に何かやらせやうなどいふ考を持つものは、世間に随分其の類が少なくないと思はれます。それでは甚だ意義がないではありませんか、下等なる動物の状態と大差がないといつても不可ありません。かゝるものは、百萬千萬ありたりとて、何の用をもなさぬのであります。生存を意義あらしむるには、事の遂行を要す。左轉右變は遂に何等の意義もないのであります。諸君の生存をして意義あらしめんとせば、諸君は、必ず諸君の希望する所を達すべく心掛けられねばなりません。然らば事の如何を問はず、諸君は必ず其の道に於ける立派なる人となるてありませう。何事でも、其に向つて己の一身を打込めば必ず出来ませぬ。何事でも、己の目的に向つて驀然直進し、自己の存在を認むるに至つたならば誠に結構であります。第二は、人は身心を研かざれば、力が出ぬと云ふこととあります。而して、困難は人間を研く第一の良薬であります。諸君は世に出てて、成るべく多くの困難に遭遇するが宜しいのです。諸君は困難を歓迎せねばなりません。世人の第一の誤は、難きを避けて易きに就くこととあります。かくては、逆も、意志も智識も練磨研鑽は出来ませぬ。困難に向つて突進し、之と奮戦し、之と格闘するは、要するに、己の体力意志を鍛練するのであります。己を研くのであります。人は誰も生知にあらざれば、失敗は免れぬ、如

何に奮闘苦戦しても、失敗する時は矢張りあります。長の三尊と云れたる伊藤井上山縣の諸公でも、初より、かくの如く容易に成功せられたのではありません。幾多の困難を経、幾多の失敗を重ねて、意志を練り、身体を鍛へ、己を研ぎて後、漸次發展成功せられたに相違ありません。家康然り、秀吉然り、信長然り、古來英雄豪傑の士皆然らざるは無いのであります。されば、人物とは、多く困難に遭遇せる者をいふと云つても、不都合はありませんまい、よく困難に耐へ、機會を逸せずして之を捉ふるは、成功を贏得る唯一の方法であります。要するに、一旦志したる事は、必ず之を遂げ、是を遂げるには、何處までも困難に打勝ち、機會に逢着せば、決して之を逸してはならぬ。是先輩の閱歷と自己の經驗とにより、私の深く感じたる所であります。故に反復して御話致しました。是より、私が今日までの閱歷の一端を御話して見るも亦一興でありませう。私の是まで遭遇せし一二の機會を申し上げますれば、私は二十一歳で慶應義塾を出て、學業の方は此にて止め、外國貿易に従事せんと志を極めました。外國貿易に従事するには、人に使はれて經驗するに如かずとの考から、當時評判の高かりし森村市左衛門氏の人格を慕ひ、之に縋らんとて、牛場卓造氏の紹介で森村氏を訪ひました。氏は、安樂に生活して、世路の辛酸を味はざるものはいや、氣の毒ながら當方には用なし、他を擇ぶべしと、マンマと謝絶せられました。是に於いて再び父に相談するなど、爲に半年を過し、神戸に往き廣瀬氏を訪ひしに、森村氏の斷りたるものは、當方にて受ける譯にゆかずと、是亦謝絶せられました。今は百方術盡き、再び森村氏に往き、前意を反復して、切に採用を願ひしに、倉番人足位ならば雇入れてもよしと云はれました。私は大に喜び、それにて可なりと、早速翌日より、金槌を腰にし、森村の倉番人足に入込みました。是時、私の同窓であつた下田と申す人は、已に簿記掛となつて居まして、私の倉番人足とは非常の相

違てありましたが、私はそんな事には一向に頓着せず、一年と三四箇月は荷造仕事をやりました。それは私に取りては却りて幸でありました、私は非常に之に激勵せられましたと同時に、荷造の學習をなし、品物の鑑識の力を得ました。之が爲に後鑑識會の高點を得たこともあります。夜は倉番の帳附の手傳をなしました。此が抜擢の機會を造りまして、遂に外國に遣はさるゝことの命を受けました。然るに、此に又一困難事件の發生となり、爲に折角成りかけた事も挫折してしまひました。その謂は、藤田組の財政困難を來した爲、如何にかして、之が整理挽回をなさねばならぬと申す事で、井上伯の如きも私の洋行には頗る不同意でありまして、急に思止ることとなり、森村組より藤田組へ轉動することとなり、秋田の小坂鑛山に赴きました。かくて二十三歳より三十七歳まで十三年間といふものは、己の希望にもあらざることを山中にてやりました。されば、友人などは私を已に死せりとなしました位であります。此間にも、種々刺撃を受けたこともありましたが、私の發展すると否とは問ふ所にあらず、一旦志したる所は必ず遂げざるべからずとの一心を以て、己を律してやりました。その結果として、遂に鑛山業に従事することになりました。その間、何事が一番私を益しましたかと申しますと、例の強情と必遂の氣象とでありました。若此間に、困難のある毎に他に移らば、私は必ず一生涯を無意義に送つたことでありませう。私は、諸君が、何事にも、此精神を以て當られんことを希望いたします。更に繰返して諸君に申し上げます。此萩の地は、人物産出の能力があります。諸君の如き春秋に富まるゝものは、一層奮勵せられねばなりません。維新の際は時機好かりし故に、風雲の志あるものが、起ちて事を成すには最好の機會であつたとは、今日、人々のやゝもすれば口にする所でありませう。しかしながら、今日は更によいのであります。日本が東洋の主動者たるべきは自然の大勢であります。

南洋の如きは、日本人に取りては恰好の活動場であります。東洋の天地には、維新に百倍せる大機運が常に來往しつゝあるのではありませんか私も此舞臺の一優たらんことを希ふものであります。諸君は此好地位に在り。此好機運に會して居らるゝ者なれば事の大小を問はず、此好時機に乗じて是非とも意義ある生活を遂げられんことを希望いたします。



山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す  
 ○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校とし大に教則を改正す○山口中學の高等中學となり文部省の所管に歸するに及び本校は萩分校と改稱せられ高等中學の豫備校となれり  
 ○二十年四月改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる○同年八月重見氏轉任し線貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり線貫氏校長に任ぜらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月線貫氏萩分校主事を命ぜらる○三十一

附録

年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる○同年四月渡邊盈作氏主事に任ぜらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九拾三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盈作氏校長心得を命ぜらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷兼太郎氏校長に任ぜらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病没せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる○同年十二月七日塚本氏校長に任ぜらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名。是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長

百二十九

第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる。○九月長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校長に任ぜらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名。○四十年三月二十三日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名。○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名。○十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ。○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任ぜらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を頒つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名。○四十二年一月十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名。○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○七月一日久原氏獎學金給與規程成る。

國體といふは、神州は神州の體あり。異國は異國の體あり。異國の書を讀めば、兎角異國の事のみ善しと思ひ、我國をば却て賤みて異國を羨む様に成行くこと、學者の通患にて是れ神州の體は、異國の體と異なる譯を知らぬ故也。

松 陰

# 職 員 表

(大正元年十二月廿五日現在)

| 受持學科              | 職名 | 就職年月     | 姓名     | 原籍地 |
|-------------------|----|----------|--------|-----|
| 修身、英語、歷史、代數、幾何、三角 | 校長 | 明治四十二年四月 | 村上俊江   | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十二年九月 | 松本喜一   | 山口縣 |
| 英語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十二年九月 | 藤原甚吉   | 山口縣 |
| 算術、代數、幾何          | 全教 | 明治三十二年九月 | 安藤野多介  | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十二年九月 | 山田兵吉   | 山口縣 |
| 英語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十二年九月 | 山元章次郎  | 山口縣 |
| 歷史、地理             | 全教 | 明治四十一年五月 | 藤井百輔   | 山口縣 |
| 物理、化學             | 全教 | 明治四十一年五月 | 丸本庄太郎  | 山口縣 |
| 博物、英語、物理、化學       | 全教 | 明治三十八年五月 | 田中市郎   | 山口縣 |
| 英語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 江頭精一郎  | 山口縣 |
| 英語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 本保次作   | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 田總百合之助 | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 栗屋周祐   | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 長東有隣   | 山口縣 |
| 國語、漢文、習字          | 全教 | 明治三十八年五月 | 金子乙助   | 山口縣 |



農科大學卒業在清國  
 據湯縣立能生水產學校教諭  
 哲學館大學卒業萩泉福寺住職  
 陸軍輜重兵中尉  
 未詳  
 三田尻專賣支局平生出張所在勤  
 朝鮮仁川小學校  
 山口縣立萩中學校教諭  
 石油會社員  
 法科大學卒業在郷  
 陸軍步兵中尉(步一八)  
 在郷  
 清國陸軍大佐  
 神戸石炭商會員  
 陸軍步兵中尉  
 愛媛縣立西條中學校教諭  
 愛媛縣立西條中學校教諭  
 陸軍騎兵少尉  
 海軍大尉海軍大學  
 萩町役場員  
 死亡  
 東京帝國大學農科大學卒業  
 萩中學校教諭備陸軍步兵小尉  
 在京  
 陸軍步兵中尉

栗屋春太郎 早稻田大學卒業  
 佐伯益豐 陸軍二等軍醫(山口四十二聯隊)  
 森信丸 門司稅關官吏  
 中村喜代藏 臺灣協會學校卒業臺灣製糖會社  
 安江樺生 國學院大學卒業  
 品川鴻介 死亡  
 河野安宅 死亡  
 栗屋周祐 廣島縣立廣島中學校教諭  
 山根省吾 京都帝國大學助教  
 菊屋孫輔 京都帝國大學助教  
 山根孝一 死亡  
 楠並誠一 海軍大尉  
 上原多一 東京帝國大學院  
 三宅彌太彦 陸軍輜重兵中尉(輜重五大廣島)  
 阿川義介 在郷  
 河野通毅 東京美術學校師範科卒業  
 佐藤虎介 死亡  
 和田專三 下關(租事務員)  
 阿座上長一 海軍三等主計  
 木村彌三 死亡  
 渡邊五六 農科大學林學實科卒業  
 山本百合熊 新潟縣立柏崎中學校教諭  
 江川暢 根室商業學校教諭  
 青水英一 陸軍中尉(步四一)

波根良一 東京高等商業名古屋スタ  
 茶川一 長崎郵便局在勤  
 增野榮三 海軍筆記  
 岸榮市助 東京高等商業學校卒業  
 原川國介 明治大學卒業  
 山本慈雲 神戸稅關在勤  
 兵庫縣技手  
 門司三井物産會社員  
 未詳  
 東京高等商業學校卒業在臺灣  
 紀藤庄介  
 弘毅太郎  
 渡邊儀賢  
 三浦國藏  
 島田八重丸  
 大多和作太  
 鳥尾平七  
 飯尾強介  
 赤川省香

中野清 三池炭坑事務員  
 杉道助 陸軍步兵中尉(步四二)  
 篠原五郎 陸軍步兵中尉(步四二)  
 厚東健二郎 海軍中尉  
 波多野晋平 慶應義塾商工學校卒業  
 田中唯一 東京帝國大學法科大學  
 內田贊 京都帝國大學文科大學卒業  
 八谷俊一 死亡  
 上田米太郎 東京高等工業學校機械科卒業  
 山熊雄 收稅局  
 永富儀三郎 九州鐵道管理局在勤  
 陸軍經理學校卒業  
 以上五十一名

第四回(明治三十七年三月)  
 東北農科大學 モト厚東 津田武雄 未詳  
 陸軍砲兵中尉(野砲七) 香積見彌 未詳  
 海軍中尉 佐田健一 未詳  
 神戶高等商業在新加坡臺灣銀行 佐々木義彦 死亡  
 山口高等學校卒業 兄玉馨四郎 東京高等商業學校卒業モト植木橋 本  
 三池炭坑在勤 林俊香 海軍中尉  
 未詳 白根正輔 鹽務局在勤  
 未詳 中村良弼 東京帝國大學法科大學卒業  
 陸軍步兵中尉(二一) 寺西啓太郎 在滿洲  
 神戶燐寸會社 山下盛太郎 早稻田大學  
 休職陸軍三等主計 宮原藤吉 遼陽石光洋行行員

木津谷泰夫 東京商船會社役員  
 松尾英一 在清國  
 乃美忠次 士官候補生  
 杉山俊亮 東京外國語學校  
 安間定次 獨語專修科卒業  
 福田信彦 在郷酒造業  
 久保田庄作 兵役  
 三浦九一 陸軍中尉(步四二)  
 村田發太 山口高等商業卒業  
 兒玉武男 三見高等小學校教員モト小池有 吉武彦  
 吉見市郎 京釜鐵道在勤  
 藤井晴一 慶應義塾大學卒業  
 新庄昭一 東京外國語學校獨語科卒業  
 伊藤傳次 未詳  
 室田貞一 陸軍工兵少尉(工五廣島)  
 山本公平 早稻田商業學校卒業  
 佐古芳次郎 在清國  
 橋本秀 以上五十二名  
 能美留壽 第五回(明治三十八年三月)  
 高橋熊太郎 東京高等商業學校卒業 大谷清記  
 浮里俊道 東京帝國大學法科大學 大賀幾太  
 青原忠一 東京帝國大學法科大學 榮正範  
 今井武方 東京高等工業學校 仲義輔  
 吉武傳一 海軍少尉 卒業撫順炭坑在勤 寺田幸吉

未詳  
 慶應義塾大學卒業  
 東京高等工業學校染織科卒業  
 農科大學實科卒業  
 大阪商船會社三ヶ濱支店員  
 大阪高等醫學校卒業  
 逕信省在勤  
 在朝鮮  
 陸軍步兵中尉(步四二)  
 內務省福井縣土木出張所事務員片山熊雄  
 在郷醬油製造業米商  
 以上五十一名

第四回(明治三十七年三月)  
 東北農科大學 モト厚東 津田武雄 未詳  
 陸軍砲兵中尉(野砲七) 香積見彌 未詳  
 海軍中尉 佐田健一 未詳  
 神戶高等商業在新加坡臺灣銀行 佐々木義彦 死亡  
 山口高等學校卒業 兄玉馨四郎 東京高等商業學校卒業モト植木橋 本  
 三池炭坑在勤 林俊香 海軍中尉  
 未詳 白根正輔 鹽務局在勤  
 未詳 中村良弼 東京帝國大學法科大學卒業  
 陸軍步兵中尉(二一) 寺西啓太郎 在滿洲  
 神戶燐寸會社 山下盛太郎 早稻田大學  
 休職陸軍三等主計 宮原藤吉 遼陽石光洋行行員

木津谷泰夫 東京商船會社役員  
 松尾英一 在清國  
 乃美忠次 士官候補生  
 杉山俊亮 東京外國語學校  
 安間定次 獨語專修科卒業  
 福田信彦 在郷酒造業  
 久保田庄作 兵役  
 三浦九一 陸軍中尉(步四二)  
 村田發太 山口高等商業卒業  
 兒玉武男 三見高等小學校教員モト小池有 吉武彦  
 吉見市郎 京釜鐵道在勤  
 藤井晴一 慶應義塾大學卒業  
 新庄昭一 東京外國語學校獨語科卒業  
 伊藤傳次 未詳  
 室田貞一 陸軍工兵少尉(工五廣島)  
 山本公平 早稻田商業學校卒業  
 佐古芳次郎 在清國  
 橋本秀 以上五十二名  
 能美留壽 第五回(明治三十八年三月)  
 高橋熊太郎 東京高等商業學校卒業 大谷清記  
 浮里俊道 東京帝國大學法科大學 大賀幾太  
 青原忠一 東京帝國大學法科大學 榮正範  
 今井武方 東京高等工業學校 仲義輔  
 吉武傳一 海軍少尉 卒業撫順炭坑在勤 寺田幸吉



名古屋高等工業學校

兵役

未詳

大津郡深川小學校教員

神戶稅關鑑定官補

神戶鐵道廳經理係在勤

在東京

陸軍士官候補生

在東京

關東都督府大連土木出張所員

山口高等商業學校

大阪坂鶴鐵道會社員

在東京

死亡

神戶稅關吏員

死亡

以上五十六名

第八回(明治四十一年三月)

神戶高等商業學校

山口高等商業學校卒業

海軍機關少尉

東京高等師範學校卒業

岡山醫學專門學校卒業

東京高等工業學校卒業

陸軍步兵少尉

江原一良 陸軍步兵少尉

柳田昇二郎 海軍少尉

長谷川秀一 海軍機關少尉

來島元助 東京高等工業學校

横見莞爾 山口師範學校二部卒業

平川春助 東京高等工業學校

村上欣一 東京高等商業學校

水井精一 大阪高等工業學校卒業

黒瀬白 陸軍士官候補生

福間四郎 長崎造船所

田中豐 東京高等商業學校

中村誠一 未詳

河野次郎 在朝鮮

奧野眞一 陸軍士官候補生

兒玉忠彦 在朝鮮

陸軍步兵少尉

以上五十六名

第九回(明治四十二年三月)

神戶高等商業學校

山口高等商業學校

海軍機關少尉

東京高等師範學校卒業

岡山醫學專門學校卒業

東京高等工業學校卒業

陸軍步兵少尉

石光憲式 東京商科專門學校

濱屋七平 河崎造船所

本原直孝 山口師範學校二部卒業

津守完 長崎高等商業學校

波多間靈 未詳

村田泰 死亡

木村生三 未詳

栗屋潔 未詳

小倉誠一 大阪高等工業學校

杉本基良 山口師範學校二部卒業

原純一 在朝鮮

中村信介 未詳

齋藤新一 早稻田大學師範科

田坂榮助 未詳

岩崎利一 東京帝國大學工科

藤岡良平 同法科

吉岡良平 東京高等工業學校

河內通祐 同上

末永一郎 陸軍士官候補生

藤井愛 陸軍士官候補生

津守猛 陸軍士官候補生

上田重一 在郷

岡德一 未詳

早川 在臺灣

竹重組三

山本顯祐

岡藤又七

松浦純一

伊藤時重

山中喜一

中村道生

西村基助

小倉誠一

野村昇輔

落合實藏

齋藤徹多

白井洗

以上四十四名

第十回(明治四十三年三月)

神戶高等商業學校

山口高等商業學校

海軍機關少尉

東京高等師範學校卒業

岡山醫學專門學校卒業

東京高等工業學校卒業

陸軍步兵少尉

以上三十八名

第十一回(明治四十三年三月)

神戶高等商業學校

山口高等商業學校

海軍兵學校

千葉醫學專門學校

山口高等商業學校

慶應大學理財科

在郷水産業

白水小學校教員

山口高等商業學校

熊本高等工業學校

陸軍士官候補生

第八高等學校

在大阪

慶應義塾大學

植村九一 在郷

工藤三郎 農科大學實科

善市亥三郎 山口高等商業學校

戶田剛三 京都醫學專門學校

田中敬藏 在郷

梅田吉郎 兵役

玉木正之 山口縣師範學校二部

和智孝任 山口高等商業學校

藤井醇一 岡山醫學專門學校

小野太亮 門司鐵道院

枝村匡輔 在大阪

阿部時治 山口高等商業學校

譯元三郎

繼邊寬治

土井武一

村上賢介

安達茂作

金子眞一

福田敬二郎

石津美嬌

益田直養

山一源吾

落合健

福島俊一

村井勝

阿武重元

野北重利

朝枝櫻英

橫田秀一

齋藤忠明

柴田信智

三浦嘉七

榎本勝虎

陸軍士官候補生

東京高等商業學校

在朝鮮

大阪高等工業學校

兵役

大阪高等工業學校

死亡

京都醫學專門學校

陸軍士官候補生

在東京

山口高等商業學校

第五高等學校

在臺灣

增野雅一 千葉園藝學校

安藤芳彦 陸軍士官候補生

石川光一 在東京

渡邊迪知 仙崎小學校調導

大谷祇詮 在郷

村田三介 東京高等工業學校

齋藤定一 第三高等學校

黒瀬禎祿 陸軍士官候補生

永松力 神戶高等商業學校

大田良吉 海軍兵學校

桑原雅亮 千葉醫學專門學校

白井曉彦 山口高等商業學校

松浦好輔 慶應大學理財科

窪井隆三 在郷水産業

田中賢 熊本高等工業學校

相島啓祐 陸軍士官候補生

中原吉雄 第八高等學校

平佐幹 在大阪

大田良吉

桑原雅亮

白井曉彦

松浦好輔

窪井隆三

田中賢

相島啓祐

中原吉雄

平佐幹

第七高等學校

小川小學校調導  
山口高等商業學校  
熊本高等工業學校  
慶應義塾大學  
兵役  
在郷  
存郷

以上四十九名

第十一回(明治四十四年三月)

|       |          |
|-------|----------|
| 藤井百合松 | 大田小學校調導  |
| 高信一   | 陸軍士官候補生  |
| 前田孝男  | 第七高等學校   |
| 田邊礎   | 在東京      |
| 須子伴二  | 山口高等商業學校 |
| 佐々木四郎 | 兵役       |
| 三好敬一  | 陸軍士官學校   |
| 松浦茂   | 東洋協會專門學校 |
|       | 近衛師團入營   |
|       | 在郷       |
| 藤村良作  | 在東京      |
| 廣兼來藏  | 淺田小學校教員  |
| 大谷雄介  | 在東京      |
| 松井隆美  | 第七高等學校   |
| 波佐間久  | 山口高等商業學校 |
| 村田新一  | 熊本高等工業學校 |
| 矢田篤   | 大阪高等醫學學校 |
| 塚本清一  | 白水小學校調導  |
| 西山彦三  | 在東京      |
| 兼谷善二  | 小野小學校教員  |
| 寺戸篤   | 山口高等商業學校 |
| 椋木史朗  | 在郷       |
| 齋藤二郎  | 在京都      |
| 末成茂   | 第五高等學校   |

|       |              |
|-------|--------------|
| 栗栖靜   | 在郷           |
| 古橋清一  | 椿東小學校教員      |
| 上野義清  | 在郷           |
| 兼田唯助  | 在郷           |
| 山崎秀輔  | 在北海道         |
| 飯尾三郎  | 山口縣師範學校第二部卒業 |
| 大田荒輔  | 東京齒科醫學學校     |
| 伊藤道顯  | 在吳           |
| 厚東剛四郎 | 在京都          |
| 桑原義輔  |              |
| 三浦敬造  |              |
| 小枝義雄  |              |
| 河口百合長 |              |
| 山本直正  |              |
| 富田強吉  |              |
| 津田等   |              |
| 齋藤武文  |              |
| 村橋通   |              |
| 柴田龍三  |              |
| 豐中善實  |              |
| 守永自由平 |              |
| 松崎周介  |              |
| 林孝一   |              |
| 原田正三  |              |

以上四十七名

第十二回(明治四十五年三月)

|             |        |               |       |
|-------------|--------|---------------|-------|
| 在京          | 長宗純    | 同             | 內藤千里  |
| 在京          | 原禎造    | 山口高等商業學校      | 平島公平  |
| 第三高等學校二部甲類  | 辻野喜一   | 東京美術學校豫備科日本書科 | 秋本一郎  |
| 東京同文書院政治科   | 高橋保勝   | 山口高等商業學校      | 河內山隆輔 |
| 東京鐵道院       | 大津正一   | 未詳            | 伊佐小次郎 |
| 陸軍士官候補生     | 有倉誠    | 山口高等商業學校      | 松原隆亮  |
| 同           | 黒瀬知一   | 陸軍士官候補生       | 松原慶市  |
| 同           | 厚東四郎次  | 同             | 下村福治  |
| 同           | 日野二郎   | 未詳            | 佐伯繩四郎 |
| 東京高等商業學校    | 波根彌六   | 未詳            | 南部法電  |
| 未詳          | 室田五郎   | 未詳            | 守重哲成  |
| 東京高等商業學校    | 渡邊四郎   | 陸軍主計候補生       | 渡邊梅吉  |
| 岡山醫學專門學校    | 田村眞一郎  | 未詳            | 梯並修三  |
| 東京高等工業學校機械科 | 佐々木四方介 | 在郷            | 秋丸哲夫  |
| 陸軍士官候補生     | 陶村政一   | 未詳            | 生駒林一  |
| 同           | 伊藤義彦   | 山口高等商業學校      | 吉田耕造  |
| 未詳          | 羽鳥陳    | 陸軍士官候補生       | 村上正文  |
| 同           | 石田四月正  | 未詳            | 伊藤清忠  |
| 同           | 岡田正    | 未詳            | 杉山守輔  |
| 同           |        |               | 藤本貢   |

未詳  
 大坂高等工業學校應用化學科  
 未詳  
 大坂高等工業學校採鑛冶金科  
 東洋協會學校  
 在京  
 三隅小學校教員  
 未詳  
 在朝鮮  
 長崎醫學專門學校  
 未詳  
 兵役  
 山口高等商業學校

以上五十二名

片山 豐助  
 岩崎 吾一  
 木村 榮太郎  
 岡田 行雄  
 福田 忍  
 福永 隆太郎  
 坪井 三介  
 奥田 準一  
 上野 實造  
 松永 知義  
 豐田 延雄  
 山田 專一  
 佐藤 政之



會 告

一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は十月末日までとす。用紙は隨意。但一行二十四字詰にして、假名は平假名たるべく、變體假名は成るべく用ゐざること、句點讀點の下は必ず一字分を缺くこと。  
 一、會友にして、本誌の寄送を望まらざる諸君は、郵税共實費金貳拾貳錢（郵券代用妨なし）を豫め送附し置かれたし。本誌の發行は、其年末若は翌年頭たるべし。

大正二年三月二十六日 印刷  
 大正二年三月三十日 發行  
 （非賣品）

發行兼編輯者 山口縣阿武郡椿村 三輪 昂

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 勝 亦 省 三

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社 秀 英 舍

